
遊戯王デュエルモンスターズGX 原作大崩壊物語

大樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王デュエルモンスターズGX 原作大崩壊物語

【Nコード】

N99140

【作者名】

大樹

【あらすじ】

ある日部屋で暇を持て余していたら突如神（自称）が現れて「世界を救え」と言われた。どう答えていいのかわからずうっかり「はい」と答えてしまい遊戯王GXの世界へ行くことになってしまった主人公古城駿がGXの世界を完全に崩壊させる物語。

いっはどっ・・・？ (前書き)

大変下手くそなのでどうかあたたかく見守ってください。

「はいはい・・・？」

「はあーひまだー」ただいま暇を持て余し中です。誰かい暇つぶし知りませんか？　と言っていたらいつの間にか部屋に変な人がいる。

「誰が変な人だっ！」突然現れた変なのはそういった。

誰だよこいつ・・・。まず何故人の心が読める。「それは神だからだよ」いきなりしゃべりだした神（自称）の長話に付き合わされ（ひまつぶせたからいいけど・・・）大変だった。

（数時間後）

長話の末最後にこう言われた「世界を救え」と。どう答えたいのかわからず「はい」と答えてしまった。

次の瞬間一気に景色が変わった。

「ここはどこ？」　その問いかけに答えてくれる者はいなかった。

ここはどっ・・・？ (後書き)

読みづらいとおもいます。是非アドバイスをお願いします。最初なのでだいぶ短くなりました。

最

いきなりデュエルですか（前書き）

また投稿しました。今度は少し長めにしてみます。

いきなりデュエルですか

さてこの謎の世界に来てから数時間ようやくここがどこかわかった。

ここは・・・ここは・・・遊戯王の世界だ。そして僕はこれからデュエルアカデミアの実技試験をうけることになっているらしい。

え？何故知っているかって？それはかばんをあさったら受験票が入っていたからだよ。受験番号は1番筆記は良かったらしい。が、すでに試験の時間は終わりがけてしまっている。とりあえず走ろう。試験を受けられないのは嫌だ。

数分後

はあはあようやく着いた。幸いほかにも遅刻した人がいたおかげでまだ試験は終わっていないかったらしい。

そのまま試験会場に入ってみる。まさか遅刻した受験生って・・・。

「フレイムウィングマンでアンティークギアゴーレムを攻撃。
スカイスクレーパーシュート。」

。「マンマミーヤ。」 やっぱり。 遅刻した人って遊城十代か・・・。

「受験番号1番。今すぐデュエル場へ来なさい。」 あ、呼ば
れてるでは行きますか。

は・・・何だただの試験管か・・・。 と思ったらあいてはクロノス
かー。 さてと僕の相手

まあいいや。すぐに終わらせよう。

「このデュエルで汚名返上をするのーね。」 こんな感じで
デュエルが始まった。

「「デュエル」」

シンクロ召喚（前書き）

今回はデュエルです

シンクロ召喚

「私のターンドロー」

先攻はクロノス

「カードを二枚伏せて魔法カード大嵐発動

べて破壊するのーね。

この効果で場の魔法・罫をす

そして破壊された二枚の黄金の邪神像の効果で

自分の場に邪神トークン

二体を特殊召喚するのーね。」

喚したということはあれが来るか。

邪神トークン二体を召

そして私は二体の邪神トークンを生贄に、

アンティークギアゴーレムを召

喚。

カードを二枚伏せてターンエンドなのーね。

さあ私の最強モンスターを

倒してみるのーね。」

いきなりアンティークギアゴーレムか、まあそう驚くようなことではない。と、いうよりは邪神トーク

ン二体のためだけに大嵐を使うって無駄じゃない？

そんなことにも気付かずに「終わったな」とか言ってる人いるけど・・・。

まあ面倒だしワンキル

でもしますか。

「僕のターン ドロー」

駿のターン

手札抹殺発動

「魔法カード大嵐を発動。そして魔法カード

でお互いのプレイヤーは自分の手札をすべて捨て

この効果

その枚数分デッキからカードをドロースる。」

いのーね?」

「イキナリ手札交換とーはよほど手札が悪

腹立
つしゃべり方だなあ。まあそう思ったければそう思っていればいい

「僕は

手札からチューナーモンスタージャンクシンクロン召喚」

「チ、チ

ューナーモンスター？」

「ジャンク
シンクロンの効果で墓地のボルトヘッジホッグを特殊召喚」

「しかし、
そんな低レベルモンスターたちで何ができるというのーね？」

「さらに魔法

カード二重召喚発動この効果で自分はこのターン通常召喚を

二回行える。手札からず。カリキュレータ

ーを召喚。このモンスター

の攻撃

力はじぶんの場のもんすたーのレベルの300倍となる。

そしてLV2ボルトヘッジホッグにL

V3ジャンクシンクロンをチューニング」

「チュ

ーニング？」

れ」

「集いし星が新たな力を呼び起こす光さす道とな

「な、何が起きているのーね」

「シンクロ召喚 いでよジャンク

ウォーリアー。」

「何を

するかと思えばたかが攻撃力2300のモンスターでは

私のアンティークギアゴーレムは倒

せないのーね」

「それはどうかな？」

のーね」

「な、なんな

「ジャンクウォーリアーの効果発動
成功時

このカードのシンクロ召喚
自分の場に存在するLV2

以下のモンスターの攻撃力分

このモンスターの攻撃力をアップさせる。

今僕の場合には攻撃力2

100のザ・カリキュレーターがいる。

よって攻撃力は2100ポイントアップ」

4400

ジャンクウォーリアー攻撃力

400」

「こ、攻撃力4

「バトル。ジャンクウオ

ーリアーでアンティークギアゴーレムを攻撃

スクラップフィスト！

そしてザ・カリキ

ュレーターでダイレクトアタック。」

クロノス LP500

「そして手札から魔法カードファイアーボ

ール発動」

「マンマミーア」

LP00

クロノス

こうして駿の入学試験は終わった。

シンクロ召喚（後書き）

何かアドバイスがあったら教えてください。

戦慄のブルーアイズホワイトドラゴン（前書き）

タイトルはじつは遊戯王デュエルモンスターズ第1話のタイトルと同じです

戦慄のブルーアイズホワイトドラゴン

入学試験から数日僕はとある人に呼び出された。 えっ、誰かだっ
て？

まあすぐにわかるよ。ほら着いた。

「すみません遅れました」

「この俺を待たせるとはいいい度胸だ」

みなさんもうわかりましたね。 そう今日僕を呼び出した相手は
あの海馬瀬戸社長だ。

「まあ、とりあえず入れ」

相変わらずなんと態度がでかい……。 まあでもねえ？

こうして僕は海馬コーポレーション本社へと入っていった。

「あの・・・すみません。」

「フン、何だ？」

態度でかいな・・・。しかしここでキレるわけにはいかない。この人を敵にまわしたら多分僕はこの世界では生きられなくなるだろうからね。

「ひとつききたいことが・・・」

「聞きたいこと？何だ」

「要件は何ですか？」

「そういえばまだ話していなかったな。貴様の持つシンクロモンスター
とやらに興味がある」

「シンクロモンスターに？なんで今さら・・・あっ」

大事なことを忘れていた。この時代ではもだシンクロ使うやついなかったんだ。

「どうした。よほど知られてはいけないものだったか」

「それより何故シンクロモンスターを知っている？」

「先日わが社のデュエルシステムが見たことのないカードを感じました。」

しまったー。デュエルディスクって海馬コーポレーション製だった

「それと僕が呼ばれたことに何の関係が？」

「とぼけるな！ 貴様のシンクロモンスターに興味があって 呼んだと言っているだろう」

「おれで

ぼくに何をしろと？」

「簡単に言うと

そのシンクロモンスターをよこせということだが・・・」

「断る」

「そう

いうと思ってな金額を言え」

「

はい？」

「要するにシンクロモンスターを買うということだ」

「断る」

「何故だ」

「僕はいままで一度としてカードを人に売ったことは
ないです」

「ならばデュエルで勝負だ。俺が勝ったらシンクロモンスターをもらう。」

「

ったら？」

「僕が勝

そ

の時は貴様のいうことを何でも聞いてやる」

「わかった」

「交渉成立だ。ついてこい。」

数分後

「はい」だ

「はい」でやる

のか……。」

「どうし

た？怖気づいたか」

「ま

さか……？時間が惜しい。はじめるぞ」

「「デュエル」」

「先攻は俺だ。　ドローカード」

そういえばこの世界では順番はディスクが決めるんだよな。

「ブラッドボルスを召喚。　カードを二枚伏せてターンエンド」

「僕のターンドロ！。手札からバイスドラゴン
を特殊召喚　さらにチ
ューナーモンスター
ダークリゾネーターを召喚」

「早速
シンクロ召喚か」

「ご名答。LV5バイスドラゴンにLV3ダークリゾネーターを
チューニング」

「シンクロモンスターを見せ
てみる」

「王者の鼓動今この列
をなす。天地鳴動の力を見るがいい！

シンクロ召喚我が魂レッドデーモンズドラゴン」

「これがシンクロ召喚か。面白い。」

「いけレッドデーモンズドラゴン。ブラッドボ
ルスを攻撃
アブソリ
ユートパワーフォース」

LP2900

海馬

「ブルーアイズと同じ攻撃力だと。許さん。」

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「行くぞ俺のターン。魔法カード古のルール発動。」

その効果で俺は手札か

らブルーアイズホワイトドラゴンを

特殊召喚。さらに正義の味方カイバーマンを召喚

このカードを生贄

にささげることによってブルーアイズホワイトドラゴンを

召喚。ターンエンド」

「僕のターンドロ。ターンエンド」

「フハハハハ。何もできないか。まあいい俺の

ターンンドロー。

魔法カード発動融合いでよブルーア

イズアルティメットドラゴン
召喚。

ブルーアイズアルティメットド

ラゴンでレッドデーモンズドラゴンを

攻撃。アルティメットバースト」

「レッドデーモンズドラゴンが……。」

「ターンエンド」

「僕のターンンドロー。カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンンドロー。これで終わりだ。」

アルティメ

ットバースト。」

「そうは

させない。手札のバトルフェーダーの効果

このカードを特殊召喚しバトルフェイ

ズを終了させる」

「ターンエンド」

「僕のターンドロー。来た。」

「何を引いたかは知らんが
とつととサレンダーするがいい」

続トラップリビングデッドの呼び声。

この効果で墓地からレッドデーモンズドラゴンを
特殊召喚」

「今更そんな

モンスターを召喚したところで何になる？」

「新たな

シンクロ召喚だ」

「何

！？」

「行くぞ手札からチューナーモンスター救世竜セイヴァードラゴンを召喚」

「まさかレベル10のシンクロか！？」

「その通り。LV8レッドデーモンズドラゴンとLV1バトルフェーダーに

L
V
1
セイヴ

「アドラゴンをチューニング」

「研磨され

し孤高の光眞の覇者となりて大地を照らす光輝け。

シンクロ召喚 大いなる魂セイヴァーデ
「モンドラゴン」

「だがそのモンスターではわがブルー
アイズアルティメットドラゴンの
攻撃力の足元にも及ばんわ。」

「セイヴァーデモンドラゴン効果。相手の場のモンスターの効果を無効にし
そのモンスターの攻撃力分攻撃力をアップさせる」

「何!？」

「ブルーアイズアルティメットドラゴンの攻撃力は

よって攻撃力は4500アップ」

「こ、攻撃力8500」

「行けセイヴァーデモンドラゴンでブルーアイ
ズアルティメットドラゴン
を攻撃。
アルティメットパワーフォース」

ああああ」

「ぐわ

海

馬 L P O

「俺の負けだと」

海馬コーポレーションの戦いは駿の勝利によって終わった。

戦慄のブルーアイズホワイトドラゴン（後書き）

なんかあっさり終わってしまいました

古代エジプトの戦い その1 (前書き)

今回はあの人を出します。

古代エジプトの戦い その1

またまた

誰かに呼び出された。しかも今度はエジプトに！

と、

いうことでエジプトに来ました。

なんと今日はマリクとイシズに呼び出された。皆どこで僕の情報を仕入れてくるのだろうか。

まあいいとりあえず例の二人に会いに行こう、と思っただけならなんと空港にまで迎えに来てくれました。

「お忙しい中ありがとうございます」
「うございます」まあはじめましてだから挨拶ぐらいしっかりね。

「いえこちらから

呼び出したので」

やっぱり向こ

うもどこぞの社長と違って丁寧な方ですね。

「ところ

で本日はどういったご用件で？」

「実

は先日石板が何らかのものに反応したのです」

「それと僕が呼び出されたのとどういう関係が？」

「そしてそのなかからかすかにあのファラオの声が聞こえたのです」

「いや、ファラオと言われましても……。」

「失礼しました。そのファラオというのは……」

まあそんな感じでアテムについての説明を受けながらとうとう石板についた。

「ところでそのアテムと僕が呼ばれたのにどう関係が？」

「アテムの声で海馬コーポレーション・シンクロという声が聞こえました。そこで瀬戸にシンクロとは何かを聞いてみました」

それで？」

「

「瀬戸が言うには海馬コーポレーションにシンクロという未知の召喚方法を使うものが現れたと聞きそのものについて調べたら貴方が出てきました。」

「そのシンクロとアテムにどう関係が？」

「それはわかりません。しかしそれもあの石板に行けば分かります着いてきてください」

「わかりました」

まあここまで言われたら断れんなあ

「ありがとう」

ごさいますでは早速中に入ってみましょう」

そう言っ

てぼくは石板のある神殿みたいところに連れて行かれた。

数分後

「これが例の石板です」

「これがその？」

「はい。」

「ところでなんで石板から声が聞こえたんです？」

「それはわかりません。しかしその石板にシンクロモンスターのカードをかざせばわかるはずです」

「わかりました」

そういうことで僕はとりあえず適当にシンクロモンスターのカードをかざした。すると当てたりが闇に包まれた。

「よく

来たな」

あ

れイシズとマリクは？それとあの声どこかで聞いたことがある。

「わが名はアテム」

でたアテム！

「ではデュエルだ。」

えっ？

「信じられないという顔をしているな」

「ええまあ、はい」

「だがそれもすべてデュエルをすれば
わかることだ」

「う
わかりました。ではやりましょ

「「デュエル」」

「僕の先行ドロ」

先攻は駿

「僕はBF蒼炎のシ

ュラを召喚。
カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンド

ロー」

「魔法カー

ド融合を発動。てふだのガゼルとバフオメットを融合。」

この展

開まさか。

こい有翼幻獣キマイラ召喚」

「

「でたキマイラ。」

とするとあのデッキは遊戯デッキだな

「キマイラでシュラを攻撃。キマイラインパクトダツ
シュ」

「トラップカード攻撃の無力化」

「カードを伏せてターンエンド」

「僕のターンドロ」

「手札からチューナーモンスターBF

疾風のゲイルを召喚」

「来るか、シンクロ召喚」

「効果キマイラの攻守を半分に」

「その前にゲイルのモンスター

「LV4シュラにLV3

ゲイルをチューニング」

「黒き旋風よ 天空

へ駆けあがる翼となれ シンクロ召喚 こいBFアーマードウィング」

「これがシンクロ召喚・・・。」

「アーマードウィングでキマイラを攻撃ブ

ラックハリケーン」

アテム LP2550

「やるなそれがシンクロ召喚か」

「ターンエンド」

古代エジプトの戦い その1（後書き）

ということで今回はここまで。それから前回のセイヴァーデモンドラゴンについてですがブルーアイズアルティメットドラゴンに効果はないので効果は発動できないらしいです。勉強不足ですいませんでした。

古代エジプトの戦い その2 (前書き)

今回最初のほうでデュエルは終わります。

古代エジプトの戦い その2

ターンドロー」 アテムのターン

「俺の

俺は手札からカオスの儀式発動、手札のマグネットヴァリキリオンを墓地へ送り、カオスソルジャーを特殊召喚。」

「カオスソルジャーか・・・。

「更に魔法カード古のルール発動。この効果で手札からブラックマジシャンを特殊召喚」

「ブラックマジシャン・・・。」

「バトル。カオスソルジャーでBF
アーマードウィングに攻撃」

「アーマードウィングの効果発動。このカードは戦闘では破壊されず戦闘による自分へのダメージも0にする。」

「なに!？」

「さらにこのカードが戦闘によって相手モンスターを破壊できなかったときそのモンスターに楔カウンターを置く」

「楔カウンター！？そのカウンターに何の意味がある？ターンエンド」

「すぐにわかるよ。僕のターンドロ」

「アーマードウィングの効果発動。楔カウンターを取り除くことでそのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで0にする」

「なにっ!？」

「これで終わりだ。アーマードウィングでカオスソルジャーを攻撃」

「だがラ

イフは残る」

「い

やこれで終わりだ。手札のBF月影のカルートの効果発動。手札のこのカードを墓地へ送ることで自分の場のBF一体の攻撃力をダメージステップ終了時まで1400アップさせる」

「攻撃力3900!？」

「これで終わりだ。ブラックハリケーン」

「くっ」

アテム LPO

「僕の勝ちだ」

「見事だ。負けたよ。ところで俺の話を聞いてくれ」

「なんだ？」

「実はお前とデュエルをしたのは大きな訳がある。」

「大きな訳？」

「そうだ。実は今この世界は大きな危機に

瀕している」

「大きな危機？何の危機だ？」

「それは世界がドーマの時のようになって
いる。」

「ドーマ！？」

「いや正確に言うとドーマではない。
しかしまた別の大きな組織が動いている」

「大きな組織？何だそれは？」

「その名前はイリアステル」

「イ、イリアステル！？」

「イリアステルとは世界を裏から操る組織」

「ああ、知っている。ところでそれと僕ら
のデュエルがどう関係あるの？」

「単刀直入にいう俺もやつらと戦いたい。もう一度この世界で戦いたい」

「それで？」

「要するにさっきのデュエルは俺の相棒を決めるための戦い」

「つまり僕が勝ったら君が僕の中に入ってくるとかそういうやつ？」

「わかってるなら話は早い。」

頼む俺と戦ってくれ」

「待て、入ってくるとどう

なる？ 遊戯みたいになるだけなら別にかまわんが」

「ああそうだ」

「ならいいぞ」

「ありがとう。これから共に戦おう。これからお前のことは相棒と呼ばせてもらう」

「わかった。じゃあ俺はアテムと呼ばせてもらう」

「そのまんまだな」

「別にいいじゃん。それより早く戻ろう」

か」

「そうだなら早いところそこをくぐろう」

僕たちは光の道をくぐり石板の前に
戻りその後帰宅した。さあいよいよ入学だ。

古代エジプトの戦い その2（後書き）

というわけでアテムを取り込みました。

アカデミア入学

V S 万丈目

さあ満足させてもらおうか（前書き）

今回からようやくアカデミアに行きます。

アテムと出会ってから数日ついにアカデミアに行く日が来た

もちろん合格はしたけどクラスはオシリスレッド。まあ遅刻したことを考えたら妥当かな。

そんなこんなでアカデミアに到着。入学式では校長先生の有り難きお言葉をいただき（寝てたけど）その後あの遊城十代に出会い、一緒にレッドの部屋へ向かった。

あれそういえば十代が同室とか言っていたけどどうなるんだ。

「あつ、来たにゃ、私がこの寮の寮長の大徳寺だにゃ。実は今年は一人寮に入りきらなくなったの にゃ。と、いうことで君たちにはこの間できたばかりの四人部屋を使ってもらうにゃ」

「四人部屋かあワ

クワクしないか。あれそういえば同室は俺たち三人ともう一人誰だろう？」

部屋に入る

とやはりいた。コアラではなく前田隼人が・・・。

まあこん

な感じでどんどん原作どおりに事が進んでいく。その後デュエル場で万丈目に会い喧嘩し、寮に戻り、そして万丈目から電話が来た。えっ？なんでぼくに？

「今日の十一時半デュエル場で待っている。勇気があるなら来るんだな。」

いやな奴だな。

このころの万丈目は本当に

まあいい叩き潰してやるか。

エル場

午後十一時半 デュ

ップアウトボーイ。」

「来たな。ドロ

「黙れ。ド

ロップアウトボーイの称号は十代の専売特許だ。それを僕に使うな。見下すならほかの呼び方を考えろ。」

「ツツコミどころはそこか。全くわけわからん。行くぞ古城駿。」

「結局名前になったんだね。」

「そんなことどうでもいい。行くぞ。」

「「デュエル」」

「俺のターンドロー」 先攻は万丈目

「手札からヘルソルジャーを召喚。ターンエンド」

「僕のターンドロー」

「手札からインフェルニティビートルを召喚。
カードを四枚伏せてターンエンド」

「俺のターン。ヘルソルジャーを生贄にヘルジェネラルメフィストを召喚。さらに装備魔法、デーモンの斧をヘルジェネラルメフィストに装備。」

「……。」

「出ないか。」

「フッ、恐怖で声も

「か？」

「さあだろう

「生意気な。」

ヘルジェネラルメフィストでインフェエルニティビートルを攻撃。」

駿 L

P2500

「そし

てヘルジェネラルメフィストの効果。このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えたとき相手の手札を一枚墓地へ送る。」

「……。」

「所詮レッドはこの程度か。」

「それはどうかな？」

「どういうことだ!？」

「お前は今自ら僕の必勝パターンにはまりこんだ。」

「何を言うか。手札がゼロで何になる」

「手札がゼロでなければできないこともある。」

「どうだか。」

「ならばいい。お前がそれに気付くのはこのデュエルが終わるときのようなのだ。」

「ならばここから逆転してみろ。」

「行くぞ。僕のターン ドロー。」

「手札のインフェルニティデーモンの効果。手札がゼロの時にこのカードをドローしたときこのカードを特殊召喚する。」

「だがそんなくずモンスターではヘルジエネラルメフィストを倒すことなどできはしない。」

「インフェルニティデーモンの効果はもう一つある。それは手札がゼロの時にこのカードの特殊召喚に成功したときデッキからインフェルニティと名のつくカードを一枚手札に加える。」

「なにっ」

「デッキからインフェルニティデストロイヤーを手札に加える。そして伏せていた魔法カード手札抹殺発動。」

ンスターを墓地へ送ったな。」

「だがせっかくの上級モ

発動デッキからカードを二枚ドロ―」

「手札から強欲な壺

ロでなくなったな。」

「だが手札はゼ

「すぐに戻る。インフェルニティネクロマンサーを召喚。さらに永続魔法インフェルニティガン発動。そして効果発動。フィールド場のこのカードを墓地へ送ることで墓地のインフェルニティを二体特殊召喚することができる。いでよインフェルニティデストロイヤー、インフェルニティビートル。」

「そんな雑魚を出してどうする？」

「雑魚カードなんてそんざいしない」

「どうだか？」

「行くぞ。LV6インフェルニティデストロイヤーにLV2インフェルニティビートルをチューニング。」

「来るか、シ

ンクロ召喚」

「死者と生者零にて交わりしとき永劫の檻より魔の竜は放たれる。シンクロ召喚。いでよインフェルニティデスドラゴン。」

「攻撃力3000。」

「インフェルニティデスドラゴンの効果は手札が零の時相手の場のモンスター一体を破壊し、相手にそのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。」

「何っ!？」

万丈目 LP2650

「更にインフェルニティネクロマンサーの効果手札が零の時自分の墓地のインフェルニティ一体を特殊召喚する。インフェルニティデストロイヤーを特殊召喚。」

「なにっ!？」

「インフェルニティデーモンとインフェルニティデストロイ

ヤーでダイレクトアタック」

「ぐわあああ。」

万丈目 L P O

「まだだこんなじゃ満足できねえ。」

「とりあえずもう今日は帰れ万丈目さん。」

「だから万丈目さんだっ……てよかったのか……。」

「さらばだ。覚えてろよっ」

典型的な悪役のセリフを残し

万丈目は去って行った。

「あれ、駿。」

「ああ十代か……。」

「万丈目はどうした

んだ？」

「遅かったね。もうとっくに片づけたよ」

「万丈目を倒したのか？」

「ああ」

「お前すごいな」

「そうか？」

「そうだ、これから俺とデュエルしようぜ」

「今日はもう遅いまた今度な」

「ちえっ、わかったよ。じゃあ今度絶対にやろうぜ。」

「わかった。約束する」

こうして駿、十代、翔は三人で誰にも見つからないように帰ったとき。

アカデミア入学

VS万丈目

さあ満足させてもらおうか（後書き）

題名には今回のデッキについて書いてありました。

もう一人のシンクロ使い（前書き）

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います。

もう一人のシンクロ使い

万丈目をたたきつぶした翌朝。早速今日から授業が始まった。今日は原作通り十代がクロノスをバカにして終わった。後はゆっくりするだけとおもっていたが・・・今日なんかあるんだよね・・・。

その夜僕のPDAに電話が来た。「丸藤翔は預かった。返してほしければ女子寮までこい、と。」

思い出した。今日はラブレター事件の日だった。こうはしていいられん。急いで行かねば。そして原作をぶっ壊さねば。「：おい」

「：おい」 ん、なんだこの声聞いたことないぞ。

「おい、聞いているのか。」 誰こいつ・・・？ とりあえず適当に対応しておくか。 「何だ？」

「何じゃない。お前シンクロを使うよな？」 「使う

けどそれが何か？それとあんた誰？」 「俺の名前は矢吹透

お前と同じように変な神に連れてこられた。」 「で、何か用？」

「何か用？じゃねえよっ。お前のせいで昨日原作に介入できなかったんだよ。」 「なんでぼくのせい？」 「お前が万

丈目を瞬殺するから俺が行った時にはもうすでに万丈目はいなかったんだよ。」 「それは災難だったね。で、僕にどうしろと？」 「

とりあえずおれとデュエルしろ。」 「まあいいけど・

・・・」

「「デュエル」

」

「俺の先行

ドロー。」

先攻は矢吹

「手札

からD・ラジオンを召喚カードを伏せてターンエンド」

「

僕のターンドロ」

「手札からTGラッシュ・ライノ BE-04を召喚。TGラッシュ・ライノ BE-04でラジオンを攻撃。」

矢吹 LP 3800

「ターンエンド」

「俺のターンD・スコープンを召喚。その効果でD・ラジカッセンを特殊召喚。LV4ラジカッセンにLV3スコープンをチューニング。」

「世界の平和を守るため勇気と力をドッキン
グ！シンクロ召喚 愛と正義の使者パワーツールドラゴン」

「パワ

ーツールドラゴンの効果でデッキから手札にランダムに装備魔法を手札に加える。そして装備魔法パワーツールD&Cを装備。」

300 ATK3300

パワーツールドラゴン ATK2

「パワーツールドラゴンでT
Gラッシュ・ライノ BE-04を攻撃。」

駿 LP2300

「ターンエンド」

「僕のターン。」

チューナーモンスターTGサイバー・マジシャン SC-01を召喚。このモンスターをシンクロ素材とすると手札のモンスターとしかシンクロ召喚は行えない。手札のLV4TGワーウルフ BW-03にLV1TGサイバー・マジシャンをチューニング」 さあ腕の見せ所だ。

「シン

クロフライトコントロール！リミッター解放LV5！ブースター注入120% リカバリネットワークレンジ修正！オールクリア！GO！シンクロ召喚 カモンTGパワーグラディエイター」

「そのセリフを言えるやつがいたのか……。」

「永続罨血の代償を発動し、
効果発動。ライフを500支払いTGサイバー・マジシャンをもう

一体召喚し手札のLV4TGラッシュライノにLV1TGサイバー・マジシャンをチューニング。」
もう一度腕の見せ所だ

「リミッター解放LV5 ブースターランチOK インクリネイションOK グランドサポート！ オールクリア GOシンクロ召喚 カモンTGワンダーマジシャン。」

「そしてLV5TGパワーグラディエーターにLV5TGワンダーマジシャンをチューニング」

「アクセルシンクロ。TGブレードガンナー」

「更に装備魔法巨大化を発動」

00
TGブレードガンナー ATK66

「ブレードガンナーでパワーツールドラゴンを攻撃。」

矢吹 LPO

「やるな駿。と、いうより何故TGをもっているんだ？」

「なんかこの世界来た時にかばんの中入ってた。セリフは今日このデッキを使う予定だったから一夜漬けで覚えた。」

「それは大変だったな。まあ話すことは山ほどあるが時間が時間だしな。また明日な。それから授業の席じつは俺はお前の隣だからな。」

「そーいやそーうだっけ・・・？」

「・・・じゃあお休み」

「お休み。」

その後駿が来なかったことで明日香がかなり切れていたことは誰も知らない。

もう一人のシンクロ使い（後書き）

オリジナルキャラを出しました。それからTGの効果はタッグフォースから持ってきました。

キャラ紹介（前書き）

今回はキャラ紹介です。

キャラ紹介

古城駿 この作品の主人公。暇だからということで神の話に付き合った後うつかり遊戯王の世界に来

てしまった。デッキは基本的にシンクロ召喚を多用するデッキを使用する。

性格は遊星のように絆を尊重するがそれを表に出すことはあまりない。

各シリーズでは海馬、ヘルカイザー、ジャックなどのキャラが好き。異性などにはあまり興味はない。

好きな食べ物は海老フライと甘いもので嫌いな食べ物は特になし。外見は最初に5D'sを見たときに見た目としては遊星が気に入ったらしくなんとか似せようとするがなかなか似なくて困っているらしい。

矢吹透 駿と同じように神によってこの世界に来てしまった。

デッキはディフォーマーを多用するが、基本的に龍亜が好きというわけではない。

エースモンスターは現在アニメで名前と姿のみ登場しているライフストリームドラゴンにする予定。

しかしまだ効果が判明していないので本当に使用するかどうかはわからない。

異性に関しては十代ほどではないが消極的。 外見は5D'sの鬼柳京介（サテライト時代）の髪の色

が黒になっただけのかんじで元の世界では無理やり髪を白く染められそうになったほど。

しかし本人はあまり鬼柳には興味はないらしくインフェルニティを使用おうとは一切思わなかったらしい

今後何かとよく出てくるキャラ。デツキは他にもなんか変なのを使ったりするが、何を使うかは今後のお楽しみ。

キャラ紹介（後書き）

実は僕、先日の5D'sにかなり感動しまして……。ついデイフオーマーを使わそうと思ったのが矢吹の誕生した理由です。

月一試験 VS カイザー 亮 カイザーは一人この俺だ（前書き）

対戦相手は書いてある通りです

月一試験 VS カイザー亮 カイザーは一人この俺だ

さあいよいよ月一試験だ。そろそろ学校行くかな。 数分後 「
着いた。」 到着時間は予定通り。

そして筆記試験。余裕。余裕過ぎる。なめているのかというぐ
らいに。

「駿どうだった？」

「透か。余裕過ぎる。そういうお前は？」

「こっちも余裕だ。」

「二人とも余裕なのね。」

「誰っ？」

「約束を破った上に誰ってひどいわね。私は天上院明日香」

「ところで何の約束？」

「翔君を預かったってやつよ」

「あれか。だいたい約束じゃなくてそっちが一方的に呼び出しただけだ」

「そうも言えるけど……。あのときは十代が来てよかったわ。」

「それは良かったな。」

「良かったな。じゃないわよまあいいわ。ところでオシリスレッドの貴方達が実技も余裕なんて言ってられないと思うけど。」

「でも相手もオシリスレッドだろ？」

「貴方達組み合わせ見てないの？」

「ああ」

「はあ。本当あきれた。透、貴方の相手は私よ。」

「じゃあ余裕だな。」

「その言い方ひどいと思うけど。まあ私だってオシリスレッドに負けるつもりはないけど・・・。」

「言っとくが透は強いよ。」

「貴方もそんな余裕かましていいの？ 貴方の相手はカイザーよ。」

「フン余裕だな。」

「貴方カイザーを知らないの？」

「丸藤亮。サイバーエンドドラゴンをエースモンスターにし、基本的に機械族を中心としたデッキを使う。サイバー流との絆パワーでそのデッキに限りインチキドローができる。」

「貴方そこまで調べて余裕と言ってるの？ 貴方負けるわよ。」

「僕は負けない。なぜなら向こうがカイザーなら僕はキングだからだ。」

「キングねえ。貴方冗談言っていないでデッキ改良したら？」

「問題ない。僕はこのデッキとの絆を信じる。」

「でもクロノス先生は貴方を徹底的につぶす気よ。現にレッドの三強である十代、透君、そして駿君、貴方達全員オベリスクブルーが相手よ。大丈夫なの？」

「問題ない寧ろ相手がかawaiiそうだ。」

「そういえばもう時間よ。駿君。いってらっしゃい。」

「行ってくる。僕が勝っても恨まないようにカイザーに言っというて。」

「はあ。まあ負けてらっしゃい。」

「シニョール駿早く来るのーね。」

「今行きます。じゃあな。」

「ようやく来たか待っていたぞ。古城駿。」

「さあ始めようか。」

「「デュエル」」

「俺のターンドロー」 先攻は亮

「サイバーフェニックスを守備表示で召喚。ターンエンド」

「俺のターン。」 駿のターン

「バイスドラゴンを特殊召喚。このカードは相手フィールド場のみモンスターが存在するとき特殊召喚できる。この効果で召喚されたこのカードの攻守は半分となる。」

「だが攻撃力1000ではどうにも出来んぞ。」

「まあそう焦るな。手札からチューナーモンスターラストガーディアンを召喚。」

「来るかシンクロ召喚。」

「LV5バイスドラゴンにLV3トラストガーディアンをチューニング」

「王者の鼓動今ここに列をなす天地鳴動の力を見るがいい。シンクロ召喚我が魂レッドデーモンズドラゴン」

「それがエースモンスターか？」

「どうかな？レッドデーモンズドラゴンでサイバーフェニックスを攻撃。森羅万象すべてを突き貫けアブソリュートパワーフォース。」

「やるな」

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「楽しいデュエルだった。ここで終わらせてやる。」

「やれるもんなら。」

「魔法カードパワーボンドを発動。手札のサイバードラゴン三体を融合。いでよサイバーエンドドラゴン。パワーボンドの効果でサイバーエンドの攻撃力は倍となる」

「ついに出了かサイバーエンド。」

「これで終わりだエターナルエヴォリュションバースト」

「はたして駿は負けてしまうのか!? 続く・・・。」

月一試験 VS カイザー亮 カイザーは一人この俺だ（後書き）

ということで今回はここまで。駿はカイザーに勝てるのか？ そして駿はついにあのカードを……。次回「仲間との絆バーニングソウル」

ライディングデュエルアクセラレーション。なんてね。

仲間との絆 バーニングソウル（前書き）

題名から想像できる通りあれが出来ます

仲間との絆 バーニングソウル

「サイバーエンドドラゴンでレッドデーモンズドラゴンを攻撃エターナルエヴォリュションバースト」

「罨発動。亜空間物質転送装置。この効果でレッドデーモンズドラゴンを除外。」

「レッドデーモンズを除外だ?!?何を考えている。」

「今にわかる。手札のバトルフェーダーの効果。自分がダイレクトアタックを受ける時このカードを特殊召喚し、バトルフェイズを強制的に終了させる。」

「何!? レッドデーモンズの除外はこのためだったのか。」

「そしてエンドフェイズ、パワーボンドの効果でサイバーエンドの元々の攻撃力である4000ポイントのダメージを受けてもらう。」

「まだエンドフェイズではない。サイバージラフを召喚し、効果を発動このカードを生贄にエンドフェイズまで自分は効果ダメージは受けない。カードを一枚伏せてターンエンド。」

「リスク回避か。だがエンドフェイズ亜空間物質転送装置の効果で除外されていたレッドデーモンズドラゴンは場に戻ってくる。」

「俺のターンドロー」

駿のターン

「来た。手札からチューナーモンスター救世竜セイバードラゴン

を召喚。」

「さらなるシンクロか!？」

「その通り。LV8のレッドデーモンズドラゴンとLV1のバトルフェーダーにLV1のサイバードラゴンをチューニング」

8+1+1=10

「研磨されし孤高の光、真の覇者となりて大地を照らす、光り輝け。シンクロ召喚大いなる魂セイヴァーデモンドラゴン」

「攻撃力4000・・・だがそれでは強化されたサイバーエンドにはかなわない。」

「セイヴァーデモンドラゴンの効果、1ターンに1度相手フィールド場の効果のあるモンスター一体を選択しエンドフェイズまでそのモンスターの効果を無効にし、そのモンスターの攻撃力分攻撃力をアップさせる。サイバーエンドドラゴンの攻撃力は8000よってセイヴァーデモンドラゴンの攻撃力は12000となる。」

「攻撃力12000のモンスターだっつ。」

「セイヴァーデモンドラゴンでサイバーエンドドラゴンを攻撃。アルティメットパワーフォース。」

「暴発動、攻撃の無力化。これでバトルフェイズを強制的に終了させる。」

「チッ、カードを二枚伏せてターンエンド。エンドフェイズにセイ

ヴァーデモンドラゴンは融合デッキに戻り墓地のレッドデーモンズドラゴンを特殊召喚する。」

「俺のターンドロー」 カイザーのターン

「サイバーエンドドラゴンでレッドデーモンズドラゴンを攻撃。エターナルエヴォリュションバースト。」

「手札のエフェクトヴェーラーの効果発動。このカードを墓地へ送り相手の場のモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする。」

「ターンエンド」

「俺のターン」 駿のターン

「永続罫 リビングデッドの呼び声発動。この効果で墓地のレッドデーモンズドラゴンを特殊召喚。更にチューナーモンスターアタックゲイナーを召喚。更にクリエイトリゾネーターを特殊召喚」

「今度は何をするつもりだ!？」

「面白いものを見せてやる。バーニングソウル!!」

「何だそれは？」

「今見せてやる。LV8のレッドデーモンズドラゴンにLV1のアタックゲイナーとLV3のクリエイトリゾネーターをダブルチューニング」

「王者と悪魔今ここに交わる。荒ぶる魂よ天地創造の叫びをあげよ。シンクロ召喚。出でよスカーレットノヴァドラゴン。」

「なんだこのモンスターは!?!」

「スカーレットノヴァドラゴンは墓地のチューナー一体につき攻撃力を500ポイントアップする。墓地のチューナーは四体よって2000ポイントアップする。更にアタックゲイナーの効果はシンクロ素材となったとき相手の場のモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントダウンさせる」

スカーレットノヴァドラゴン ATK5500 サイバーエンドドラゴン ATK7000

「魔法カード天よりの宝札。お互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする。そして手札抹殺発動お互いのプレイヤーは手札をすべて墓地へ送りその枚数分カードをドローする。」

「ま、まさか」

「そのまさかだ。今墓地へ送ったカードの中にはチューナーが四体よってさらに2000ポイントアップする。」

スカーレットノヴァドラゴン ATK7500

「スカーレットノヴァドラゴンでサイバーエンドドラゴンを攻撃。バーニングソウル。」

「くっ」

丸藤亮 LP3500

「罠カードシンクロアウト発動。シンクロモンスターを融合デッキに戻しその素材モンスターを特殊召喚する」

「速攻魔法突進をレッドデモンズドラゴンに発動」

レッドデモンズドラゴン ATK3700

「レッドデモンズドラゴンでダイレクトアタック。アブソリュートパワーフォース」

丸藤亮 LP0

「し、勝者オシリスレッド古城駿なのーね。」

「全校生徒よ良く聞け今日から俺がカイザーだ。カイザーは一人この俺だ！」

「言うねえ駿。」

「透、お前も勝ったか。」

「当たり前だ。」

「それもそうだな。」

「そういえばあれは校長じゃない？」

「本当だ」

「古城駿君。君はオベリスクブルーへのランクアップが決まりました」

「イエロー飛び越してブルーかよ」

「そうではなくてはカイザーではない。」

「それから矢吹透君、君もオベリスクブルーです」

「これから大変になるぞ。特に駿、お前はな」

「どうして？」

「それはカイザーに挑戦するために、毎日のようにデュエルを挑まれるぞ。」

「まあそれもいいんじゃない？」

「気楽な奴だ。それより俺たちの入寮はあさってだ。しっかり準備しておこう。」

「そうだな。じゃあ今日は帰ろうか。」

こうして月一試験は終わった。

仲間との絆 バーニングソウル（後書き）

駿を勝たせてしまいました。

偽物の闇の力（前書き）

今回は内容が薄すぎる・・・。

偽物の闇の力

月一試験から数日たち部屋はオベリスクブルーの部屋でのんびりしていた夜。隣の部屋である透の部屋から出ていく音が聞こえたがまあ気にしないでおこう。

数時間後僕は部屋で考え事をしていた。今日は原作では何かがある日だよな……。でも何があったんだっけ？ 思い出せない……。えーとエーとなんだっけ？ あっそうだ今日はタイタンのくる日だ。それで透の奴走って外へ行ったのか。くそ！ あの声が聞きたかった。待てよ今ならまだ間に合うかも。そうときまれば急いで廃寮へ向かおう。

数分後 ようやく着いたえーつとあっていたいたデュエルしてるじゃん。でも十代はタイタンのトリックに気付いているからもうそろそろ終わるころだろう。 と思っていたら周りが突然闇に包まれた

「まずいぞ相棒、これは本物の闇の力だ。」

「本当か、アテム？」

「本当だ」

「おい十代そいつはさっきまでのタイタンとは違う早くそいつを倒せ。」

「駿、来ていたのか。言われなくてもそのつもりだ。」

「なら早く片付けろ」

「もちろん。行けエッジマンパワーエッジアタック」

タイタン L P O

「うわあ〜」

「あの闇は一体・・・？」

「闇なら今僕が消した。」

「そうか」

「そういえば透を見なかったか？」

「透ならさっきまで居たんだけどなあ・・・。」

「まあいい帰るか。じゃあまた明日な」

「ああ、さようなら」

偽物の闇の力（後書き）

たったこれだけです

退学のピンチ（前書き）

また更新しました。

退学のピンチ

「た・・退学!？」 今朝とんでもない話を聞かされた。まあ僕と透は原作知っているから別に驚くことはないけど・・・。それでも正直少し焦った。まあどうせ退学をかけたデュエルとかするんだろうから大丈夫だけど。それより論理委員さんとやらの話でも聞きましょうかね。

論理委員の人いわく今度十代は翔と僕は透とタッグデュエルを行い、勝てば退学免除、負ければ即退学ということだった。相手は後日発表されるとのこと。さてと僕は透と作戦会議でもしましょうかね。

「駿、お前は今度何のデッキを使うんだ？」

「何にしようかな？」

「なんにしようかな、じゃなくてお互いのデッキのことはわかっておかないと。」

「それもそうだけどどうせお互いデッキ知っているし・・・。」

「俺がわからないの。お前いつもいろんなデッキ使うから。」

「じゃあ遊戯デッキでも使おうかな」

「死にたい？」

「冗談に決まっているだろう。誰があんなにドローに頼りまくったデッキなんて使うかよ。」

「そりゃそうだ。」

「でもホントにどうしよう。」

「お前もディフォーマー使えば？」

「僕ディフォーマー持ってない」

「それは残念」

「じゃあBFでも使うよ」

「じゃあそうしよう」

「相手は誰だ？」

「迷宮兄弟だろ」

「そういえばそうだな」

。このとき二人は知らなかった。ほかの相手と戦うことになる・・・。

退学のピンチ（後書き）

次回は退学をかけたデュエルです。

虫の処刑（前書き）

相手は虫です。虫使う人はいっぱいいるけどおそらく処刑でわかる人も居るのでは・・・。

虫の処刑

そしていよいよその日が来た。退学をかけたペナルティデュエルの日だ。十代と翔は原作通り迷宮兄弟を倒し、退学を免れた。さあ次は僕たちの番だ！と、思っていたらまだ一人来ていないって。ん？一人来てない？相手は迷宮兄弟じゃないってこと？すると向こうのほうから何かいやな声が聞こえてきた。

「ひよひよひよ僕の相手がまさかただの学生デュエリストとはなめられているねえ。」

「あ・・・あいつは。インセクター羽蛾。あいつまだ懲りずにこんなこと・・・。」

「どうしたアテム？」

「なあこのデュエル俺にやらせてくれないか？」

「別にいいが・・・」

「そういえば俺たちが入れ替わるの初めてだよな？」

「そういえばそうだね。じゃあ頼んだよ。」

「任せておけ。」

「えーっともう一人来ていないようなのでシングルデュエルにするのーね。相手は元全日本チャンピオン、インセクター羽蛾なのーね」

「そしてその相手はシニョール駿なのーね」

「それではデュエル開始なのーね」

「「デュエル」」

「先攻は僕がもうよ。ドロー」
羽蛾が先攻

「代打バッターを召喚。ターンエンド」

「俺のターンドロー」
駿^{アテム}のターン

「手札から磁石の戦士Yを召喚。Yで代打バッターを攻撃。」

羽蛾LP 3700

「だが代打バッターの効果でインセクトクイーンを特殊召喚。次のターンインセクトクイーンで大ダメージを与えてやる。せっかくのチャンスターンだったのに残念だったな。ひよっひよっひよ」

「何勘違いしてるんだ。」
「ひよっ？」

「まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ。」

「何言っているんだ。お前の場のモンスターはすでに攻撃を終了しているじゃないか。それに僕の場合には攻撃力2200のインセクトクイーンがいるんだ負けるはずない」

「速効魔法収縮でインセクトクイーンの攻撃力を半分に。」

虫の処刑（後書き）

せっかくなのでアテムのデュエルのついでにバーサーカーソウルを入れてみました。これからもヨロシクお願いします。

V S 遊戯デッキ（前書き）

久しぶりの投稿です。

VS 遊戯デッキ

制裁デュエルから数カ月たち平凡な日常を過ごしていた僕たち。ある日学園に武藤遊戯のデッキが飾られることになった。まあ正直アテムがとりついている僕はあまり興味はないが、アテムがどうしても遊戯のデッキが見たいというから仕方なく・・・。

その晩

「マンマミーア。」 クロノスの声　　そういえば神楽坂とかいうイエローの生徒がデッキを盗み出す日だったか。

「どうしました！？クロノス先生。」

「シニョール十代、デッキが盗まれていたのーね。」

「クロノス先生が盗んだのか！？」

「違うのーね。信じてほしいのーね。」

「わかってるよ。先生だったら鍵を使えばいいしな。よし俺が探してくる。」

「任せたのーね。シニョール十代たちだけが頼りなのーね。」

もう十代たちが探し始めるようだね。それならそろそろ僕も動く

しょうか・・・。

数分後

「フハハハハ、ついに手に入れたぞ武藤遊戯のデッキだ。これでは無敵だ。クロノスも、カイザーもキングも怖くない。」

「随分とご機嫌だな。」

「誰だ!？」

「オベリスクブルー一年 古城駿だ。」

「来たなキング。」

「いやキングってのは流れで言っちゃっただけだし・・・。」

「ちょうどいい早くこのデッキが使いたかったところだ。さあデュエルしろ。」

「断る」

「何っ!？」

「ってのは冗談で」

「なにがしたい？」

「いいだろう」

「「デュエル」」

「俺の先行ドロ。」 神楽坂が先攻

「融合を発動。手札のガゼルとバフォメットを融合。有翼幻獣キマイラ召喚。カードを一枚伏せてターンエンド。」

（あいつ相棒のデッキを盗んだのか？）

（ああそうだ）

（ならばこぼこにしてやってくれ。）

（了解）

「僕のターンドロ」 駿のターン

「手札のモンスターカードレベルスティーラーを墓地へ送りチューナーモンスタークイックシンクロンを特殊召喚。」

「チューナー？シンクロ召喚か？」

「墓地のレベルスティーラーの効果。自分の場のLV5以上のモンスターレベルを1下げることです特殊召喚できる。そしてスピードウォーリアーを召喚」

「モンスターか二体・・・シンクロがくるのか？」

「LV1のレベルステイラーにLV4のクイックシンクロンをチャージニング。」

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ。シンクロ召喚 出でよジャンクウォーリアー。」

「来たかシンクロモンスター。」

「ジャンクウォーリアーの効果は自分の場のLV2以下のモンスターの攻撃力分アップする。」

ジャンクウォーリアー ATK3200

「攻撃力3200だと!?!」

「ジャンクウォーリアーでキマイラを攻撃。スクラップフィスト」

「畏発動 攻撃の無力化」

「ターンエンドだ。」

「俺のターン」 神楽坂のターン

「融合解除発動キマイラをガゼルとバフォメットに分離させる。そして二体を生贄にブラックマジシャンを召喚。」

「……」

「恐怖で声も出ないか……」

「さあどうだか？」

「手札一枚をコストに魔法発動　ライトニングボルテックス。このカードの効果でお前の場の表側表示のモンスターすべてを破壊する。」

「・・・。」

「魔法カード二重召喚発動。そして磁石の戦士Y召喚。」

「二体のモンスターの攻撃力の合計は4000これが通ればお前の負けだ。」

はたして駿の運命は・・・？

次回へ続く。

V S 遊戯デッキ（後書き）

遊戯デッキが盗まれたところです。昨日の5D'sにもものすごく感動してしまいました。この辺なのかな。クラスみんなが僕の精神年齢はとても低いと言う理由は・・・。

次回 「アクセルシンクロ！！ 生来せよシューティングスタードラゴン」

お楽しみに。感想とかもジャンジャン書いてください批判でもバンバン書いてください。お願いします。

アクセルシンクロ 生来せよシューティングスタードラゴン（前書き）

今回の注目カードは題名にある通りです。それからこの小説のタイトルをGXからデュエルモンスターズGXに変えました。

アクセルシンクロ 生来せよシューティングスタードラゴン

「ブラックマジシャンでダイレクトアタック。ブラックマジック」

「手札の速攻のかかしの効果発動。相手がダイレクトアタックしてきたときに手札からこのカードを墓地へ送ることでバトルフェイズを強制終了させる。」

「何!？ 往生際が悪いぞ!」

「で、どうするの?」

「ターンエンド・・・。」

「僕のターンドロ。魔法カード早すぎた埋葬を発動。ライフを800払い墓地のモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する。ジャンクウォリアーを特殊召喚。」

「今更そんなモンスターを召喚して何になる?」

「チューナーモンスタードリルシンクロンを召喚。LV5ジャンクウォリアーにLV3ドリルシンクロンをチューニング」

5+3=8

「集いし願いが新たに輝く星となる 光さす道となれ。シンクロ召喚 飛翔せよスターダストドラゴン」

「何だこのモンスターは」

「スターダストドラゴンで磁石の戦士Vを攻撃 響け！ シューティングソニック」

「ぐうっ」

神楽坂 LP3000

「カードを二枚伏せてターンエンド」

「俺のターン。」 神楽坂のターン

「カオスの儀式発動。手札から磁石の戦士マグネットヴァルキリオを墓地へ送りカオスソルジャーを儀式召喚。カオスソルジャーでスターダストドラゴンを攻撃」

「永続罨血の代償でライフを1000払い救世龍セイヴァードラゴンとスターダストシャオロンを召喚更に罨発動緊急同調。これによりシンクロ召喚を行う」

「バトルフェイズ中にシンクロ召喚だど！？」

「LV8のスターダストドラゴンとLV1のスターダストシャオロンにLV1のセイヴァードラゴンをチューニング。」

8+1+1=10

「集いし星の輝きが新たな奇跡を照らし出す光さす道となれ シンクロ召喚 光来せよセイヴァースタードラゴン」

「セイヴァースタードラゴンの攻撃力は3800カオスソルジャーではかなわないか。カードを一枚伏せてターンエンド」

「エンドフェイズセイヴァースタードラゴストシャオロンの効果で特殊召喚する。」

「僕のターン」 駿のターン

「チューナーモンスターターボシンクロンを召喚。LV1のスターダストシャオロンにLV1のターボシンクロンをチューニング。」

1+1=2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う 光さす道となれ シンクロ召喚 希望の力 シンクロチューナー フォーミュラシンクロン」

「シンクロチューナー!?!」

「フォーミュラシンクロンの効果一ターンに一度デッキからカードを一枚ドロウする。」

「何をする気だ・・・?」

「行くぞクリアマインド」

「何が起きている・・・。」

「LV8シンクロモンスタースターダストドラゴンにLV2シンクロチューナーフォーミュラシンクロンをチューニング」

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く光さす道となれアクセルシンクロ生来せよシューティングスタードラゴン」

「シューティングスタードラゴン効果一ターンに一度デッキを上から五枚確認し、その中のチューナーの数だけ攻撃できる！」

「何だそのでたらめな効果はっ!？」

「行くぞまず一枚目、チューナーモンスタージャンクシンクロン、二枚目、チューナーモンスターデブリドラゴン三枚目、チューナーモンスターエフェクトヴェーラー、四枚目、チューナーモンスターハイパーシンクロン、ラスト五枚目、チューナーモンスターロードシンクロン。よって合計五回の攻撃が可能となった。行け!シューティングスタードラゴン!スターダストミラーージュ」

「グワアアア」

神楽坂LPO

「そんな最強のデッキを使っても俺は勝てないのか・・・」

「それは違う。何故ならこの世に最強のデッキなんて存在しないからな」

「どういう事だ」

「何故なら最強のデッキというものは自ら手間暇をかけそのデッキと乗り越えた苦難によって築き上げた絆こそが真の強さだからな。この件にかんしては僕は何も見なかったことにする。だからバレないようにデッキはもとに戻しておけ」

「本当にいいのか？」

「ああ。いつかほんとうのデッキリで戦おう。」

こうして長い1日は終わった。

アクセルシンクロ 生来せよシューティングスタードラゴン（後書き）

早くもシューティングスター登場

V S 遊戯デッキの後（前書き）

前回時間の都合で書き切れなかったところを書きます。

VS 遊戯デッキの後

「おい駿、何してるんだ？」

「ああ十代か？お前こそ何をしている。」

「遊戯さんのデッキが盗まれちゃったんだ……。どうかそいつを一緒に探してくれ。」

「いや……。デッキは盗まれてないと思うぞ。」

「でも実際無くなってるんだって……。」

「じゃあ見に行ってみるか。もしデッキがあったらこれから君には僕の言うことを全部聞いてもらうよ。」

「おう！受けて立つぜ！もしデッキがなかったらこれから俺の言うことを全部聞いてもらうからな。」

「いいだろう。では早速展示会場へ行こうか。」

数分後

「ほらデッキはあるぞ」

「本当だ、なんであるんだろう……。」

「そういえばデッキが無いってことは誰から聞いたんだ？」

「クロノス先生。」

「クロノス先生か・・・。」

「じゃあ夜も遅いし今日はもう帰るか。」

「待てよ。」

「ぎくっ」

「約束。もしデッキがあったらこれから先僕の言うことをすべて聞くという約束は？」

「な、何のことだろう？」

「喧嘩売ってるの？」

「じ、冗談だって・・・うん。駿、その笑顔何気に凄く怖いからやめて。」

「約束は守ろうね」

「くそう。わかったよ。」

「じゃあそういうことで・・・。お休み」

「ああお休み。」

こうしてデッキ盗難事件は十代が駿の言いなりになるということで解決した。

V S 遊戯デッキの後（後書き）

十代を言いなりにさせてしまいました・・・。スイマセン。
あと感想もどんどん書いてください。どんな感想でも書いてくれる
とうれしいんで・・・。

学園代表決定戦 シンクロVS融合 十代VS駿（前書き）

今回は学園代表決定戦です。

学園代表決定戦 シンクロVS融合 十代VS駿

只今デュエルアカデミア本校とノース校との対抗デュエルの代表を決める為の会議中だ。

「本来なら昨年同様丸藤亮君にお願いするところですが今年はノース校のほうが一年生を代表にするといってきたのでこちらもそれに合わせて一年生を代表にすることにしましたが丸藤君どうですか？」

「はい。俺はそれで構いません。」

「そうですかでは丸藤君誰か推薦したい人はいますか？」

「オシリスレッドの遊城十代です。」

「なるほど。十代君ですか。まあ彼なら実力的にもあまり問題ないでしょう。」

「お言葉ですが鮫島校長。遊城十代はオシリスレッド。私はオシリスレッドのドロップアウトボーイが代表なんーて認めないのーね。」

「ではクロノス先生は誰か推薦したい生徒はいるのですか？」

「んぐっ、そう言われるーと・・・。」

「いないなら十代君で決めますよ。」

「待つのにね。あっ。オベリスクブルーのシニョール駿なのーね。」

「駿君ですか。確かに彼はあの丸藤君を倒すだけの實力。」

「そうなのーね。」

「では、こういうことにしましょう。古城駿君と遊城十代でデュエルをし、勝ったほうを代表にするというのは。」

「それはいい考えなのーね。」

「それではデュエルは明日の午後4時からということだ。」

場所は変わって十代の部屋

「おい十代、人の話を聞けっ。」

「なんだよ駿……。」

「明日学園の代表をかけて僕と十代がデュエルをすることになった。」

「うおっ、マジか!？」

「ああマジだ。」

「よっしゃーついに駿とデュエルができるんだな!？」

「まあ簡単にいえばそういうことだ。僕も前から君とデュエルした

いと思っていたが・・・。」

「おう、俺も凄く楽しみだったぜ！」

「お前は元気がいいな。」

「おう、元気が一番だぜ。」

「じゃあ明日午後四時デュエルフィールドで会おう。お前の連続融合か、ぼくの連続シンクロか、どちらが上か明日になればわかる。」

「あれ？もう帰っちゃうのか？」

「当たり前だ！明日はついにお前と真剣勝負ができるんだ。そんなときにのんびり雑談なんかしている時間はないだろう。お前も明日に向けてデッキ調整は入念にな。僕をすっかりさせたら承知しないからな。」

「おう当然だ。じゃあな。また明日会おうぜ。」

こうして二人は別れた。

side 十代

「当たり前だ！明日はついにお前と真剣勝負ができるんだ。そんなときにのんびり雑談なんかしている時間はないだろう。お前も明日に向けてデッキ調整は入念にな。僕をすっかりさせたら承知しないからな。」

やった。明日は遂に駿と本気でデュエルができるんだ。俺もあいつのシンクロモンスターと戦ってみたかったし……。それに駿って普段は凄くおとなしいというか、静かというか、なんか寡黙で何を考えているかあまり分からないっていうイメージがあったが実はものすごく熱い奴だったんだな。見直したぜ。さてと俺も急いでデッキ調整をしておかないと。あそこまで本気になってる駿に対して120%であたらないと悪いからな。今夜は徹夜だ！

side 駿

ヤバイつい熱くなってしまいあんな恥ずかしいセリフを言ってしまった。どうしてあんなこと言っちゃうんだろう。僕って。はあ早く帰ってデッキ調整でもしようかな。まだどれを使うか決めてないし。僕も珍しく徹夜かな。でも徹夜すると明日の授業に遅刻してしまう……。いやしかし、遅刻を恐れてはデュエルで勝つことなどできん。今夜は遅刻覚悟でデッキを組むぞ！

翌日 「おい起きろ、起きろって。」

「ん、十代か。どうした。」

「どうした、じゃねえよ。もうすぐ午後三時だぞ」

「そうかすまない。柄にもなく徹夜をしてしまったな。」

「徹夜はいいけどデュエルは本気でやろうぜ。」

「当たり前だ。本気でデュエルするためにわざわざ徹夜したんだ。それで肝心のデュエルを本気でやらないでどうする？」

「わかったなら早く起きろって。」

「わかった。それにしても君に起こされる何て僕も焼きが回ったかな？」

「おいどういう意味だよそれ？」

「そのまんまの意味だもうすぐスタートだ行こう。」

「おうっ」

デュエル場

「それでーは只今よりデュエルを開始するのーね。」

「行くぞ十代！」

「来いっ駿！」

「「デュエル」」

学園代表決定戦 シンクロVS融合 十代VS駿（後書き）

今回はここまで。試しにsideを入れてみましたがいかがでしょうか？そこに関しても感想を書いていただけるとありがたいです。もちろん普通の感想もどんどん書いてください。

次回 E・HEROVS集いし者たち。 お楽しみに！

E・HEROVS集いし者達（前書き）

また更新しました。さてようやく十代と駿のデュエルです。

E・HEROVS集いし者達

「俺のターン」 十代の先攻

「フェザーマン守備表示で召喚。ターンエンド」

「僕のターン」 駿のターン

「調律を発動。デッキからジャンクシンクロンを手札に加え、その後そのモンスターのレベル分カードをデッキから墓地へ送る。ジャンクシンクロンのレベルは三よって三枚のカードをデッキから墓地へ送る」

「いきなりカードを三枚も!? 一体どうするつもりだ!?!」

「今にわかる。ぼくは永続魔法生還の宝札を発動。そしてぼくはチューナーモンスタージャンクシンクロンを召喚。さらにその効果で墓地からスピードウォリアーを特殊召喚。生還の宝札の効果でカードを一枚ドロ。そして墓地のボルトヘッジホッグを特殊召喚。ボルトヘッジホッグは自分の場にチューナーモンスターがいる時墓地から特殊召喚することが出来る。そして生還の宝札の効果でカードを一枚ドロ」

「凄え……。」

「Lv2のボルトヘッジホッグにLv3ジャンクシンクロンをチューニング」

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ。シンクロ召

喚。 出でよジャンクウォーリアー。」

「出たなシンクロモンスター。」

「ジャンクウォーリアーの効果。このカードの召喚時に場に存在するLv2以下のモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップさせる。」

ジャンクウォーリアー 攻撃力3200

「攻撃力3200だと」

「ジャンクウォーリアーでフェザーマンを攻撃。スクラップフィスト。」

「カードを二枚伏せてターンエンド」

「やるじゃねえか駿。ワクワクしてきたぜ。俺のターンドロ」

「融合発動。手札のスパークマンとクレイマンを融合。来いE・HEROサンダージャイアント。サンダージャイアントの効果。ターンに一度手札一枚を捨てることで元々の攻撃力がこのカードの攻撃力より低いモンスター一体を破壊する。ヴェイパースパーク！」

「ジャンクウォーリアー……。」

「サンダージャイアントでダイレクトアタック。ボルテックサンダー！」

「罨発動。くず鉄のかかし。一度だけ相手モンスターによる戦闘を無効にする。そしてこのカードは発動後再びセットする。」

「やるじゃねえか駿。カードを一枚伏せてターンエンド。」

「僕のターン」

「罨発動。ロストスターディセント。このカードは墓地のシンクロモンスターの守備力を0にし、レベルを一下げることです特殊召喚することが出来る。この効果で特殊召喚されたモンスターは表示形式を変更出来ない。僕が召喚するのはジャンクウォリアー。」

「今度は何をするんだ？ワクワクしてきたぜ。」

「僕は戦士族モンスターのジャンクウォリアーを生贄にターレットウォリアーを特殊召喚。」

「特殊召喚？」

「ターレットウォリアーは自分の場に存在する戦士族モンスターを生贄にすることで特殊召喚出来る。」

さらにその効果で特殊召喚されたこのカードの攻撃力は生贄にしたモンスターの元々の攻撃力ぶんアップさせる。」

ターレットウォリアー ATK 3500

「ターレットウォリアーでサンダージャイアントを攻撃。」

「罨発動。攻撃の無力化。これで次のターン、サンダージャイアントの効果でターレットウォリアーを破壊出来る。」

「だがそうはさせない。チューナーモンスタードリルシンクロンを召喚。そしてL V 5ターレットウォーリアーにL V 3ドリルシンクロンをチューニング」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ。シンクロ召喚。飛翔せよスターダストドラゴン」

「凄え綺麗なモンスターだな。」

「ぼくはカードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「融合回収発動。融合とスパークマンを手札に加える。そして融合発動。沼地の魔神王とスパークマンを融合。E・HEROシャイニングフレアウィングマンを融合召喚。」

いまここに二人の最強モンスターが並んだ。

E・HEROVS集いし者達（後書き）

今日の最強カードはスターダストドラゴン。攻撃力2500守備力2000場のカードを破壊する効果が発動したときにこのカードをリリースすることでその効果を無効にし、破壊することが出来る！
いけ！ヴィクテムサンクチュアリ！！

シャイニングフレアウィングマンを召喚し、攻める十代。その十代に対して駿が打つ手段とは？次回光来せよ、救世龍の奇跡。デュエルスタンバイ！」

光来せよ、 救世竜の奇跡（前書き）

駿VS十代のデュエルの後編です。なんか出るカードの順番間違えた気がしますが……。まあそこは見逃してください。

光来せよ、 救世竜の奇跡

「行くぜシャイニングフレアウイングマンの攻撃力は墓地のE・H ERO一体につき300ポイントアップする。」

シャイニングフレアウイングマン ATK3400

「シャイニングフレアウイングマンでスターダストドラゴンを攻撃。シャイニングシュート！」

「断ち切らせはしない。罨発動、クズ鉄のかかし。このカードは相手モンスターの攻撃を無効にする」

「そいつの存在を忘れていたぜ。ターンエンド。」

「流石だよ十代、僕のターンドロー。・・・。」 駿のターン

「どうした駿。」

「いやなんでもない。魔法カード発動ワンフォーワン。手札からモンスターカードを墓地へ送り、チューニングサポーターを特殊召喚。」

「今度は何を見せてくれるんだ!？」

「更にチューナーモンスター救世竜セイヴァードラゴンを召喚」

「・そのカードは・・・まさかセイヴァーデモンドラゴンか？」

「残念ながらそれは違う。セイヴァーデモンドラゴンはレッドデーモンズドラゴンが必要だからな。だが僕が召喚するのはそれとは別のモンスター」

「LV8スターダストドラゴンとLV1チューニングサポーターに、LV1救世竜セイヴァードラゴンをチューニング」

8+1+1=10

「集いし星の輝きが新たな奇跡を照らしだす。光差す道となれ。シンクロ召喚。光来せよセイヴァースタードラゴン。」

「攻撃力がシャイニングフレアウィングマンを上回った・・・。」

「それだけじゃない。このターンで終わらせる。とても楽しいデュエルだった。久々に熱くなれたよ。」

「だが俺はまだ負けない。」

「いや、このターンで終わりだ。セイヴァースタードラゴンの効果、エンドフェイズまで相手の場のモンスターの効果を無効にし、その効果を一度だけ使用できる効果がある。」

「何っ！？だがそれでも俺のライフは200残る。」

「罠発動！シンクロストライク。シンクロしたモンスターの攻撃力をその素材×500ポイントアップさせる。」

セイヴァースタードラゴン ATK5300

「そしてセイヴァースタードラゴンの効果でシャイニングフレアウイングマンの効果が無効にし、その効果の使用を可能にする。」

シャイニングフレアウイングマン ATK2500

「行け！セイヴァースタードラゴン！シャイニングフレアウイングマンを攻撃。シューティングブラスターソニック。」

十代 LP1200

「そしてセイヴァースタードラゴンの無効にしたシャイニングフレアウイングマンの効果で戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える。」

「くっ。」

十代 LP0

「くそー負けたー。」

「十代」

「なんだ？駿」

「ガッチャ、最高に楽しいデュエルだったぜ！」

「なんだよ駿、人のをばくるなよ！まあいいぜお前の意外な一面が見れたからな！ガッチャ楽しいデュエルだったぜ。」

「あっ……。」

こうして代表決定戦は終わった。

光来せよ、 救世竜の奇跡（後書き）

今日の最強カードはセイヴァースタードラゴン攻撃力3800守備力3000

一ターンに一度相手フィールドのモンスターの効果を無効にし、その効果を一度だけ使用することができる。どれだけ強力な効果を持つモンスターだって、効果が使えなければ意味がないよねっ！更にこのカードをリリースすることで相手の発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし、相手フィールドのモンスターをすべて破壊できる超強力効果がある。にもかかわらず最近5D'sのアニメではシューティングスタードラゴンの裏方に霞んでいる、というより出てこない。ちよつと残念だね。

今回は「デュエルの後」 お楽しみに

こんばんは。皆さん昨日の5D'sを見ました？まさかアポリアさんがZONEとデュエルするとは思いませんでした。これからもアニメを見た後の更新には5D'sの感想を書いていこうと思います。そっちに関してもご意見を頂けるとありがたいです。

デュエルの後（前書き）

再び更新。 今回の内容は・・・題名の通りです。

デュエルの後

side十代

「調律を発動デッキからジャンクシンクロンを手札に加え、そのモンスターレベル分のカードをデッキから墓地へ送る。ジャンクシンクロンのレベルは三、よってデッキからカードを三枚墓地へ送る。」

あれ？自分のデッキから墓地へ送って何か意味あるのか？

「ジャンクシンクロンを召喚しその効果で墓地からスピードウォーリアーを特殊召喚。」

なるほど！チューナーには墓地のモンスターを利用する効果が多いんだな！確かにそれなら意味はあるな。

「LV2ボルトヘッジホッグにLV3ジャンクシンクロンをチューニング。」

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ。シンクロ召喚。いでよジャンクウォーリアー」

出た、シンクロモンスター。相変わらずかっこいいぜ！もちろん俺のヒーローたちもカッコいいけどな。それにしてもあのセリフを言うのは恥ずかしくないのかな？

「ジャンクウォーリアーの効果このカードの召喚時、自分の場に存在するLV2以下のモンスターの攻撃力分攻撃力をアップさせる。」

相変わらずシンクロモンスターは強ええなあ。ますます楽しくなってきたぜ。

今サンダージャイアントの効果でジャンクウォーリアーを破壊したところだ！さあどうする？駿！

「罨発動クズ鉄のかかし、このカードは発動後再びセットされる。」

おいつ、そんなのありかよ・・・。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ。シンクロ召喚飛翔せよスターダストドラゴン」

スッゲ〜。格好いいモンスターだぜ。ほんときれいだな。これが駿のエースモンスターなのか！？

俺も負けそうになっちゃったぜ。でもシャイニングフレアウィングマンを召喚したぜ！

「断ち切らせはしない。罨発動クズ鉄のかかし」

しまったこいつの存在を忘れていたぜ。

「僕のターン・・・」

あれ？どうしたんだ？急に黙り込んだぞ？ ゲツ、救世竜セイヴァードラゴンを召喚しやがった。セイヴァーデモンドラゴンが来るのか？

「いや、残念だがセイヴァーデモンドラゴンにはレッドデーモンズ

ドラゴンが必要だ。」

「集いし星の輝きが新たな奇跡を照らしだす、光さす道となれ。シンクロ召喚光来せよセイヴァースタードラゴン」

ヤバイ。シャイニングフレアウィングマンの攻撃力を上回ったうえに効果までコピーされた。

「セイヴァースタードラゴンでシャイニングフレアウィングマンを攻撃。シューティングブラスターソニック！」

うわあつ。くっそー負けちまった。流石だぜ駿。次は負けねえぜ！

「ガッチャ、最高に楽しいデュエルだったぜ！」

ああこいつう俺のセリフパクリやがった。だったら俺も。

「ガッチャ。楽しいデュエルだったぜ。」

side 駿

「十代」

「なんだ」

「ガッチャ、最高に楽しいデュエルだったぜ。」

「なんだよ駿。人のをばくるなよ。まあお前の意外な一面が見えたからいいけど。」

あつ。しまったつい調子に乗ってしまった。 どうしよう。 ああもう恥ずかしいよお。 どうしよう。 まあもういいや。

デュエルの後（後書き）

中途半端ですがこれで終わりです。

今日の最強カードはセイヴァースタードラゴン。

次回「復活！万条目サンダー」 お楽しみに！

復活！万条目サンダー！（前書き）

今回から学園対抗戦になります。

復活！万条目サンダー！

そして遂に学園対抗戦の日が来た。

「そういえば十代」

「なんだ駿？」

「僕の相手は誰なんだろう？」

「俺だ！」

「ま、万条目！お前だったのか！」

「万条目さんだ！」

「相変わらず面倒な奴だな」

「皆のもの、俺の名は、一、十、百、千、万条目サンダー」

周囲からはサンダー、サンダー、と聞こえてくる。

「なんだ万条目、サンダーになって帰ってきたんだな」

「わあっ、と、透！久しぶりだな！」

「久しぶりだな、じゃないわっ。いつもそばにいたぞ！」

「ごめんごめん」

「それにしても原作、大部壊れてきてるな！」

「そうか？この程度壊した内に入らん。」

「まだ壊すつもりか。」

「当たり前。これからセブンスターズが始まる。どうだ、いつその事僕たちだけで全員倒さないか？」

「鍵がもらえる保証なんてないぞ？」

「鍵なんて偽物を作ればいい。どうだ？最初にアムナエルを倒すとか」

「いいなあそれ。」

「よし、それで決まりだ。これから僕はサンダーとデュエルがあるから。」

「おいっ。全国にシンクロを放送するのか？」

「まさか。その辺は海馬に放送を無理やり停止させるウイルスをぶち込んでおけと言ってあるから問題ない。」

「お前は一体何者なんだ？」

「お前と同じ異世界人だが……。まあ海馬の件に関しては前にデュエルしたときに僕が勝ったらなんでも言うこと聞いてやるという約束をしたからな。」

「お前は社長とデュエルしたのか？」

「ああ。それで勝ったのか？」

「当然だ。勝ったから言ったんだ。セイヴァーデモンドラゴンの効果をごまかして勝った。次からは気をつけるよ。まあ、本当は作者が効果を間違えたただけだが・・・。」

「作者？なんの話だ？」

「きにしないでくれ。こっちの話だ。」

「そうか。じゃあ行って来い。」

「ああ。言ってくる。」

場所は変わってデュエル場

「し、信じられないのーね。私の顔が、今全国に放送されているのーね。」

実際にはすでに放送はジャックされ、クロノスどころか、デュエル自体映らなくなっていたのだが。

「それでーは学園対抗戦。デュエルアカデミア本校、古城駿対デュエルアカデミアノース校・・・」

「結構。俺の紹介は俺がする。お前ら、俺のことは覚えているだろう。俺が辞めて、自業自得だと思った奴もいるだろう。」

これは事実。

「俺の名は、一、十、百、千、万条目・・・」

「「「「「「「「「「サンダー」」」」」」」」」」」

「デュエルスタートなのーね」

「「デュエル」」

「俺のターンドロー」 万条目の先行

「仮面竜を守備表示で召喚。ターンエンド」

「僕のターン」 駿のターン

「手札からボルトヘッジホッグを捨て、クイックシンクロンを特殊召喚。更に、ボルトヘッジホッグは自分の場にチューナーモンスターが存在するとき墓地から特殊召喚出来る。

L V 2 ボルトヘッジホッグにL V 5 クイックシンクロンをチューニング」

5 + 2 = 7

「集いし叫びがこだまの矢となり空を割く、光さす道となれ、シンクロ召喚いでよジャンクアーチャー。」

「来たな、シンクロ」

「ジャンクアーチャーの効果、自分ターンに一度、相手の場のモンスター一体をエンドフェイズまで除外することができる。ディメンジョンシュート」

「ジャンクアーチャーでダイレクトアタック。スクラップアロー。」

万条目 LP1700

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」 万条目のターン

「俺は、仮面竜を生贄に、アームドラゴンLV5を召喚」

「アームドラゴン……。」

「アームドラゴンLV5で、ジャンクアーチャーを攻撃」

駿 LP3900

「ターンエンド。エンドフェイズアームドラゴンはLV7へとレベルアップする。」

アームドラゴンはLV7となった。

復活！万条目サンダー！（後書き）

今回はここまで。今日の最強カードはジャンクアーチャー。攻撃力2300守備力2000一ターンに一度相手の場のモンスター一体を除外する。一気に攻めることもできるぞ！とのこと。それから久しぶりに透がしました。

飛翔せよ！スターダストドラゴン！（前書き）

やらかしてしまいました。普通に考えてこの題名はもっと前に来るはずだったのに…。

飛翔せよ！スターダストドラゴン！

「僕のターン」 駿のターン

「シールドウィングを守備表示で召喚、ターンエンド」

「俺のターン。」 万丈目のターン

「アームドラゴンLV7の効果、手札からアームドラゴンLV3を捨て、その攻撃力以下のモンスターをすべて破壊する。」

「くっ」

「アームドラゴンLV7でダイレクトアタック！」

駿 LP1200

「ターンエンド」

「僕のターン」 駿のターン

「罨発動、ロストスターディセント。これにより墓地のシンクロモンスターのレベルを一下げ特殊召喚する。こいつジャンクアーチャー」

ジャンクアーチャー LV6 DEF0

「今更そんな役に立たないシンクロモンスターを召喚したところで何になるという！」

「見せてやるよ！僕のエースモンスターを」

「何っ!？」

「チューナーモンスターニトロシンクロンを召喚」

「LV6ジャンクアーチャーにLV2ニトロシンクロンをチューニング」

6+2=8

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚飛翔せよスターダストドラゴン」

「これが貴様のエースモンスターか。だがそいつでは俺のアームドドラゴンLV7を倒すことはできない！」

「わかっている！ターンエンドだ。」

「これで終わりにしてやる！俺のターン。」 万丈目のターン

「アームドドラゴンLV7の効果発動。手札の闇よりいでし絶望を墓地へ送り攻撃力2800以下のモンスターをすべて破壊する。」

「僕はこの時を待っていた！スターダストドラゴンの効果発動。カードを破壊する効果が発動したときその効果を無効にし、破壊する。ヴィクテムサンクチュアリ！」

「何だと」

「そして僕のターン。スターダストドラゴンでダイレクトアタック！響け！シューティングソニック！」

「ぐわああああ！」

万丈目 LP0

「勝者、シニョール駿なのーね」

「万丈目。僕の勝ちだ。君は変わった。」

「何がしたい？」

「準！良くもやってくれたな！この恥さらしが！今回の放送に一体いくらかけたと思っているんだ！万丈目一族で世界を制覇する計画は貴様のせいで台無しだ！」

「ごめんなさい。兄さん。」

「ごめんで済むと思っているのか！このくずが！このデュエルは全国に放送されているんだ！その中での負けはただの負けとは違うんだ！」

「おい。」

「大体お前のようにくずが俺たちの兄弟であるなどおかし過ぎる。貴様は今から兄弟でも何でもない！」

「そんな・・・兄さん・・・。」

「兄さんなんて軽々しく呼ぶな！このくずが！」

「おいっ！」

「何だ。うるさいな！こっちは今それどころではないんだよ。このくずの処理に困ってな！話は後から聞く。」

「さっきから聞いていればくずくずくずくず、くずという単語しか出てきていない！貴様らは屑という言葉しか知らんのか！」

「イキナリなんだ！これはこっちの話だ。貴様には関係ない！」

「万丈目は屑なんかじゃない！貴様らのかけた下らんプレッシャーに打ち勝った！万丈目は負けてなどいない！」

「なんだと」

「それに仲間を侮辱されて黙っていられるほど俺はお人よしではない！とっととお引き取り願おうか！」

「貴様、誰相手にそんな口きいてるかわかってんのか！」

「ああわかってる。成り上がり者の万丈目一族の愚か者だな！」

「貴様は今自らこの世で生きていけなくなった」

「何？」

「忘れたか！テレビカメラをまわしていたのを！これで貴様の面は

全国へ流した！恥をかいたな」

「それだから貴様はバカなんだ」

「なにっ!？」

「知らなかったのか？テレビカメラは回っていなかったよ。最初からね。」

「なん・・・だと・・・。」

「わかったらとっとと帰れ。ここは君たちのような金の亡者の来るところではない。真剣にデュエルを学ぼうと、毎日必死になって、でもデュエルを心から楽しんでる、そういう人間がいる所なんだよ！」

「くうっ。今日のところは帰るぞっ。」

「早く帰れ！」

そして周りからも帰れコールが出た。

そして万丈目は本校に残ることになり、そして本校の勝利により、校長先生がとめさんのキスをもらい周りが啞然とした中、学園対抗戦は終わった。

「「まあ、こうなることは最初からわかっていたけどね!」」
by 駿 and 透

飛翔せよ！スターダストドラゴン！（後書き）

こんな感じで終わらせました。

今日の最強カードはアームドドラゴンLV7 攻撃力2800守備力1000

手札からモンスターカードを墓地へ送ることで、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つモンスターをすべて破壊する。

次回「VSダークネス 選ばれし者たち」 お楽しみに！

V S ダークネス 選ばれし者たち（前書き）

今回からセブンスターズ戦に入ります。

VSダークネス 選ばれし者たち

対抗戦から数カ月、もうそろそろかなあ、と思いながら授業を受けていたら校長から呼び出しくらった。他に呼び出されたのは十代、明日香、万丈目、カイザー、クロノス、それから三・三・三なんていうんだっけ？ まあ面倒だからエアーマンでいいや（注意！三沢くんのことです）後は大徳寺。

「今日みなさんに集まってもらったのは他でもありません。今この島にセブンスターズという連中が上陸してきました。セブンスターズというのは……。」

「この島に封印されている三幻魔というカードを奪うためにその封印を解く鍵を奪いに来る連中。違いますか？」

「駿君ですか……。貴方は何故そのことを知っているのですか？」

「今そんなことはどうでもいい。それよりも今のうちにセブンスターズのメンバーについて話しておく。そのほうがいいだろう？」

「確かにその方がいいんですけども、まあそれはまた今度。さっき駿君の話していた鍵を守るという仕事をしていただきます。」

「守る？ どうやって？」

「それは勿論デュエルによつてです。デュエルに負ければ鍵は奪われます。その鍵が奪われる前にセブンスターズ全員を倒す。これが君たちの使命です。受けてくれますか。」

「僕は結構です。というよりも鍵は偽物を作っておきました。一つくらい偽物があつた方がいいでしょう。じゃあ僕はこれで。」

「はい。わかりました。」

そしてその夜

「・・・というわけなんだ。」

「なるほど。それならもうじき吹雪さんが動き出すころだと思うぞ。」

「そういえばそうだな。じゃあ早いこと行くか！十代に取られる前に。」

「そうしようか。レッド寮の近くに行けば光に巻き込まれて戦えるぞ。」

「よし！行くとしようか。」

そして

「あつ、駿に透じゃん！いったい何しに来たんだ？」

「別に何かあつてきたわけではない。それから鍵についてだが。偽物は僕と透で守ることにしたよ。」

「そうかわかった。」

数時間後 辺りは光に包まれた。

「ついに来たな。」

「さあ、楽しませてもらおうか。」

「うわあっ！」

「ようこそ。七星門のかぎを守るもの達。わが名はダークネス。早速デュエルと行こうか。さあ私の相手は誰だ？」

「よしっ！それならおれが・・・」

「いや、待てこのデュエルは僕に任せてもらいたい。少なくとも僕はやつらの手の内を知っている。」

「そうか・・・わかった。でももしおまえが負けたら翔と隼人が・・・。」

「何の心配をしている？僕が負けるところを想像できるか？」

「いや・・・。」

「じゃあ任せてくれっ！」

「頼んだぞ」

「ようやく決まったか。では始めよう。」

「「デュエル」」

「私のターン。」 ダークネスのターン

「黒龍の雛を召喚。更に黒龍の雛を生贄にレッドアイズブラックドラゴンを特殊召喚。更に黒炎弾を発動相手ライフに2400のダメージを与える」

駿 LP1600

「そしてレッドアイズブラックドラゴンを生贄にレッドアイズダークネスドラゴンを特殊召喚しターンエンド。」

「僕のターン」 駿のターン

「BF一暁のシロッコをリリースなしで召喚。更にBF一黒槍のブラストと疾風のゲイルを特殊召喚。そしてLV4のブラストにLV3のゲイルをチューニング。」

4＋3＝7

「シンクロ召喚、出でよダークダイブボンバー」

「これが噂に聞くシンクロ召喚か。だがそんなモンスターではレツドアイズダークネスドラゴンを倒すことはできない。」

「だから？天使の施しを発動。三枚をドロ―し二枚を墓地に送る。そして墓地のBF―激震のアブロオロスと大肺もヴァ―ユを除外し、チューニング」

7＋1＝8

「吹きすさべ嵐よッ、鋼鉄の意志と光の速さを得てその姿を昇華せよ！シンクロ召喚。BF―孤高のシルバーウィンド！」

「だがそんなモンスターを何体並べてもレッドアイズダークネスドラゴンを倒すことは出来ぬっ！」

「残念ながらダークダイブボンバーの効果は自分の場のモンスターをリリースすることでそのモンスターのレベル×200ポイントのダメージを与える。すべてのモンスターをリリース！僕の場のモンスターレベルの合計は20。よって4000ポイントのダメージを受けてもらう！」

「ぐわあああ！」

ダークネス LPO

「わ、ワンターンキル！」

「相変わらずダークダイブボンバーはえげつないカードだな。」

「まあそういうな。それよりダークネスがカードに封印されたぞ」

「・・・兄さん！」

「どうした明日香!？」

「それよりなぜカイザー亮。お前がいる?。」

「何か光が見えたからな。それで明日香。そいつは誰だ?」

「わからないのっ?吹雪兄さんよ!」

「な・・・吹雪・・・だと・・・」

「ええそうよ。」

「それより明日香。兄さんが見つかってよかったな。」

「おいつ、透、空気読めっ。」

「いえ別に結構よ。」

「それにしても闇のゲームねえ。なんて恐ろしいものだ。」

「じゃあセブンスターズについての話でも聞かせてやろうか。」

「そうだな。敵の対策をとるにはそれが一番だろう。」

「だけど今日はもう遅いから解散ということぞ。」

こうしてセブンスターズ初戦は終わった。

V S ダークネス 選ばれし者たち（後書き）

「今日の最強カードはダークダイブボンバー。自分の場のモンスターをリリースすることでそのモンスターのレベル×200ポイントのダメージを相手に与える。実際は禁止カードだ。」

今回からセブンスターズが始まりました。

次回「V S ??? 満足は終わらない」 はあ・明日の5D, S 楽しみだなあ。

V S??.??. 満足は終わらない (前書き)

今回はちょっと期待外れの内容となります。

VS??? 満足は終わらない

ダークネス戦から数日、駿と透はある計画を立てていた。

「なあ透、大徳寺とやるか？」

「何だイキナリ？」

「いやだから次の相手だよ。」

「まあそれに関しては賛成だがどうやって潰すんだ？」

「そこは僕に任せておいてよ！」

「はあ、大丈夫か？」

「心配しないで！大丈夫だから。」

場所は変わってレッド寮の裏。

「にやにや、駿君と透君、一体どうしたんだにや？」

「単刀直入に言う。僕とデュエルしろ。ただ今ここでやると目立つからな、今夜、森に来てくれ。」

「にゃ？何ですかにゃ、イキナリ。」

「とぼけるなよ。あんたがセブンスターズだってことはすでに僕と透は知っている。もしこのことをばらされたくなければ大人しく森に来ることだな。」

「……………」

「じゃあな、それだけだ。」

再び場所は変わって駿のブルーの部屋。

「で、どうだった？」

「問題ない。今夜森に呼び出した。奴が来るかは別としてな。」

「本当に大丈夫か？」

「問題ない。森に来なければ皆にあいつがセブンスターズであるということはばらすと言ってあるからな。」

「なんか怖いな……」

「さてと夜に備えて準備しとくか。」

「そうだな」

そして夜

「さあ透森へ行こう。」

「よし、行くぞ！」

。場所は変わって森の奥。 もうそろそろ大徳寺が来るはずだが・・・

「ぐわあああ！！！！」

「おいっ。今の声。」

「間違いない大徳寺だ！」

「行ってみよう。」

「ああ。」

「何だよ、こんなんじゃ満足できねえぜ。」

「誰だ！お前は。」

「俺の名は……。」

「おい駿、もしかしてこいつ満足先生じゃねえか？」

「本当だ！満足バカだ。」

「馬鹿とはなんだ！馬鹿とは！」

「だってバカじゃねえか、バカの一つ覚えみたいに満足、満足って。」

「何だと……。満足をバカにするな！」

「誰も満足をバカにしているわけではない。お前自身をバカだと言っているんだ。鬼柳京介。」

「何故俺の名を……。」

「そんなことより鬼柳、変なメガネかけたにゃあにゃあ変なやついなかったか？」

「イキナリ呼び捨てかよ。それとお前らが探している奴らってアムナエルってやつのことじゃないか？」

「そうだ、そいつのことだ。何故お前が知っている。」

「いやあ、知ってるも何もそいつは俺が倒したからな。」

「えっ？ そうなの？」

「ああ、全然満足出来なかったぜ。」

「そうかだったら僕とデュエルしないか？ そいつとのデュエルよりは満足できると思うぞ。」

「いいのか！？ じゃあ早速やろうぜ！」

「「デュエル」」

「ぼくの先攻ドロー」 駿の先攻

「チューナーモンスターダークリゾネーターを守備表示で召喚。カードを三枚伏せてターンエンド。」

「さあ、満足させてもらおうか。俺のターン」 鬼柳のターン

「インフェルニティデーモンを召喚。カードを三枚伏せてターンエンド。」

「僕のターンドロー」 駿のターン

「永続罫ディメンジョンスイッチ発動。この効果でダークリゾネーターを除外。そしてバイスドラゴンを特殊召喚。そしてディメンジョンスイッチの効果でダークリゾネーターを特殊召喚。」

「チョっ待てっ、この展開って…。」

「その通り、LV5バイスドラゴンにLV3ダークリゾネーターをチューニング」

5+3=8

「王者の鼓動、今ここに列を成す、天地鳴動の力を見るがいい。シンクロ召喚、我が魂レッドデーモンズドラゴン。」

「やっぱり……。ってちょっと待て、レッドデーモンズドラゴンはジャックしか持っていないカードの筈だ。それをどうしてお前が……？」

「ひとつ言っておく。ここはお前らの居た時代とは違う。過去だ。ここまで言えばわかるよな？」

「ジャックの前のレッドデーモンズドラゴンの所持者ということか……。」

「まあ大体そんなところだ。続けるぞ。レッドデーモンズドラゴンでインフェルニティデーモンを攻撃アブソリュートパワーフォース。」

「罠カード、インフェルニティインフェルノ、この効果で手札を二枚捨てる。そしてデッキからインフェルニティと名のつくモンスターを墓地へ送る。」

鬼柳 LP2200

「墓地のインフェルニティリベンジャーを特殊召喚。そしてレベルは4となる。」

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン。ドロー。」 鬼柳のターン

「インフェルニティガーディアンを召喚。LV4インフェルニティガーディアンにLV4インフェルニティリベンジャーをチューニング。」

4+4+118

「死者と生者零にて交わりしとき永劫の檻より魔の竜は放たれる。シンクロ召喚、出でよインフェルニティデスドラゴン。」

「出たなインフェルニティデスドラゴン。」

「インフェルニティデスドラゴンの効果でレッドデーモンズドラゴンを破壊。そしてその攻撃力の半分の1500ポイントのダメージを受けてもらう」

駿 LP2500

「ターンエンド」

「僕のターン。」 駿のターン

「魔法カードリゾネーターコールを発動。デッキからクリエイトリゾネーターを手札に加える。そして罨カードロストスターディセン

ト発動。墓地からレッドデーモンズドラゴンを特殊召喚。更に魔法カードクリムゾンヘルセキユア発動。この効果でお前の場の魔法・罫カードをすべて破壊する。更に紅蓮魔龍の壺を発動、カードを二枚ドロウする。更にクリエイトリゾネーターを特殊召喚、更にチューナーモンスタードレッドドラゴンを召喚。荒ぶる魂、バーニングソウル。LV7レッドデーモンズドラゴンにLV3クリエイトリゾネーターとLV2ドレッドドラゴンをダブルチューニング。」

7+2+3=12

「王者と悪魔、今ここに交わる、荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ、シンクロ召喚、出でよスカーレッドノヴァドラゴン。」

「つ、スカーレッドノヴァドラゴンだと・・・。」

「天使の施しを発動、三枚ドロウし、二枚を墓地に送る。そしてスカーレッドノヴァドラゴンの攻撃力は墓地のチューナー一体につき500ポイントアップする。」

スカーレッドノヴァドラゴン ATK6000

「スカーレッドノヴァドラゴンでインフェルニティデスドラゴンを攻撃、バーニングソウル！」

鬼柳 LPO

「どうだ鬼柳、満足できたか？」

「ああ満足したぜ。」

「それよりお前は帰れるのか？」

「うっ、そういえば……。」

「じゃあ鯨島校長に相談してみようぜ。」

「ありがとう助かる。」

「じゃあ今日は僕の部屋に泊って行きなよ。」

「本当か？ありがとう。」

こうして新たな仲間に加えて帰ったのであった。

V S ??? 満足は終わらない (後書き)

今回、何故か鬼柳を出してしまいました。なんでだろう？それより今日の最強カードはスカーレットノヴァドラゴン、攻撃力3500守備力3000墓地のチューナー一体につき攻撃力を500ポイントアップさせる。

それから皆さん、先日の5D's見ましたか？まあアポリアが勝つとは思いませんでしたけど、個人的にはちよつとガツカリですね。何故かというと、アフターグロウが失敗しているから。あそこはアフターグロウの効果を成功させるけど、ZONEがそれにカウンターをしてアポリアが負けるとか、そういう展開を期待していたんですけどね……。それともう一つシグナーの竜+パワーツールとか入れ過ぎだと思っんですけど……。次回「V S カミュラ 魂を・・」 お楽しみに

V S カミューラ 魂を・・・（前書き）

感想に「最初の方で海馬瀬戸を倒したのはまずいのではないか」と読み取れる感想がありました。そちらの方に関しては実はある伏線となっっています。なので、そちらに關しましてはご理解いただき今後も当小説をよろしく願ひいたします。

それから、僕の言葉使用でおかしな点があればそちらに關しても感想の方に書いてください。

VS カミューラ 魂を……

翌朝、クロノスは学校に来なかった。何でだろう？

「なあ透、今日はクロノスの授業は無いらしいけど何かあったのか？」

「さあ？十代に聞いてみれば？」

「それもそうだな、なあ十代。」

「今日はクロノスは来ていないみたいだが何かあったのか？」

「・・・クロノス先生はセブンスターズに負けた。」

「何っ！？それは本当か？」

「ああ」

「そいつの名前は何ていうんだ？」

「確か、カミューラって言ったはずだ。」

「そうか、ありがとう、そいつは今日、俺と透で抹殺してくるから安心しろ。」

「いやいや、心強いけど恐いって。それに今日のはカイザーがデユエルするんだぜ！」

「何っ！？駄目だ！それだけはやってはならない！」

「なんでだ？」

「黙れ！お前らは全員俺と透に鍵を預けろ！そうでなければ取り返しつかない事になるかも知れない。」

「おい？いきなりどうしたんだよ？」

「兎に角お前らはこの件にこれ以上首を突っ込むな！」

「おい、お前熱でもあるのか？」

「俺は正常だ！闇のデュエルの経験のないお前らにやらせるわけにはいかない。」

「何だよ！そんなこと言うならお前は闇のデュエルの経験があるのか！」

「俺の闇のデュエルはせいぜいこの間のダークネス戦程度だ。だがお前らは闇のデュエルをしてはいけない。」

「何だよ、俺たちは仲間じゃないのかよ！」

「何時失うかもわからない仲間なら俺はいらない。」

「何だよ、失うって！」

「いや何でもない。大声を出して済まなかった。ただこれだけはわかっていてもらいたい。闇のデュエルは危険だらけだ。一度首を突

っ込めば、もう二度と元には戻れないかもしれない。それでも構わないなら僕たちと一緒に戦おう。その覚悟がないなら鍵は僕と透に置いていけ。」

「ああ解った。それなら俺たち全員お前と共に闘う。」

「他の連中の意見は？」

「皆もきつとそうだ。大体その覚悟がなければ鍵なんて受け取らない。」

「・・・それもそうだな。じゃあ今日はカイザーに任せよう。僕は部屋で待機しているよ。」

「一緒に来ないのかよ？」

「闇のデュエルと言うくらいだ、ひょっとしたら仲間の命を賭けるとか言ってくるかも知れないからその時のために。」

「わかった。お前は部屋で待っていてくれ。」

「ああ解った。じゃあな。」

「なあ駿」

「透か、突然出てくるなよ！」

「いや、ずっといたし。それよりお前は本当にこれで良かったのか？」

「ああ、十代たちに闇のデュエルの厳しさを教えるには丁度いい。」

「そうか。そういえば何か忘れている気がするが気のせいかな？」

「まあ、きっと気のせいだ。」

「そうだな。」

「じゃあ僕たちは部屋で待っていよう。」

翌日

「昨日はどうだった？十代。」

「カイザーが負けた。」

「あのカイザーが！？」

「ああ、相手は幻魔の扉とか言うインチキカードを使ってきやがった。」

「どの辺がインチキなんだ？」

「自分の魂と引き換えに相手の場のモンスターをすべて破壊して相手の墓地のモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚するモンスターだ。それにその魂を翔で代用しようとしたんだ。だからカイザー

が・・・。」

「自ら敗北の道を選んだ、ということか。」

「ああ、はっきり言って破りようがない。」

「そうだな。なら今日は僕が相手を・・・。」

「いや、今日は俺にやらせてくれ。」

「透!？」

「ああ、最近出番がなかったせいだな、もうデュエルがしたくて仕方ない。それに新デッキ作ったし。」

「そうか、わかった。頼むぞ、透。」

「ちえ、今日も俺は出番なしかあ。」 ふてくされる十代

「まあそういうな、十代。偶にはいいじゃないか。」

「まあいいけどさ、透、楽しいデュエルを見せてくれよ」

「わかった。」

そしてその夜、

「今日私に鍵を献上しに来たのは誰かしら?」

「お前に鍵をくれてやるつもりはないが今日の相手は俺だ。」

「いいでしょう。デュエルよ。」

「「デュエル」」

「私のターン。」 カミューラの先行

「不死のワーウルフを召喚。ターンエンド。」

「俺のターン。」 透のターン

「グランドコアを守備表示で召喚。」

「更にデュアルサモンを発動、そしてキラートマトを召喚。ターンエンド。」

「私のターン、幻魔の扉を発動。相手のモンスターをすべて破壊。」

「。。。。」

「幻魔の扉は私の魂を賭けることにより相手の場のモンスターをすべて破壊し、相手の墓地のモンスターを特殊召喚する。でもね、私の闇の力で貴方の仲間から代わりの生贄を選ぶわね。誰にしようかしらね。いっそのこと全員でどうかしら？」

「やめろ！」

「貴方が負ければいいのよ。」

「待て！透！」

「駿。」

突然駿の額が光りだした。

「あれは、バカな！闇の力だと！」

「ありがとう駿。これでお前は自らの魂でも賭けな！」

「くっ、しかし幻魔の扉の効果で私の場にキラートマトを特殊召喚。更に不死のワールフを生贄にヴァンパイアロードを召喚。そしてヴァンパイアジェネシスを特殊召喚。全員でダイレクトアタック。」

「これが通れば駿の負けだ！」

「いや、良く場を見ろ、」

「馬鹿な、なぜ奴の場にモンスターが、それも5体！？」

「グランドコアは効果で破壊されたときデッキ、手札、墓地から機皇帝グランエル∞、グランエルT、グランエルA、グランエルG、グランエルCを特殊召喚する。」

「だがそんな低レベルモンスターに何ができる！」

「合体せよ！機皇帝グランエル∞！」

機皇帝グランエル∞ ATK4000

「こ、攻撃力4000だっ!? 一体なぜ!?」

「機皇帝グランエルは自分のライフと同じになる。」

「何だと!?!」

「他にすることは無いのか?」

「くっ、ターンエンド」

「俺のターン。」 透のターン

「機皇帝グランエル∞でヴァンパイアジェネシスに攻撃! グランドスターキャノン! 更に速攻魔法、リミッター解除を発動、俺たちの絆を弄んだ罪を受けろ!」

機皇帝グランエル∞ ATK8000

「ぎゃああああ」

カミューラ LPO

デュエルが終わるとカミューラの魂が幻魔の扉に引き込まれていくのがわかった。そして人形にされていたクロノスや亮も元の姿に戻った。

「皆! この城はもうすぐ崩れる。急いで逃げよう!」

「そうだ！皆急げ！」

そして城の外

「あれが、闇のデュエル……」

あまりの光景に言葉を失う十代達

「だから僕は昨日言ったんだ。どうする、まだ続けるかい？」

「当たり前だ。」

「そうか、なら今日はもう帰ろう。明日も授業はある。」

「そうなのーね。授業は受けないといけないのーね。」 突然クロノスが会話に入ってくる。

「ところで透？お前、なんで機皇帝を持っているんだ？」

「しらね、お前がTGを持っていたのと同じだ。」

「でもTGはカード化されたぞ。」

「そうだな。」

透だけが非OCGカードを持っていて何か不満な駿だったがとりあえず帰ることにした。

V S カミューラ 魂を・・・（後書き）

いかがでしたか？一つお知らせです。僕の学校ではもうすぐ定期テストが始まります。その都合で恐らく暫くは更新できないと思いますが、必ずまた更新を再開いたしますのでよろしくお願いいたします。

そうだ！温泉に行こう（前書き）

試験前とか言いながら更新してしまいました。

そうだ！温泉に行こう

S i d e 駿

透がカミューラとデュエルをした翌日、今日は休みだ。と、いうことで今日は一日中のんびりしているかと思っていたら十代が僕の部屋に訪ねてきた。

「一体何の用だ、十代。」

「いやあ悪い、悪い。いやあ、何でも隼人が言うにはこの島に温泉があるらしいんだけど良かったら駿も一緒に来ねえか？」

「済まないが、あまりそういう気分じゃ……。」

「何だよ駿、人付き合い悪いな。」

透だ。こいつはまさか

「お前は行くのか？」

「勿論だ。温泉だぜ、行かねえ手は無えだろ。」

「……まあ透が来るなら……。」

「よっしゃ、そうと決まれば早速行こうぜ。」

そして場所はかわって温泉

むこうで十代達がはしゃいでいる。男は裸になると元気になる奴がいるって聞いたことがあるけど間違いなく十代達はその類いだ、まあ、僕も男だけど……。そんな事を考えていると、十代達がこっちに来た。

「おいっ、十代、今何をした？」

「へっへーん。こーれな〜んだ」 そう言っ
て十代はタオルを出す。・・・まさか

「十代、お前は僕のタオルをとったのか？」

「正解〜、という訳じゃあな！」

「おいっ、待て十代っ。」 僕はそう叫んで十代を追う。十代は途中で「追いつけるもんなら追いついてみろ」と、言っていたが僕の水泳の腕を舐めてもらっては困る。普通に泳いで追いついた。さて、こいつ、どうしてやろうか？それにしてもまさか裸で風呂で泳ぐ事になるとは思わなかった。

「駿ごめん！お願いだから今回だけは許して！」

「まあ、別にいいけど……。それよりあそこにいるのはハネクリボーなのか？」

「駿、お前は精霊が見えるのか？」

「まあな、それよりどこかに行くみたいだぞ。」

「そうだな！追いかけてみよう！」

場所はかわって精霊界。

「フン、貴様らこんな所に何をしに来た？」

「それより海馬、お前こそ何やってんだ？」

「俺は海馬等ではない。正義の味方カイバーマン」

「バカな事やってないで……。真面目に受け答えしろ、海……」

「正義の味方カイバーマン」

「だから、か……」

「正義の味方カイバーマン」

「ああもうわかったから黙れ。」

「フン、わかればいいのだ。」

まあ、その後十代がカイバーマンとデュエルをし、負けた。けど今のデュエルを見ていて一つ違和感を感じたが、まあいいや。

こうして僕たちは温泉に行ったにもかかわらず大して疲れは取れなかった。

そうだ！温泉に行こう（後書き）

今回は此処までです。ところどころ抜けている部分はあるとおもいます。多分当分更新できません。

最後の一人（前書き）

はあ、やっと試験終わった！というわけで更新します。今回が七人目です。アムナエルは鬼柳が倒しちゃったんでね。とりあえずタイタンではありません。誰でしょうね？それは本編を見てください。

最後の一人

side透

初めまして、矢吹透です。本当は初めましてじゃないけど初の俺視点だからね。と、いうわけでこれから七人目を探しに行くよ。ちなみにタニヤ、アビドス、黒蠍は十代達が倒したからね。勿論駿には内緒ね、多分また出番とられるかもしれないから。だから夜道を散歩中。タイタンじゃないといいな……。だって最後がタイタンって何か嫌でしょ。最後じゃなければいいんだけどなあ。ん、あいつは誰だ？聞いてみよう。

「お前誰？」 はっ、失礼な聞き方をしてしまった。どうしよう。

「ふん、俺を知らないとはな。」 この人って海馬社長？

「海馬社長ですか？」

「俺が海馬瀬戸だ。」

「じゃあそのお偉い海馬社長が一体こんな山奥に何しに来たんですか？」

「それは……お前たちの持つその鍵を奪うためだ！」 か・鍵を奪うってどういうこと？

「どういうことだ。」

「俺がセブンスター最後の一人と言うことだ。そしてもう一つ、矢吹透、貴様の持つ機皇帝のカードを奪いに来た。」

「で、俺にどうしろと?」

「勿論デュエルだ。俺が負ければ鍵は奪わない。だがお前が負ければお前の持つ機皇帝グランエル達と、その鍵は貰って行くぞ。」

「もう、デュエルをするしかないのか?」

「当然だ。この俺とデュエルができることを誇りに思え。デッキはDではなく機皇帝を使え。」

「何!? わざわざそんな手に乗るわけ……。」

「悪いがお前にDは使わせない。貴様のデッキはすでに機皇帝のデッキ以外使用不能とした。」

「いくら海馬社長でもそんなこと出来るわけがない。」

「ならば確認してみるがいい。」

「な・・Dのデッキのイラストが消えているだど!?!?」

「さあ、機皇帝でデュエルを受けろ。もっとももうすでにゲームは始まっている。お馴染み、闇のデュエルがな。この闇が発動すれば貴様はもう逃げることはできない。」

「くそっ」
そう言って俺はデュエルディスクを機動させる。

「「デュエル」」

side 駿

皆さんこんにちは。古城駿です。何？今日はやけに丁寧じゃないかって？そりゃ透もしっかり挨拶したからね。そういえばさっきから透の姿が見当たらない。どこへ行ったのかな？そういえばさっき、外で爆発音がしたんだよね。まあいいか、気にしないで。

「いや、待て」 おお、アテム、久しぶり！

「久しぶり！じゃない。いまあの爆発音のあったところで闇のデュエルが行われていた。」

「じゃあ、誰かがセブンスターズと戦っていたってこと？」

「恐らく……。ちょっと行ってみよう。」

「よし、行こう」 すると向こうの方で、ソリッドビジョンが見えた。あそこでデュエルしているのは……。まさか、透！？

「馬鹿な、俺がここまで簡単に負けるだど！？」

透 L P O

「フハハハハ、敗者はこのカードの中に魂を吸い取られる。」

「透！大丈夫か、透！」

「話しかけても無駄だ。その男の魂はこのカードの中に封印されて

いる。」

男はそう言って透の魂の封印されたカードを見せた。

「俺は目的のものを手に入れた。もうこの島に用は無い、と言いたいところだがまだ鍵を手に入れなくてはならないようだな。」

「目的のもの？何だそれは？」

「デュエルをすれば直ぐにわかる。」

「いいだろう。そのデュエル受けてやる。」

「「デュエル」」

「僕のターン」 駿の先行

「モンスターをセットする。そしてカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

「フツ、行くぞ俺のターン。」 海馬のターン

「ワイズコアを守備表示で召喚。カードを二枚伏せ、ターンエンドだ。」

「僕のターン。ドロ。」 駿のターン

「ライトロードハンターライコウを反転召喚。ライトロードハンターライコウの効果でお前の場の伏せカードを破壊。」

「買発動ツインボルテックス。お前の場のハンターライコウと、俺の場のワイズコアを破壊する。」

「だが、ライトロードハンターライコウの効果でデッキからカードを三枚墓地に送る。」

「ワイズコアが効果で破壊されたときデッキ、手札、墓地から機皇帝ワイゼル∞、ワイゼルT、ワイゼルA、ワイゼルG、ワイゼルCを特殊召喚する。合体しろ、機皇帝ワイゼル！」

「な、何故海馬が機皇帝のカードを！？まさかお前の言っていた目的のものっていうのは透の持つ機皇帝だったのか？」

「半分正解だ。だがこのワイゼルは元々俺のものだ。」

「なら、透から何を奪った？」

「消えゆく者にこれ以上答えることは何もない。」

「それはどうかな？」

「ならばお前の可能性を見せてみる！」

「チューナーモンスタージャンクシンクロンを召喚。墓地からボルトヘッジホッグを特殊召喚。LV2ボルトヘッジホッグにLV3ジャンクシンクロンをチューニング。」

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚、出でよ、ジャンクウォーリアー」

「だが攻撃力2300のモンスターでは我が機皇帝を破壊することはない。」

「罨発動、シンクロストライカーユニット。このカードをジャンクウォーリアーに装備、攻撃力を1000アップさせる。」

ジャンクウォーリアー ATK3300

「ジャンクウォーリアーで機皇帝ワイゼル∞を攻撃。スクラップファイト！」

「ワイゼルGの効果を発動。このカードに攻撃対象を変更する。」

「だが戦闘は続行する！ジャンクウォーリアーでワイゼルGを攻撃！」

「カードを二枚伏せてターンエンド。エンドフェイズ、シンクロストライカーユニットの効果でジャンクウォーリアーの攻撃力を800ダウンさせる。」

「俺のターンドロー。」 海馬のターン

「ワイゼルG3を召喚」

「機皇帝ワイゼル∞の効果発動。一ターンに一度相手の場のシンクロモンスター一体を吸収する。」

「ジャンクウォーリアー!!」

「これにより吸収したシンクロモンスターの元々の攻撃力分機皇帝ワイゼルの攻撃力をアップさせる。」

機皇帝ワイゼル∞ ATK4800

「機皇帝ワイゼル∞でダイレクトアタック」

「罨発動クズ鉄のかかし。これで相手の攻撃を一度だけ無効にする。」

「カードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン。」

「天使の施しを発動。デッキからカードを三枚ドロし、その後手札二枚を墓地へ送る。」

「今更そんなことをしても意味はない。機皇帝の前にシンクロなど無力!」

「見せてやる。シンクロ召喚の無限の可能性を!墓地からD－HEROディアボリックガイを除外し、デッキから新たなディアボリックガイを特殊召喚。更に手札一枚をデッキの一番上に戻すことにより墓地からゾンビキャリアを特殊召喚。LV6ディアボリックガイにLV2ゾンビキャリアをチューニング。」

「集いし願いが新たに輝く星となる、光さす道となれ、シンクロ召喚飛翔せよスターダストドラゴン。」

「だがシンクロ召喚などしても無駄だということが分からないのか！」

「まだ行くぜ！墓地のグローアップバルブの効果発動。デッキの一番上を墓地に送ることで墓地から一度だけ特殊召喚することができる。そして墓地に置かれたダンディライオンの効果で綿毛トークンを二体特殊召喚。LV1綿毛トークンにLV1のグローアップバルブをチューニング」

1+1=2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う、光さす道となれ、シンクロ召喚希望の力、シンクロチューナーフォーミュラシンクロン！」

「シンクロチューナーだと・・・まさか!？」

「行くぞ、クリアマインド！LV8シンクロモンスタースターダストドラゴンにLV2シンクロチューナーオーミラシンクロンをチューニング！」

8+2=10

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く、光さす道となれ、アクセルシンクロ！生来せよ、シューティングスタードラゴン!!」

「く・・・アクセルシンクロか・・・。」

「シューティングスタードラゴンの効果発動。一ターンに一度デッキを上から五枚確認しその中のチューナーモンスターの数だけ攻撃ができる。」

一枚目チューナーモンスタークイックシンクロン、二枚目チューナーモンスターデブリドラゴン

三枚目チューナーモンスターエフェクトヴェーラー、四枚目チューナーモンスターターボシンクロン

そして五枚目！・・・くっ魔法カードワンフオーワンだ・・・。」

「フハハハハ、このターンに四回しか攻撃できないことを悔いるがいい。第一機皇帝ワイゼル∞の攻撃力の方が上。やはり貴様は俺には勝てん！」

「罨発動、荒野の大竜巻。ジャンクウォーリアーを破壊！」

機皇帝ワイゼル∞ ATK2500

「シューティングスタードラゴンの攻撃、一回目」

「ワイゼルG3の効果で攻撃対象をこのカードに変更。そしてワイゼルG3は一ターンに一度だけ戦闘では破壊されない。」

「シューティングスタードラゴンの攻撃、二回目」

「ワイゼルG3の効果で攻撃対象をこのカードに変更。」

「だが次は破壊される。」

「別にこのくらい構わん！」

「シューティングスタードラゴンの攻撃、三回目。」

「永続罨リビングデッドの呼び声、この効果で墓地からワイゼルG3を攻撃表示で特殊召喚。そしてワイゼルG3の効果で攻撃対象をこのカードに変更。」

「だが、ダメージを受けてもらう！」

「そうはいかない。罨発動、ガードブロック、戦闘ダメージを無効。そして一枚ドロ」

「シューティングスタードラゴンの攻撃、四回目。」

「ワイゼルG3の効果で攻撃対象をこのカードに変更、今度はダメージを受ける。」

海馬 LP700

「ターンエンド」

「俺のターン。ドローカード」 海馬のターン

「ふ、機皇帝ワイゼル∞の効果発動！一ターンに一度相手の場のシンクロモンスターを吸収し、その攻撃力分、このカードの攻撃力をアップさせる。」

「シューティングスタードラゴンの効果発動、相手ターンに一度、除外することができ、相手モニスタアの攻撃を一度だけ無効にする。」

「ならば魔法カード、異次元からの埋葬発動。お前のディアボリックガイ、ゾンビキャリア、そしてシューティングスタードラゴンをお前の墓地に戻す。これでエンドフェイズにシューティングスタードラゴンが戻ってくる効果がなくなった。」

「くっ……。」

「更に魔法カード死者蘇生発動。貴様の墓地からシューティングスタードラゴンを特殊召喚する。」

「シューティングスタードラゴン!!」

「じぶんの最も信頼するモンスターに負けるがいい。シューティングスタードラゴンでダイレクトアタック、スターダストミラーージュ。」

「罨発動、クズ鉄のかかし。相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする。」

「ならば機皇帝ワイゼル∞でダイレクトアタック。」

「だがそれでは俺のライフを削りきることはできない。」

「ところがそれが違うんだよ。速攻魔法発動リミッター解除!俺の場の機械族モンスターの攻撃力をエンドフェイズまで倍にする。」

機皇帝ワイゼル∞ ATK5000

「こ・・・攻撃力5000だと!?」

「機皇帝ワイゼル∞でダイレクトアタック！」

「ぐわあああああ！」

駿 L P O

「フツ、所詮貴様はこの程度だったか。鍵は貫って行く。フフフ、あのカードが完成するまであと少しだ。」 海馬は怪しく笑った。

最後の一人（後書き）

今日の最強カードは機皇帝ワイゼル ∞ 。このカードの攻撃力、守備力は自分の場の機皇帝パーツの合計と同じになる。

ところで皆さん、先週の5D'sを見ましたか？僕は録画して見ました。オーバーリミットアクセルシンクロ・・・かっこいいとしか言いようがありませんでした。

自分は感動してずっと泣いていましたね・・・。遊戯王ってやっぱりいいな、と改めて思いました。

最後の敵は海馬でした。何故海馬が機皇帝を？その真相は次回明らかになる。

次回「機皇帝の恐怖」 お楽しみに。それからすいません。自分ごときが遊戯王を語って。それでもやはり僕は遊戯王が大好きです。

機皇帝の恐怖（前書き）

今回海馬の正体が・・・。

機皇帝の恐怖

side海馬

フ、これで残るカギはあと3つ、そしてあのカードも時期に・・・
フフフフもう少しだ。次は誰を生贄にしようか？

「貴様が俺の偽物か。俺が海外へ行っていた間に随分と勝手な真似をしてくれたみたいだな！」

「な・・・貴様は海馬瀬戸！？何故貴様がここに！？」

「この俺が貴様の手下如きに捕まるわけ無かろう。貴様はこの俺を語り、悪事を働いた。その罪は重いぞ！」

「だが何故貴様はここがわかった？」

「フ、海馬コーポレーションをなめるな！そこらの社員はだませても、磯野と木馬の目だけはごまかせんぞ！そして、俺は鯨島から貴様のことを聞いて急いでここまで飛んできた、という訳だ。」

「くっ、まあいい。ならば貴様を闇のデュエルでその魂を我が物にするまで！」

「ほう、この俺とやろうとなど、命知らずが・・・いいだろう、貴様のその勇氣に免じて受けてやろう！」

「その減らず口も何時までもつかない？」

「「デュエル」」 注・ここから先は機皇帝を使う方を偽海馬と表現します。

「俺の先行、ドローカード。」 海馬（本物）のターン

「永続魔法、未来融合フューチャーフュージョンを発動。俺はF G Dを選択し、デッキから伝説の白石三枚と、サファイアドラゴン、エメラルドドラゴンを墓地へ送る。そして、墓地へ送られた伝説の白石の効果でデッキからブルーアイズホワイトドラゴンを手札に加える。」

「何をする気だ？」

「俺はシャインエンジェルを守備表示で召喚。カードを二枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン。」 偽海馬のターン

「俺はワイズコアを守備表示で召喚、カードを四枚伏せて、ターンエンド。」

「何を出すかと思えばそんな低級壁モンスター。俺のターン、ドロ」 海馬のターン

「手札を一枚コストに魔法カードコストダウンを発動。そして、シャインエンジェルを生贄に、出でよ！ブルーアイズホワイトドラゴン。」

「だが、ワイズコアは一ターンに一度だけ戦闘では破壊されない！」

「貴様を倒すための戦略なら、すでに完成しているわ！魔法カード滅びのバーストストリームを発動、
これでお前の場のモンスターをすべて破壊する。」

「くくくつ、かかったな。ワイズコアが効果で破壊されたとき、デッキ、手札、墓地から機皇帝ワイゼル∞、ワイゼルT、ワイゼルA、ワイゼルG、ワイゼルCを特殊召喚する。合体しろ！機皇帝ワイゼ
ル！」

「いきなりモンスターを五体召喚だ！？滅びのバーストストリームを発動したターン、ブルーアイズホワイトドラゴンが攻撃ができない。ターンエンドだ！」

「俺のターンドロ」 偽海馬のターン

「俺はワイゼルAをリリースし、ワイゼルA3を特殊召喚。更にワイゼルGをリリースし、ワイゼルG3を特殊召喚。」

機皇帝ワイゼル∞ ATK2900

「更に、ワイゼルTをリリースし、ワイゼルT3を特殊召喚。更にワイゼルA3をリリースし、ワイゼルA5を特殊召喚。」

機皇帝ワイゼル∞ ATK3400

「馬鹿な！ブルーアイズの攻撃力を超えただと・・・。」

「機皇帝ワイゼル∞でブルーアイズホワイトドラゴンを攻撃。」

「リバーiscardオープン、攻撃の無力化！」

「ワイゼルT3の効果、一ターンに一度だけ、相手の魔法、罠カードの発動を無効にし、破壊する！」

海馬 LP3600

「ターンエンド。」

「俺のターン。」 海馬のターン

「このスタンバイフェイズ、俺の場にFGDを特殊召喚する。」

「速攻魔法、サイクロンを発動し、未来融合を破壊する。」

「魔法カード死者転生を発動、手札を一枚捨てて墓地からブルーアイズホワイトドラゴンを手札に加える。」

「そうはさせない、ワイゼルT3の効果で発動を無効。」

「ならば死者蘇生を発動。墓地からブルーアイズホワイトドラゴンを特殊召喚する。我が元によりみがえれブルーアイズホワイトドラゴン！更に融合を発動、出でよブルーアイズアルティメットドラゴン！」

「来たか、アルティメットドラゴン……。」

「ブルーアイズアルティメットドラゴンで機皇帝ワイゼル∞を攻撃！アルティメットバースト！」

「ワイゼルG3の効果発動、攻撃対象をこのカードに変更する。」

「罠カード発動天罰、手札を一枚捨てて、ワイゼルG3を破壊！そして戦闘を続行。アルティメットバースト！」

偽海馬 LP2000

「カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

「俺のターン。」 偽海馬のターン

「天使の施しを発動。三枚をドローし手札を二枚墓地へ送る。永續罠リミットリバースを発動、墓地からスカイコアを特殊召喚、更にスカイコアを守備表示に変更し、スカイコアを破壊。」

「効果による破壊・・・まさか!？」

「スカイコアが効果で破壊されたとき、デッキ、手札、墓地から機皇帝スキエル∞、スキエルT、スキエルA、スキエルG、スキエルCを特殊召喚。合体しろ！機皇帝スキエル！」

「新たな機皇帝か・・・。」

「更に、スキエルAをリリースし、スキエルA3を特殊召喚。」

機皇帝スキエル ATK2400

「だがそんなモンスターでは我がブルーアイズアルティメットドラゴンには敵わない。」

「だが、スキエルA3のモンスター効果、自分の場のモンスターを選択し、そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで半分にする代わりに、ダイレクトアタックができる。機皇帝スキエル∞、ダイレクトアタック！更にリミッター解除を発動」

海馬 LP1200

「だがこれで貴様の自慢の機皇帝はエンドフェイズに破壊される。」

「だがその前にグランドコアを召喚、更に罠カード激流葬を発動。」

「罠カード亜空間物質転送装置、ブルーアイズアルティメットドラゴンを除外！」

「グランドコアが効果で破壊されたときデッキ、手札、墓地から機皇帝グランエル∞、グランエルT、グランエルA、グランエルG、グランエルCを特殊召喚、合体せよ、機皇帝グランエル！」

「機皇帝グランエルの攻撃力は自分のライフポイントと同じになる。よってグランエルの攻撃力は2000。カードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン」 海馬のターン

「ブルーアイズアルティメットドラゴンで機皇帝グランエルを攻撃、アルティメットバースト！」

「罠発動クズ鉄のかかし。」

「カードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン」

偽海馬のターン

「永続罨DNA改造手術を発動、俺は機械族を選択。そして、グラ
ンエルCをリリースし、サイバードラゴンをアドバンス召喚。そし
てサイバードラゴンと機皇帝、そして、お前のブルーアイズアルテ
イメットドラゴンを融合キメラテックフォートレスドラゴンを召喚。
キメラテックフォートレスドラゴンの攻撃力は融合素材にしたモン
スター一体につき1000ポイントとなる。」

キメラテックフォートレスドラゴン ATK6000

「キメラテックフォートレスドラゴンでダイレクトアタック。エヴ
オリューションレザルトアーティレリー！」

「手札からバトルフェーダーを特殊召喚し、バトルフェイズを終了
させる。」

「ターンエンド」

はたしてこのデュエルはどちらが勝つのか？

機皇帝の恐怖（後書き）

次回「絶望の魔人」 お楽しみに！
ごめんなさい。中途半端になってしまいました。

絶望の魔人（前書き）

久しぶりに更新です。

絶望の魔人

「俺のターン」 海馬のターン

「天よりの宝札発動、お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドローする。」

「ありがとう、俺の手札を増やしてくれて。」

「誰が貴様に次のターンまでくれてやる？このターンでけりをつけてやる。貪欲な壺を発動、墓地から三枚のブルーアイズホワイトドラゴンとブルーアイズアルティメットドラゴン、エメラルドドラゴンをデッキに戻す、そしてカードを二枚ドローする。」

「フ、良いカードは引けたか？」

「貴様を御望み通り葬ってくれる。古のルールを発動、現れよブルーアイズホワイトドラゴン。」

「所詮攻撃力3000程度のノーマルモンスターではこの俺を倒すことはできない。ついでに永続罨スピリットバリアを発動。」

「小癪なまねを・・・フ、貴様は俺のデッキ、俺のデュエル、そしてデュエルモンスターズのこと何も分かっていない。教えてやる、ブルーアイズは戦いの中でこそ輝くということを、ブルーアイズホワイトドラゴンでキメラテックフォートレスドラゴンを攻撃、滅びのバーストストーリーム！」

「遂に自爆か！」

「手札からオネストの効果を発動、キメラテックフォートレスドラゴンの攻撃力、6000ポイントブルーアイズの攻撃力をアップさせる。」

ブルーアイズホワイトドラゴン ATK9000

「こ、攻撃力9000、だが俺の場にはスピリットバリアがある。」

「そんなことは百も承知、だがこれで貴様の機皇帝、そしてキメラテックフォートレスドラゴンは葬った。次のターン俺のブルーアイズが貴様にとどめをさす！」

「まさかキメラテックフォートレスドラゴンまでやられるとは・・・。流石海馬瀬戸、とだけ言っていこう。だがこれが機皇帝のすべてとは思わないで貰いたい。機皇帝の中で最強のモンスター、機皇神を見せてやる。」

「機皇神だと!?!」

「俺のターン」 偽海馬のターン

「先ほどの手札増強、感謝しよう。罠カードオープン機皇創世、手札からワイズコア、スカイコア、グランドコアを墓地へ送る、そして現れる機皇神マシニクル！」

「な、なんだこの巨大なモンスターは!?!」

「これこそが絶望の番人機皇神マシニクル、このカードが召喚された今、貴様に勝機はなくなった。」

機皇神マシニクルでブルーアイズホワイトドラゴンを攻撃、ザ・キ
ューブオブデイスペアー！」

「ぐああああ！」

海馬 LP200

「ターン終了、すでに貴様に勝機はない。今ここでサレンダーすれば貴様の命は助かる。さあサレンダーするんだ！」

「断る、俺は貴様らのようなデュエリストを汚すような連中に俺は屈したりなどせん！」

「ならば精々最後まで無駄なあがきをすることだな。」

「貴様に思い知らせてやる。真のデュエリストの力を、選ばれし者の煌めきを！」

「貴様には無理だ。」

「俺の・・・ターン！！！」

続く

絶望の魔人（後書き）

なんか変な終わらせ方ですいません。そういえばもうすぐ5d5が
終わっちゃう！

でも今度のゼアルにも期待します。

究極の竜騎士（前書き）

今回のキーカードは題名の通りです

究極の竜騎士

「俺のターーン」 海馬のターン

「カードを一枚伏せてターン終了」

「俺のターン」 偽海馬のターン

「機皇神マシニクルでダイレクトアタック！」

「罨カードガードブロック発動、戦闘ダメージを無効にしカードを一枚ドロウする。」

「装備魔法団結の力をマシニクルに装備、これで貴様の最後の希望、ブルーアイズアルティメットドラゴンでもマシニクルは倒せない。ターンエンド」

「俺のターン」 海馬のターン

「死者転生発動、手札を一枚捨てて墓地からブルーアイズホワイトドラゴンを手札に加える。そして融合でブルーアイズアルティメットドラゴンを召喚！」

「だが今頃そんなモンスターを出したところで無力！マシニクルの攻撃力は4800！前のターンに召喚しておくべきだったな！」

「魔法カード命削りの宝札、手札が5枚になるようにドロウする。」

「無駄だ！手札を増やしたところでもはや貴様に勝ち目などない！」

「ドロー！・・・フ、来たか！融合回収を発動、墓地から融合とブルーアイズホワイトドラゴンを手札に加える、そして融合を発動、手札の沼地の魔神王と場のブルーアイズアルティメットドラゴンを融合。

現れろ！マスター・オブ・ドラゴンナイト！更に正義の味方カイバーマンを召喚、そしてカイバーマンを生贄にブルーアイズホワイトドラゴンを召喚！」

「馬鹿な！この状況で攻撃力5000と3000のモンスターだと！」

「更にサイクロンでスピリットバリアを破壊！」

「くっ、俺が負けるというのか！」

「マスター・オブ・ドラゴンナイトの攻撃力は場のこのカード以外のドラゴン族一体につき5004ポイントアップする。」

マスター・オブ・ドラゴンナイト ATK5500

「マスター・オブ・ドラゴンナイトで機皇神マシニクルを攻撃、ギヤラクシークラッシュャー！」

「ぐわあああああ！」

偽海馬 LP500

「これで終わりだ！朽ち果てた亡霊め！ブルーアイズホワイトドラゴンの攻撃！」

滅びの、バーバーバーースト、ストリーーーーーム！」

「馬鹿なー！俺が負けるなど！……！」

偽海馬 L P O

「フ、所詮貴様はこの俺の足元にも及ばないというわけだ！」

偽海馬はその場で破壊された。

S I D E 駿

はあ負けちゃった。それにしても前に僕が戦った海馬が偽物だったとは。海馬に勝った、とか言っではしゃいでた自分が馬鹿みたいに思えてきた。

そういえば透は何処へ行ったんだろうか？まあどちらにしろ海馬が偽物に勝ったから僕たちは解放されるんだよね。

S I D E 透

俺が負けるなど、あの男は海馬瀬戸ではなかった。海馬に負けたならばともかく、偽物に負けるって……。

「強くなりたいとは思わないか？」

「誰だ！」

「ふふふ、あの偽物が負けたことには少々計算違いだったがまあいい、ここでお前を新たな手駒とする。」

「な、何をするつもりだ！わあああああ！」

S I D E 謎の男
セブンスターズのボス

鍵を守る者ども！これで最後だと思うなよ。セブンスターズとは名前だけ。セブンスターズという名前とは言え七人いるとは一言も言っていないぞ。

・・・なんだその目は、可哀想な子供を見るような眼で見ろな。

確かにへ理屈ではあるが、勝ちさえすればいいのだ！

フハハハハ！

究極の竜騎士（後書き）

今日の最強カードはマスター・オブ・ドラゴンナイト、攻守共に5000、自信以外の場のドラゴン族モンスター一体につき攻撃力は500ポイントアップする。

偽海馬はロボットと思って貰えばいいです。

想像するならば偽ジャックと同じようなものだと思っていただければ・・・。

今回出てきた謎の男は・・・たぶんわかる人はわかるでしょう。

次回 「何故八人いるのだ!？」 お楽しみに

何故八人いるのだ!?(前書き)

再び更新。

何故八人いるのだ!?

海馬が偽物を倒し僕たちは解放された。でも透の姿は見当たらない。ま、どうせどっか言ったただけだろうから。

翌日 校長に呼ばれた、なんでも校長の部屋に八人目のセブンスターズからの挑戦状きたらしい

「どうやらセブンスターズは新たな刺客を用意してきたようです。皆さんそれに備えて十分に準備をしておいてください。」

まあ、もうあれ以上のが出てくるとは思えないけど、一応透にも話しておこう。

「おい透!」

「なんだ駿、透ならまだ帰ってきてないぜ。」

「なんだ鬼柳か。」

「なんだってなんだ!?! お前は俺では満足できねえというのか!?!」

「うぜえ……。」

「それより透はまだ帰ってねえぞ。」

「そうそう、それどうなってんだよ。」

「知らねえよ！」

「やめだ。これ以上お前と話していてもらちが明かねえ。まだセブンスターズが残っているらしいから。」

「なんだよ！メカ海馬が最後じゃねえのかよ！」

「んなこと言われたって知らねえよ！とにかく今は大人しくして体力を回復しておこう。」

「なんだよ、お前はサボるのか？」

「そうじゃない。今無闇に僕が動いたところでどうにもならない。今は体勢を立て直すほうが先決だ。」

「わかった。じゃあ今はほかの連中が動いてくれるのを待つということだな。」

「まあ大体そんなとこだ。勝手に動いておいてもらうことにした。」

「あ、そう」

翌日

明日香と万条目が負けたらしい。十代が言っていた。あの二人が負けるってことは余程のことだろう。

残ったのは僕と十代だけ。仕方ないから今日動くことにした。

「おい十代、奴はどんなデッキを使ってたんだ？」

「いや、それが何か見たことのないデッキを使うんだよ。」

「見たことのないデッキ？」

「あ、でも何かそいつもシンクロ召喚を使ってたぜ。」

「何！？それは本当か！？」

「ああ本当だ。」

「何かいやな予感がしてきた。」

「いやな予感？」

「何でもない。」

「ふっふっふ、お待ちしておりました。遊城十代、古城駿。」

「お前が万条目達の魂を！？」

「その通り、そして彼らを救い出すためには私にデュエルで勝つしかない。」

「だったら俺とデュエルだ！」

「待て十代、僕とデュエルだ！」

「ならば二人同時にかかってくるがいい。」

「行くぞ！」

「私のライフは8000そしてお前たちはそれぞれ4000ターンの順番は十代、駿、そして私、攻撃は私のターンから可能になる、これで良いな。」

「俺はどんなルールでも構わない！」

「僕たちに先行を譲るなんて僕たちも舐められたものだね。」

「「デュエル」」

「まずは俺のターンだ　　十代のターン

「E・HEROバブルマンを召喚、守備表示。更にバブルマンが召喚されたとき場に他のカードがない場合カードを二枚ドロウする。カードを三枚伏せてターンエンド。頼むぞ、駿！」

「任せろ！僕のターン　　駿のターン

「手札からレベルスティーラーヲを墓地へ送りクイックシンクロンを特殊召喚。更にチューニングサポーターを召喚。（奴のデッキが分からない今、ここは守りを固めるべきだ）LV1チューニングサポーターにLV5クイックシンクロンをチューニング！」

1＋5＝6

「疾風の使者に鋼の願いが集うとき、その願いは鉄壁の盾となる、光さす道となれ！シンクロ召喚現れるジャンクガードナー！」

「いきなりシンクロ召喚、流石だぜ、駿！」

「僕はチューニングサポーターの効果で一枚ドロー。カードを二枚セットしてターンエンド。」

「私のターン。」 最後の敵(仮)のターン

「私はフィールド魔法死皇帝の陵墓を発動、そして私はライフを2000ポイント支払い、

地縛神C c a p a c A p u (コカパクアップ)を召喚」

最後の敵(仮) LP6000

「何だこの巨大なモンスターは!?!」

「地縛神C c a p a c A p u (コカパクアップ)で十代にダイレクトアタック！」

「ダイレクトアタック!?!」

「地縛神は相手の場にモンスターがいても直接攻撃ができる。」

「ジャンクガードナーの効果!一ターンに一度相手の場のモンスターの表示形式を変更する。地縛神を守備表示に変更。」

「よっし!いくら地縛神でも守備表示なら攻撃できない!」

「ちっ、カードを一枚セットしてターンエンド」

「俺のターン」 十代のターン

「融合を発動、手札のオーシャンと、フォレストマンを融合、E・HEROジ・アースを融合召喚！」

ジアースは自分の場のE・HERO名のつくモンスターを生贄にすることでエンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力分攻撃力をアップさせる。バブルマンを生贄に攻撃力を800ポイントアップさせる。駿！お前がくれたカードが役に立ったぜ！」

E・HEROジ・アース ATK3300

「よし！良いぞ十代！」

「ジ・アースで地縛神を攻撃！」

「残念だったな、地縛神は攻撃対象に選択することができない。」

「チッ、ターンエンド。」

駿たちはこの戦いに勝利することができるのか？

何故八人いるのだ！？（後書き）

今回はここまで。

ちなみに今回の敵のデッキは地縛神＋？？？＋？？？です。

今日の最強カードはジャンクガードナー攻撃力1400守備力2600一ターンに一度相手の場のモンスター一体の表示形式を変更する。この効果は相手ターンでも発動できる。

次回 「敵の正体」 お楽しみに

敵の正体（前書き）

V S 謎の敵戦の二回目です。
地縛神の名前はカタカナだけにします。

敵の正体

「何だよ、地縛神って無敵じゃねえか！」

「ビビるな十代！無敵のモンスターなんて存在しない。」

「それもそうだな！」

「行くぞ！僕のターン」 駿のターン

「墓地のレベルスティーラーの効果、僕の場のLV6のジャンクガイドナーのレベルを下げ墓地から特殊召喚！更にレベルスティーラーをリリースしサルベージウォリアーをアドバンス召喚！サルベージウォリアーは召喚時、手札、または墓地からチューナーを一体特殊召喚する。ジャンクシンクロンを特殊召喚する。これで無敵の地縛神を倒してみせる。」

「地縛神は無敵などではありません。地縛神はフィールド魔法が存在しないとき破壊されます。」

「何だと！」

「何故僕たちにそんな情報を？」

「貴方達相手ではこれくらいのハンデはあげないと楽しめませんか。それで、どうするのですか？」

「墓地のレベルスティーラーのモンスター効果、サルベージウォリアーのレベルを下げ特殊召喚。LV4となったサルベージウォ

ーリアーとLV1レベルステイラーにLV3ジャンクシンクロンをチューニング！」

4+1+3=8

「集いし闘志が怒号の魔人を呼び覚ます、光さす道となれ！シンクロ召喚粉碎せよジャンクデストロイヤー！」

「ほう、カードを破壊する効果を持つカードですか……。いいでしょう。破壊したければ破壊するがいい！」

「ジャンクデストロイヤーのモンスター効果、このカードのシンクロ召喚成功時このカードのチューナー以外のシンクロ素材モンスターの数まで場のカードを破壊することができる！僕は死皇帝陵墓と伏せカードを破壊する。タイダルエナジー！」

「よし！やったぜ駿！」

「フッフ、かかりましたね。この瞬間手札の機皇帝ワイゼルの効果を発動。自分の場のモンスターが効果で破壊されたとき手札から特殊召喚することができる。」

「機皇帝だと！それは確か透が使っていたカード！でも少し効果が違う気が…。」

「成程、何がハンデだ。ただの作戦じゃねーか。」

「さあ古城駿！真の絶望を味わうがいい！」

「ジャンクデストロイヤーで機皇帝ワイゼルを攻撃！デストロイナ

ツクル！」

「罨カード攻撃の無力化！」

「ちっ、僕はカードを一枚伏せてターンエンド」

「私のターンドロ」 最後の敵（仮）のターン

「私は機皇帝ワイゼルの効果でジャンクデストロイヤーを吸収！」

「罨発動！スターシフト！この効果でジャンクデストロイヤーをエクストラデッキに戻しエクストラデッキから同じレベルのシンクロモンスターを一体効果が無効化し特殊召喚する！僕はレベル八のシンクロモンスターを特殊召喚する。」

「集いし願いが新たに輝く星となる光さす道となれ！シンクロ召喚飛翔せよ、スターダストドラゴン。」

「貴方も少しは学習するようですね。ならばリミッター解除で攻撃力を倍にしてスターダストドラゴンに攻撃！」

「ジャンクガードナーの効果！機皇帝ワイゼルの表示形式を変更する。」

「手札のエフェクトヴェーラーのモンスター効果、ジャンクガードナーの効果をエンドフェイズまで無効にする。」

「罨カードヒーローバリア、機皇帝の攻撃を無効にする。」

「よしっ！ナイスだ十代！」

「ござかしい真似を……。」

「そしてエンドフェイズにお前の機皇帝は破壊される！」

「フッ、そのくらい構わない……。この瞬間、手札から機皇帝ワイゼルの効果を発動！」

「二枚目だと！」

「当然。このカードを特殊召喚する。」

「俺のターン。」 十代のターン

「フィールド魔法スカイスクレイパー発動。」

「機皇帝ワイゼルの効果を発動、一ターンに一度魔法カードの発動を無効にし、破壊する。」

「何っ！？俺はこのままターンエンドだ。済まない、駿。」

「いや、俺に任せろ！俺のターン。」 駿のターン

「十代の場の伏せカードオープン、融合、場のスターダストドラゴンとジャンクガードナーを融合、波動龍騎士ドラゴエキテスを融合召喚！」

「おお！駿、お前融合も使うのか！」

「波動龍騎士で機皇帝ワイゼルを攻撃！」

「ぐおわあああつ！」

最後の敵（仮） LP3200

「くっ、駿。」

「っ、その声、透なのか!？」

「俺は・・・影・・・ま・・・に・・・操ら・・・。」

「大丈夫か!？透！」

「やれやれ、まだ出てくるだけの精神力がありましたか。」

「おい貴様!透は無事なんだろうな！」

「さあ、何のことやら・・・。まあ、貴方達が私を倒せばわかることでしょう。いい忘れていましたけど、このデュエルでは負けた方の魂は闇に葬られます。」

「何!？ということはもし俺たちが勝ったら透は・・・。」

十代と駿は透を救えるのか？

敵の正体（後書き）

今回はここまで。

謎の敵の正体は透でした。

今日の最強カードはジャンクデストロイヤー、攻撃力2600守備力2500

召喚時素材となったチューナー以外のモンスターの数までカードを破壊することができる。

次回「各時代、究極の力」 お楽しみに

各時代究極の力

「私のターン」 透のターン

「私はフィールド魔法Sinワールドを発動。これで私はドローフェイズにドローする代わりにデッキからランダムにSinと名のつくモンスター一体を手札に加えることができる。私はデッキからブルーアイズホワイトドラゴンをゲームから除外し、Sinブルーアイズホワイトドラゴンを特殊召喚。」

「いきなり攻撃力3000のモンスターだと!？」

「十代、問題はない。あのカードは確かフィールド魔法がないと破壊されるはず……。」

「フッフ、その通り。だがそうはさせない永続魔法、フィールドバリアを発動、これによりお互いにフィールド魔法を発動できず、破壊することもできない。」

「また厄介なカードを。」

「SinブルーアイズホワイトドラゴンでE・HEROジ・アースを攻撃」

十代 LP3500

「カードを二枚伏せてターンエンド」

「俺のターンドロー」 十代のターン

「融合を発動、手札のスパークマンと沼地の魔神王を融合、E・HEROシャイニングフレアウィングマン、シャイニングフレアウィングマンの攻撃力は自分の墓地のE・HERO一体につき300ポイントアップする。今俺の墓地にはオーシャン、フォレストマン、ジ・アース、スパークマンの四体、よって攻撃力は1200ポイントアップ。」

E・HEROシャイニングフレアウィングマン ATK3700

「シャイニングフレアウィングマンでSinブルーアイズホワイトドラゴンを攻撃、シャイニングシュート！」

「罨発動、プライドの咆哮、自分のライフを700ポイント払うことでSinブルーアイズホワイトドラゴンの攻撃力を1000ポイントアップさせる。」

透 LP5500

Sinブルーアイズホワイトドラゴン ATK4000

「シャイニングフレアウィングマン……。だったら罨発動、ヒーローシグナル、この効果でデッキからE・HEROフェザーマンを守備表示で特殊召喚、カードを一枚伏せてターンエンド」

「透、今助け出してやる！俺のターン！」 駿のターン

「波動龍騎士ドラゴエキィテスでSinブルーアイズホワイトドラゴンを攻撃！」

「罨発動、S i n c r o w s t r e a m、この効果で波動龍騎士を破壊！」

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。」

「私のターン。」 透のターン

「私はチューナーモンスターS i n パラレルギアを召喚、L V 8 S i n ブルーアイズホワイトドラゴンにL V 2 S i n パラレルギアをチューニング。」

8 + 2 = 10

「次元の裂け目から現れし闇、時を超えた舞台に破滅の幕を引け！シンクロ召喚 S i n パラドクスドラゴン」

「駿、あれだ奴のシンクロモンスターは！」

「S i n パラドクスドラゴン・・・。」

「S i n パラドクスドラゴンのモンスター効果で駿、お前の墓地のスターダストドラゴンは貰って行く。そしてその攻撃力分お前たちのモンスターの攻撃力は下がる。」

「私はさらにS i n トゥールスドラゴンを捨てることで魔法カードダブルアタックを発動、これでこのターンS i n パラドクスドラゴンは二回攻撃ができる。そしてS i n パラドクスドラゴンで十代にダイレクトアタック！」

「速攻魔法発動クリボーを呼ぶ笛、この効果でデッキからハネクリ

ボーを特殊召喚。」

「ならばS i nパラドクスドラゴンでハネクリボーを攻撃、」

「ハネクリボーが破壊されたターン俺への戦闘ダメージはゼロだ！」

「私はS i nパラドクスドラゴンで二回目の攻撃、対象は駿、お前にダイレクトアタック！」

「罨発動クズ鉄のかかし、この効果でS i nパラドクスドラゴンの攻撃を無効にする。」

「ならばスターダストドラゴンで駿にダイレクトアタックシューティングソニック！」

「ぐわあああああ！……！！！」

「私はこれでターン終了」

各時代究極の力（後書き）

今回はここまで。本当は後書きをもう少し長々と書きたいのですが・
・・。

間もなく遊戯王5D's最終回一時間スペシャル!!

いよいよ5D'sも終わってしまいます・・。

それでは今回はここまで。 さようなら。

祝！遊戯王5D's 最終回（もう大分経ったけど） パート1（前書き）

今回は題名の通り遊戯王5D'sの最終回を記念した番外編です。
こんなのかいてる暇あったら本編書きやがれ！という意見もあると思いますが、僕はこの遊戯王5D'sにはまた特別な思い入れがあるので番外編として書くことにしました。 故に今回は少し長めになります。

パート1という通り、今回は途中までです。

祝！遊戯王5D's 最終回（もう大分経ったけど） パート1

この番外編は作者と小説内のキャラクター（駿、透）の対談形式で進めます。この会話は一部、僕が放送翌日に友人と話した内容も含まれます。尚、まだ遊戯王5D's 最終回をご覧になっていない方はそちらをご覧になられたうえでこちらを見ていただけるとありがたいです。

おそらくユーチューブ等に出ていると思うので是非一度ご覧になって下さい。

それから今回は途中までです。

作者「それでは遊戯王5D's最終回番外編を始めます。」

駿「また何でこのタイミングでそんなことしようと思ったんだよ。」

作者「もしかしたら放送日に見られなかった方、又は地域などの問題もあると思うので、皆が忘れない期間かつ大体の人が見られるくらいの時間を見積もってこのタイミングにした。」

透「成程、ダメ作者にしてはよく考えたほうだな。それじゃあさっそく始めよう。」

作者「まず遊星VSジャックの対戦これは大分前から予想されてきた内容ではあったな。」

駿「まあこの図式は実は遊戯王シリーズ初の図式でな、今まで最終回は両方（デュエルモンスターズ、GX）共にVS武藤遊戯だったからな。」

透「一つとしてはあの時代ではすでに武藤遊戯がない可能性、そしてもう一つとしては遊星とジャック、実は実力的にほぼ互角というところだろう。（もちろん主人公補正を含めれば遊星のほうが強いんだろうけど・・・。）」

作者「いきなり両方のエースがワンターンで出てきたところ、そしてお互いに三ターン後の未来に飛ばされた、これはやはり未来に迷っているメンバーに向けたものでもあったんだな。」

駿「ただエースモンスターの召喚方法に出てきたモンスターが新カードだったということが少し心残りだな。」

透「いや、新カードが出ることに對して否定はしない。問題はそれがOCGかするかどうかだ。」

作者「今回のキーカードクリムゾンブレダーあたりは書籍付録等で出る可能性はあるとして、シンクロンリゾネーターや、チェーンリゾネーターみたいなモンスターは最終回でも山ほど出たし、あれだけのカードをプロモだけでカード化させるのは無理があるんじゃないのか？」

駿「いや、ゼアルのパックに出るんじゃないのか？」

透「いや、それはないだろう。この辺の情報を持っている人は感想欄に書いてくれ！」

作者「そして最終回もやっぱりあの遊星の頭の中の構図（？）が出てきた。そのあとニトロウォーリアーが出てきてエクスプロードウイングドラゴン、そしてターボウォーリーも出てきて大満足！」

透「最終回で遊星の初代シンクロモンスターが全部出てきたのがよかったね。それからエクスプロードウィングドラゴン、あれも出てきたね。これで二人の初代シンクロモンスターもすべてでできたし。」

作者「そのあとさっき話に出たクリムゾンブレダー、あれ今回のキーカードになっていたんだけど……。あのカードの口上言える？ 駿、透。」

透「うーん、俺は無理。」

駿「僕は言えるよ。」

作者「流石僕の作品の主人公」

駿「君の作品の主人公でもあまり嬉しくないんだけどな……。」

作者「そんなことどうでもいいから速く言ってよ!!！」

駿「王者の決断今赤くたぎる炎を宿す真紅の刃となる、熱き波濤をこえ現れろ、シンクロ召喚

炎の鬼神クリムゾンブレダー！ だったはず。」

作者「そのカードはまたうちの作品で駿に使わせる予定だから。」

駿「いつ頃!？」

作者「二年目に入ったら出す予定ではあるよ。」

透「ねえねえ、俺は!？」

作者「お前はセリフ言えなかったからダメ！」

透「ケチ」

作者「話を戻そうか。それでまたあの龍亜の回想シーンがよかったね。」

駿「実際あの時に流れたBGM、あれは久しぶりでね、確かシェリ
ーVSクロウ・アキ戦以来だったな。」

透「あの回想シーンでまだ記憶に新しいアポリア戦も出てきたね。
遊星のはあれだね、一番最初の奴。」

作者「そうそうあれあれ、あの頃の龍亜はGXの最初のころの翔み
たいな奴だったね。」

駿「龍亜にも兄としての自覚ができたようだしね。」

透「そのあとは同じBGMのまま龍可の回想シーン、あれは何だ？
ディマク戦直後のシーンだったね。」

作者「僕はもうこのあたりのシーンから感動してきたね。龍亜も龍
可もほんとに大人になったね。」

駿「確か作者はのちに友達に5D'sみて泣いたって言ったら馬鹿
にされたんでしょ。」

作者「そうなんだよ、あの作品は十分に泣いていいと思うんだけど
ね。」

透「そして遊星のターン。毎度おなじみspエンジェルバトン、このカードはゲームだとかかなりひどい弱体化されてるんだよな。それでそのエンジェルバトンで引いたカードの中にモンスターカードはあったのだが……。そう、クリムゾンブレードのモンスター効果でこのターン遊星は通常召喚ができない。これは大ピンチ！しかし……。」

作者「理解のある方の大半はこの時点で引いたカードが何か分かっただろう。それにしてももう一度言いたい、何故最終回にまでここまで新カードを増やすのか！これがいまだに疑問でしょうがない。」

駿「エンジェルバトンで引いたもう一枚のカードはスクランブルエッグ！？なんじゃこりゃ！」

作者「じゃあここでスクランブルエッグとついでにクリムゾンブレードの効果をまとめてみようか。」

スクランブルエッグ 通常罠

自分のフィールドのモンスターが破壊されたときデッキ、手札、墓地からロードランナーを特殊召喚する。

クリムゾンブレード シンクロモンスター

ATK2800 DEF2600

このカードがシンクロモンスターを破壊した次のターン相手は通常召喚ができない。

駿「スクランブルエッグ、何とも言えない効果だな。便利なのか何なのか・・・。」

透「ここでジャックは遊星に勝利宣言、クリムゾンブレダーでダイレクトアタックするが遊星は墓地のフェイクガードナーを特殊召喚しかし遊星のせせこましい作戦は読めていたらしく、罠カードブレイクスルーでフェイクガードナーを破壊、しかしここで例のスクランブルエッグを発動し、お馴染みロードランナー出現、これでダイレクトアタックはしのいだんだよな。」

作者「そしてバトルフェイズ終了、スターエクスカーションで互いの未来に飛ばされたスターダストドラゴンとレッドデーモンズドラゴンが帰ってきた途端に、ジャックがチェーリゾネーターとダイクリゾネーターでスカーレッドノヴァドラゴンを召喚」

駿「荒ぶる・・・荒ぶるぞ、」

透「俺の魂が。王者と悪魔今ここに交わる荒ぶる魂よ天地創造の叫びをあげよシンクロ召喚いでよスカーレッドノヴァドラゴン！って感じだね。」

作者「よくわからん。でも言いたいことは大体分かる。そしてここでいったんCM」

駿「そしてCMが明ける。」

作者「ここでいきなりでかい時計が映る。いや、はっきり言って何が何だかさっぱりわからなかった。けどそのあとの龍可が出てきたシーンでやっとわかった。これ、未来だ、って感じだった。」

透「ということはデュエルの展開はGXと同じか？って一瞬思ったんだよね。」

作者「クロウはチーム戦で世界チャンピオンにまでなったらしい。」

駿「そんなもってジャックはキングになったんだね。アキは医者になつたらしい・・・あれ、遊星は？と思っていたらデュエルが始まった。このタイミングで遠藤さんのClear Mind、まさかの展開だよね。確かもう何か月も使われてなかったんじゃないかな。」

透「そんな中遊星のターンになり、マッハシンクロンを召喚し、ロードランナーとシンクロ、フォーミュラシンクロンを召喚し、アクセルシンクロ、遂にWRGP編の頃から誰もが望んだ図式ができたわけだ。」

作者「シューティングスタードラゴンの効果でやっぱり三枚チューナーを引いたわけで、というかさあ、あの人三枚か五枚しかチューナー引いたことなかったんじゃない？」

駿「そういえばそんな気がしなくもないな。まあその結果クリムゾンブレーダーを破壊。」

透「その前にラリーたちを忘れちゃだめだろう。」

作者「そういえばこのタイミングでラリーが出てきたな。」

駿「ところでこれ以上この会話をする時間あるのか？」

作者「実はあまりない。ということで今回はここまでこの続きは二

「日後以内に必ず更新するから。」

透「このダメ作者が！」

作者「ごめんなさい」

祝！遊戯王5D's 最終回（もう大分経ったけど） パート1（後書き）

そういうわけで今回はここまで。

今回の最強カードは・・・スターダストドラゴン、言わずと知れた遊星のエースモンスター。

祝！遊戯王5ds最終回 パート2（前書き）

意外と早めの更新です。

祝！遊戯王5ds最終回 パート2

作者「前回に引き続き今回も番外編だ。」

駿「確か前はラリーが出て来た！って所だったよな。」

透「じゃあ今回はその続きからだ。丁度シューティングスタードラゴンが出てCMが開けた所から順を追って話を続けよう。」

作者「丁度このタイミングで虹の橋ビフレストの時のBGMが流れたんだよね。誰かこのBGMの名前を知っている人は教えてください。そういえばこの曲はバランスシューターの辺りからだいぶ使われるようになったよね。」

駿「何故か知らないがだいぶ聞くようになった。」

透「そして遊星がシューティングスタードラゴンでクリムゾンブレーダーを倒し、遊星のターンは終わる。そこでジャックのターンはスカーレットコクーン、これもまた新カード・・・新カード多くね？」

作者「だからそれについては前回既に散々話し合った筈だ！」

駿「こんな話ばかりしていても時間の無駄だから、早く話を続けよう。ここで遊星のテーマが流れた訳だ。」

作者「そうだな、スカーレットコクーンの効果でシューティングスタードラゴンは除外出来なくなってしまった。だがスカーレットノヴァドラゴンの攻撃宣言時に罠カードハイアンドローを発動。」

何なんだ、このカード？」

駿「デッキからカードを墓地へ送り、そのカードがモンスターカードだった場合、対象モンスターの攻撃力をそのモンスターの攻撃力分アップさせる。この効果は三回まで繰り返す事ができ、そのモンスターの攻撃力が相手モンスターより大きくなってしまった場合そのモンスターを破壊する。だった筈」

作者「で、その効果でソニックウォーリアー、懐かしのスピードウォーリアー、ボルトヘッジホッグをデッキから墓地へ送ってシューティングスタードラゴンの攻撃力をスカーレットノヴァドラゴンと同じにした。両者破壊されたが、ジャックはスカーレットコクーンの効果でレッドデーモンズドラゴンを特殊召喚。」

透「遊星は罠カードクラッシュスタターの効果でロードランナーと、ソニックウォーリアーを特殊召喚。」

作者「そしてここで明日への道（going my way）だったかな、これが流れたんだよね。その後遊星のターンにジャンクシンクロンを召喚し、墓地からスピードウォーリアーを特殊召喚。

更にボルトヘッジホッグを自身の効果で特殊召喚。これで懐かしの布陣が出来たな。」

透「ここからのクロウ達のセリフがまたいいんだよな。」

作者「そう、ぼくはもうこの辺りで号泣状態だね。本当にこの遊戯王5dsというアニメは素晴らしいものだったと改めて思う。そしてここで遊星は視聴者からしてみればある意味当然、しかし意外な展開が待っていた訳だ。」

駿「ここで遊星の初代切り札ジャンクウォーリアーが登場。対戦していたジャックも驚き。」

透「ここでジャンクウォーリアーだと!？」

駿「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれシンクロ召喚出でよジャンクウォーリアー」

作者「実際にジャンクウォーリアーには僕の作品の駿もよく使ってるよな。」

駿「そう、実は僕もこのカードは特に愛しているカードの一つだね。」

透「ジャンクウォーリアーが登場したタイミングで丁度曲がサビに入ったんだよな。」

作者「そうそう、本当にこの部分を作った人はタイミングを取るのが上手い!この後ジャンクウォーリアーでレッドデーモンズドラゴンを攻撃、恐らく最初のオープニングと重ねて見た人も少なく無いのではないだろうか?」

駿「実際に作者は重ねて見てただろ。」

透「俺もあれを重ねて見てた。」

作者「デュエルは終わり遊星の勝利だった。この後みんなが遊星達の元に来た、このシーン実は色々ツツコミ所満載何だが敢えて此处では言わないでおこう。」

駿「ここで全員、決意が固まり、CMに入る。」

作者「今回も此処まで、理由は親に早く寝ろと言われたからだ」

透「そりゃ言われるわ」

作者「それでは皆さんおやすみなさい」

祝！遊戯王5ds最終回 パート2（後書き）

今回も途中でできります。今回の最強カードはジャンクウォリアー
第一話で遊星が初めて使用したシンクロモンスター

祝!!!! 遊戯王5D、S最終回 パート3 (前書き)

今回が番外編の最後です。これまで三回に分けて長々とやってきてしまった番外編。ラストにはちよつとしたお知らせもあります。

祝!!!! 遊戯王5D、s最終回 パート3

作者「確か前は丁度遊星VSジャックのデュエルが終わり残り10分弱辺りのところだったな。」

駿「残り時間はどうでもいいとして、デュエルが終了し、遊星達の下に集まるクロウ、アキ、龍亜龍可達はお互いの決意を語り、そして各々の絆を確認した。」

透「丁度ここからCMだったんだよな。そしてCMが明けて龍亜達の家に場所が移った、まあここにいたのは龍亜と龍可だけだが……。」

作者「龍亜に対し、遊星達に会ってから成長したねと言う龍可、まあ実際ここ最近の龍亜はかなり好感が持てた。アポリアとデュエルをした時の龍亜、あれには感動さえ覚えた。」

駿「感動が好きな作者だな……。最初龍可は龍亜にあきれたばかりだったって感じだったしね。」

透「この最終回では頼りにしてるわよお兄ちゃんって言うてるし、今では龍可にとって龍亜は一番頼りになる存在だろうね。」

駿「遊戯王全シリーズそうなんだけど（もしかしたら遊戯王に限った話ではないのかもしれないが……。）主人公以外のキャラクターで主人公よりもある意味では成長しているキャラクターがいるという点だよね。（デュエルモンスターズは少し違うが……。）」

作者「そして双子サイドからアキサイドに変わった、どうでもいい

けどアキのお父さんって英雄と書いてひでおって読むんだよね。」

駿「えいゆう……この名前遊星が使ったほうが良かったかも……。って今はそんな話よりもちゃんと話すことがあるだろ!？」

透「アキのお父さんは「お前のことだ頑張りすぎて倒れないかどうか心配だ」って言うてるし、

お母さんは「遊星君の笑顔をその目に焼き付けて来なさい、それが遠く離れた場所であなただけを勇気づけてくれるはずだから。」って言うてるからもう十六夜家にとって遊星はとてつもなく大きな存在になってるだろうね。」

作者「次はクロウサイド、マーサはクロウに行っておいでみたいな感じで元気づけていて、その後出てきたクロウ曰くガキ共は強がって「クロウの実力で通用すんのかな?」とか「はやく行っちゃいだよ、そのほうが俺たちもせいせいするから。」って言うてるけどやっぱり彼らもずっといつもそばにいてくれた「クロウ兄ちゃん」がいなくなってしまうのは寂しいんだろう、最後のほうは泣きながら言ってたね。こういうものを見てると心が温まるよね。」

駿「そうだね、サテライトの子供たちにとってクロウはヒーローの様な存在だったからね。子供好きのクロウからしてみるとやっぱり辛いんだろうね。」

透「クロウも相当思い悩んだと思うよ、でもジャックと遊星のデューエルを見てその決意ができたんだよ。」

作者「そしてジャックサイド、ここでもまたブルーアイズマウンテンの店でブルーアイズマウンテンらしきコーヒーを飲んでいたところに深影さん登場、そこにあったのはたくさんのお品、あれ?」

駿「このシーンが唯一(?)のギャグシーン、ジャックがコーヒーを吹いてる。それもそのはず、その物品の中にはカーリーが袋に入った状態でいたから。」

透「「だってこうしていれば私もジャックの下にいけるじゃない!」ってカーリー……。でもそこは「キングになるためには女など不要だ!」と男らしく断るジャック。「今度この町に来るのは世界のトップになった時だ! 達者でな!」やっぱりこういふときだけ男らしい元キング……。」

そこに取り残されたジャックファンクラブ(?)の面々、このシーンでさりげなくカーリーを殴っている深影さん……。」

作者「最後は遊星サイド。ここでは遊星の数少ないはっちゃけシーンがある。暗くなったチーム5D・Sのガレージ(?)、に一人後ろを向いて「電気はつけないで」というアキ。」

駿「ここからだんだん雰囲気が悪くなるんだよね。ここでアキはあと一步のところまで行くんだけどね……。まあここは六時のアニメの限界だよ。そのあとが例のあれだな……。」

透「「はじめ遊星に会った時は何か怖い人だなんて思ってた。」

「はっはっは! 俺もだよ、アキに睨まれると怖いからな、チーム戦で負けて帰ったら何されるかってびくびくしてたよ。」って珍しい遊星の冗談+大笑いシーン。最終回でやってくれたよ。

「アキ、笑顔を忘れるな、お前の笑顔はこの世で一番だ。」と普通の人なら勘違いしそうなセリフを言い、それにアキは「その笑顔をくれたのは遊星、あなたよ。」と答える。」

作者「不審者発見これより職務質問を開始する。」と突如現れる牛尾さん。やっぱ最終回にも出てきた。牛尾と最後の会話を済ませる。」

駿「またこの場面で遊星がキザなことを言う」

透「でもそれがキザに聞こえないのは不動遊星の人柄というところかな。遊星が危ないことをするんだよな。でもこれも遊星がやると「なんとかと煙」には見えない、むしろかつこよく見える。」

作者「そしてエンディング「これがおれたちのラストランだ!」と言い、曲をバックにそれぞれの最後のセリフを言う。」
ジャック「俺は必ず真の王者となって帰ってくるぞ!」

クロウ「見てろよガキ共、俺の活躍を!」

龍亜「ありがとうネオドミノシティ!」

龍可「私たちの故郷!」

アキ「さよならは言わないまた会える日まで」

駿「そこに赤き龍が現れる。そしてシグナーのあざはすべて消えた。」

透「赤き龍もすべて役目を終えたんだろう。」

作者「そして遊星は手を挙げ、仲間たちがそこにハイタッチをしていく。これで全員進むべき道へ行った。ジャックはシングルのプロ

リーグへ、クロウはチーム戦のプロリーグへ、アキは医科大学へ、龍可と龍亜は親の元へ、そして遊星は町で待つ。このアニメは遊星の最後のセリフで終わる」

「ここから先は俺たちが作り出す未来！走り続けようぜみんな！人生という名のライディングデュエルを！ライディングデュエル！アクセラレーション！」

祝！！！遊戯王5D、S最終回 パート3（後書き）

番外編は今回で終わりです。また当分本編を書いていきたいと思ひます。

もしも遊戯王5D、Sの最終回を見た方の中にこの番外編を見て折角の遊戯王5D、Sの最終回のイメージが崩れた！という方にはお詫びすることしかできません。

この番外編を読んで遊戯王5D、Sの良さが伝われば良いと思ひます。

尚、今回の様な番外編はもしかしたらまた遊戯王で初回以外に記念的なことがあればやるかもしれません。

お知らせ ぼくは現在新しい遊戯王小説を書くかと考えているところでは。もしかしたら近いうちに遊戯王5D、Sの小説を書くかもしれません。がその時はまた是非そちらのほうも読んでいただけると良いなと思ひます。

それではまた次回 ライディングデュエル アクセラレーショ
ン！！

十代の新切り札（前書き）

今回から本編に戻ります。

実はここでお知らせ。僕は5D'sの作品を始めました。

題名は「遊戯王5D'sサイバー流を継ぎし者」です。更新は勿論此方を優先しますが、当然のことながらあちらも更新しますのでお願いします。

次回更新の目安は後書きに書きます。

（例）次回更新はあちらを0話書いたら更新します。

これは引き続き此方を優先して次話を更新するという意味です。

何話更新したらという部分を見ていただきたいです。

勿論たとえそこに1話と書いてあって1話更新したかろと言ってすぐに此方が更新できるわけではありません。

しかしなるべく早く更新できるように努めてまいりますので今後ともよろしくお願いします。

十代の新切り札

場の確認

十代 伏せ2 LP3500

駿 伏せ2 LP1500

闇透 Sin パラドクスドラゴン 伏せ1 LP5500
スターダストドラゴン

「俺のターン」 十代のターン

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」 駿のターン

「（よし、もしかしたらいけるかもしれない！でももし俺達が勝てば透は・・・。）

ターンエンド」

「私のターン」 闇透のターン

「私はエクストラデッキからサイバーエンドドラゴンを除外し、Sinサイバーエンドドラゴンを特殊召喚！更にサイクロンで駿の場のクズ鉄のかかしを破壊！」

「なんでそうポンポンと4000が出てくんだよ!？」

「私はSinパラドクスドラゴンで十代にダイレクトアタック!」

「罠カードガードブロック、戦闘ダメージを0にし、カードを一枚ドロ―する。」

「ならばSinサイバーエンドドラゴンで十代にダイレクトアタック!」

「永続罠、リビングデッドの呼び声、墓地からジャンクガードナーを特殊召喚!

ジャンクガードナーの効果、Sinサイバーエンドドラゴンを守備表示に変更!」

「助かったぜ! 駿!」

「しっかりしてくれ!」

「私はスターダストドラゴンで十代にダイレクトアタック!」

「ぐわああああああ!」

十代 LP1000

「私はこれでターンエンド」

「くっ、俺のターン」 十代のターン

「俺はこのカードに賭ける! ホープオブフィフス、墓地からバブル

マン、スパークマン、オーシャン、
フォレストマン、シャイニングフレアウィングマンをデッキに戻し
カードを二枚ドロ―！」

「今更無駄なあがきを・・・。」

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド（後はあのカードさえ来れば
もしかしたら・・・）」

「俺のターン」 駿のターン

「俺はこれに賭ける！魔法カードエクステンジ！俺と十代で、手
札を一枚交換する。」

「十代、どれがいい？」

「じゃあ、俺はこれね。」

「じゃあ俺はこのカードだ。」

「俺はレスキューウォリアーを召喚！レスキューウォリアーで
スターダストドラゴンを攻撃！」

「ついに自爆か！？」

「レスキューウォリアーは戦闘ダメージを0にする。そしてレス
キューウォリアーが破壊されたとき相手の場の俺のモンスター一
体のコントロールを取り戻す！」

俺のもとに舞い戻れ！スターダストドラゴン！カードを一枚伏せて
ターンエンド」

「私のターン」

闇透のターン

「デッキからレインボードラゴンを除外しSinレインボードラゴンを特殊召喚！更にSinサイバーエンドドラゴンを攻撃表示に変更し、Sinサイバーエンドドラゴンで十代にダイレクトアタック！」

「ジャンクガードナーでSinサイバーエンドドラゴンの表示形式を変更させる。」

「無駄なことを……。Sinレインボードドラゴンでジャンクガードナーを攻撃！」

「だが、破壊されたジャンクガードナーの効果でSinパラドクスドラゴンの表示形式を変更！」

「墓地からADチェンジャーの効果発動、このカードを除外し、Sinパラドクスドラゴンを攻撃表示に変更。Sinパラドクスドラゴンで駿にダイレクトアタック。」

「罨カードヒーロー見参！さあ、俺の手札から一枚選べ！」

「私は一番左のカードを選択！」

「お前が選んだのはこれだ！チューナーモンスターターボシンクロン」

「ならばSinパラドクスドラゴンでターボシンクロンを攻撃！」

「罨カードチューナーズバリア、次のターンまでターボシンクロンは破壊されない！」

「ターンエンド」

「俺のターン！」 十代のターン

「これが俺の新たな切り札！チューナーモンスターデブリドラゴンを召喚！」

「チ・・チューナーモンスターだと！？」

「デブリドラゴンの効果、墓地から沼地の魔神王を特殊召喚！LV3沼地の魔神王にLV4デブリドラゴンをチューニング！」

3＋4＝7

「聖なる結界より放たれし龍、今ここに真の力を解放せよ！シンクロ召喚現れろ！氷結界の龍グングニール！」

「シンクロ召喚だと！？」

「グングニールの効果、手札を二枚捨ててSinパラドクスドラゴンと伏せカードを破壊する！」

「何！？（ミラーフォースが・・・。）だがSinパラドクスドラゴンが破壊されたことによりライフを半分にし、墓地のSinトルースドラゴンを特殊召喚！」

闇透 LP2550

「カードを一枚伏せてターンエンド!」

「十代、後は俺に任せろ!」

「し・・駿・・。」

「透なのか!?!」

「ああ。早く終わらせてくれ。影丸は原作よりも酷いことをしようとしている・・。」

「何!?!」

「影丸は・・、I2社から新たなカードを盗み出した・・。」

「新たなカードだと!?!」

「星界の・・三極神だ・・。」

「三極神だと!?!」

「くっ・・駿、この・・ターンで終わらせない・・と、三極神が蘇る。」

「どういうことだ!?!」

「三幻魔と同じく三極神もデュエリストの闘気によって復活す・・。」

「だがもしおまえを倒せば透は・・・。」

「気にするな！速く、するんだ！！」

「くっ。」

「ふ、まだ私に逆らう気力がありましたか。もうすでにこの者の精神は消えかけています。」

十代の新切り札（後書き）

今回はここまで！

今日の最強カードはSinトゥルースドラゴン、攻守共に5000で場のSinが破壊されたとき、ライフを半分にし特殊召喚できる、映画で遊戯達を苦しめたモンスター。元々の攻撃力ではF・G・Dやマスター・オブ・ドラゴンナイトと同じ5000でデュエルモンスターズの中でも最高だ！

次回「透を救え！運命のラストターン！」僕につける題名はどうしても原作のパロディーになってしまう・・。因みに何のパロディーかわかった人は感想に書いてください！

次回の更新はあちらを0話更新したら此方を更新します。

透を救え！運命のラストターン（前書き）

久しぶりのGX。試験があったりいろいろあって更新しませんでしたがこれからも更新は続けます。

それではこれからもよろしくお願いします。

透を救え！運命のラストターン

「俺のターン」 駿のターン

（このままのんびりしてはもうじき透の魂が滅んでしまう！勝負はこのターン！！）

「俺はチューニングサポーターを召喚！

L V 1のチューニングサポーターにL V 1のターボシンクロンをチューニング！」

1＋1＝2

「集いし願いが新たな速度の地平へいざなう光さす道となれ！

シンクロ召喚！希望の力 フォーミュラシンクロン！

チューニングサポーターとフォーミュラシンクロンの効果でカードを二枚ドロ―」

「クリアマインド！L V 8のスターダストドラゴンにL V 2のフォーミュラシンクロンをチューニング！

集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く光さす道となれ！

アクセルシンクロ！生来せよシューティングスタードラゴン！」

「シューティングスタードラゴンの効果発動。一ターンに一度デッキの上からカードを五枚確認し、その中のチューナーの数だけ攻撃ができる！」

「馬鹿な！？貴様のデッキにはもうチューナーはほとんど残っていないはず！？」

「ああ、デッキのチューナーはあと二枚だ。そしてチューナーを二枚引けば勝てる！」

一枚目ボルトヘツヂホッグ、二枚目カードガンナー、三枚目クズ鉄のかかし、四枚目・・よしチューナーモンスターデブリドラゴンそして五枚目！チューナーモンスターブライシンクロン！」

「この状況でさらにそんな奇跡を！？」

「行けシューティングスタードラゴン！」

スターダストミラージュ！！！！」

「ぐわあああああ！！！！」

闇透 L P O

「大丈夫か透！？」

「ああ、闇のデュエルの罰は俺を操っていた奴が受けたようだ。あいつは消えた。」

「それより一体何があったんだ！？」

「偽海馬に負けた後、俺は闇の中で影丸理事長に変なものを入れられて気付いたらあの状態だ。」

「そうか・・。」

「それよりのんびりしている暇はない！もうじき扉が開く！！」

「どういうことだ！？俺たちが勝てば封印が解かれることはないんじゃないのか！？」

「落ちつけ十代、そんなものもともと存在しない。扉はデュエリスト達の力によって開かれる。」

つまり鍵を持つ俺たちとセブンスターズのデュエルによってその条件が満たされてしまった。」

「俺たちはだまされてたってことなのか！？」

「そういうことになる。」

「わかっているのなら話は早いな！」

「誰だ！？」

「私はこの学園の理事長影丸だ。さっき三幻魔は回収してきたよ。」

「手遅れだったか。」

「こうなってしまった以上デュエルで封印しなおすしか方法はない。」

「デュエルならこの俺一、十、百、千、万条目サンダーが相手になるろう！」

「いやオベリスクブルーのカイザー丸藤亮が相手になろう！」

「そのデュエルはチームサティスファクション元リーダー鬼柳京介が相手になろう！」

「「「あんた誰？」」」

「鬼柳京介、わけあって今度からオシリスレッドの担任になるかもしれない。」

「そうか。デュエルなら・・・。」

「その必要はない。相手はすでに決まっている。未知の力シンクロ召喚を使いこなすデュエリスト、古城駿と矢吹透だ！二人まとめて相手になってやる。」

「良いだろう。」

「ルールは簡単わたしはLP8000からお前たちはそれぞれ4000ずつ。」

「先行は私がもらう。」

「良いだろう。行くぞ！透！」

「言われるまでもない！」

「「「デュエル」」」

透を救え！運命のラストターン（後書き）

今回はここまで。

何か悪い意味で急展開の気が・・・。

まあそんなわけで次回「封印されたアクセルシンクロ」お楽しみに
！

封印されたアクセルシンクロ（前書き）

今回は少し題名を裏切っているかもしれませんが。
それから透のデッキが久しぶりのディフォーマー。
それでは今回もよろしくお願いします。

封印されたアクセルシンクロ

「私のターン」 影丸のターン

「私は罨カードを三枚セット！」

「あいつ馬鹿か！？伏せるカードの種類を言う必要はないのに。」

「落ちつけサンダー、もしそれこそが幻魔の召喚条件だとしたら・・・。」

「流石は古城駿察がいい。そう、これこそが幻魔の召喚条件。三枚の罨カードを墓地に送り、いでよ！神炎皇ウリア！」

「神炎皇ウリアの攻撃力は墓地の罨カード一枚につき10000アツプする。」

神炎皇ウリア ATK3000

「いきなり攻撃力3000だと！？」

「私はこれでターンエンド。」

「俺のターン。」 透のターン

「D・モバフォンを召喚。モバフォンの効果でサイコロを振り、出た目の数だけデッキの上からカードを確認。」

出た目は3。カードを三枚確認。よし、D・スコープン。

更にスコープンの効果でラジオンを特殊召喚。

LV4のラジオンにLV3のスコープンをチューニング」

4＋3＝7

「世界の平和を守るため、勇気と力がドッキング！

シンクロ召喚、愛と正義の使者パワーツールドラゴン！」

「一ターン目からシンクロ召喚か・・・。」

「パワーツールドラゴンの効果でデッキからランダムに装備魔法を手札に加える。」

手札に加えるのはダブルツール団結の力。
団結の力をパワーツールドラゴンに装備。」

パワーツールドラゴン ATK3100

「パワーツールドラゴンで神炎皇ウリアを攻撃！
クラフティブレイク！！」

「ぬぐう！！」

影丸 LP7900

「よし、幻魔を一体倒したぞ！！」

「さっすが透だぜ！」

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「私のターン。」 影丸のターン

注意 今回のデュエルは前回とは違い影丸↓透↓影丸↓駿の順番です。

ただし駿と透のライフは4000ずつ。

もし片方のライフが0になった時(例、駿LP0 透LP200 影丸LP2300)などとなった場合は

透↓影丸↓透となります。

「私は手札から罠カードを墓地へ送り、神炎皇ウリアを特殊召喚。」

「折角倒した幻魔が復活しちゃった!」

「しかも墓地に罠が増えたことにより更に1000ポイントアップ!?!」

神炎皇ウリア ATK4000

「神炎皇ウリアの効果で伏せカードを破壊、ハイパーデストラクシヨン!」

「神炎皇ウリアでパワーツールドラゴンを攻撃!」

「だがパワーツールドラゴンは装備カードを墓地に送ることで破壊をまぬがれる!」

「私はこれでターンエンド!」

「俺のターン」 駿のターン

「一気に決めにいくぞ!」

「それより何だこの感覚は幻魔が現れてから力が抜けるような感覚が……。」

「体が凄くだるい……。」

「……ワンフォーワンを発動。カードガンナーを墓地に送り、ターボシンクロンを特殊召喚！」

L V 1のモバフォンにL V 1のターボシンクロンをチューニング！」

1＋1＝2

「集いし願いが新たな速度の地平へいざなう光さす道となれ！シンクロ召喚 希望の力フォーミュラシンクロン！」

「更にフォーミュラシンクロンの効果で一枚をドロー。

デブリドラゴンを召喚、墓地からカードガンナーを特殊召喚。ワンショットブースターを特殊召喚！

L V 1のワンショットブースターとL V 3のカードガンナーにL V 4のデブリドラゴンをチューニング！」

1＋3＋4＋＝8

「集いし願いが新たに輝く星となる光さす道となれ！シンクロ召喚 飛翔せよスターダストドラゴン！」

「L V 8シンクロモンスタースターダストドラゴンにL V 2シンクロチューナーフォーミュラシンクロンをチューニング！」

2＋8＝10

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く光さす道となれ！
アクセルシンク・・・馬鹿な！？」

「おい、どうしたんだ！？」

「何故シューティングスタードラゴンが召喚されないんだ！？」

「まさか駿、クリアマインドにたどり着けなかったのか！？」

ここからしばらく台本形式になります。

十代「クリアマインド？何だそれ？」

鬼柳「アクセルシンクロというシンクロモンスター同士をシンクロさせるあの離れ業には欠かせねえものだ。

あれを成功させるには石板のカードを使用可能状態にしないてはならない。」

十代「成程、だが鬼柳どうしてお前がそんなことを知っている？」

鬼柳「俺の親友にアクセルシンクロを使える奴がいたからな。そいつから聞いたことがある。」

亮「アクセルシンクロを使えるのは駿だけではなかったということか・・・。」

万丈目「だが何故今回に限ってアクセルシンクロが・・・。」

透「どうやらさっきのデュエルの疲労に加え、幻魔からエネルギー

を吸い取られたことで
集中力を欠いていたということかもしれない。」

駿「こんなところにも幻魔の力が……。」

台本形式はここまでです。

「さあどうした、ターンを終了するのか？」

「カードを二枚伏せてターンエンドだ。」

「私のターン。」 影丸のターン

「呆気ないものだな！幻魔一体でアクセルシンクロが使えなくなる
とは！

私はフィールド魔法失楽園を発動！

失楽園の効果、幻魔が場にいるときカードを二枚手札に加える。」

「これはまずい！来るぞ！！！」

「相変わらず察しがいいな。

私は魔法カードを三枚セット！

三枚の魔法カードを墓地に送り現れる二体目の幻魔！降雷皇ハモン
！」

「神炎皇ウリアの効果で伏せカードを破壊！」

「そして神炎皇ウリアでスターダストドラゴンを攻撃！」

「罨発動、シンクロアウト！スターダストドラゴンをエクストラデ

ツキに戻し、墓地からデブリドラゴン、カードガンナー、ワンシヨットブースターを特殊召喚！」

「ならばパワーツールドラゴンを攻撃！」

透LP2300

「降雷皇ハモンでカードガンナーを攻撃！」

「カードガンナーが破壊されたときカードを一枚ドロースる！」

「ハモンの効果で1000ポイントのダメージを与える！」

駿LP3000

「ターンエンド」

「俺のターン」 透のターン

「死者蘇生を発動墓地からパワーツールドラゴンを特殊召喚！
更にパワーツールドラゴンの効果でランダムに一枚装備魔法を加える！」

巨大化を手札に加える。そして巨大化を発動。パワーツールドラゴンに装備！」

パワーツールドラゴン ATK4600

「更に装備魔法閃光の双剣一トリスを発動手札を一枚墓地に送り
パワーツールドラゴンに装備！」

パワーツールドラゴン ATK4100

「パワーツールドラゴンで神炎皇ウリアに攻撃！」

影丸 LP7800

「パワーツールドラゴンで降雷皇ハモンを攻撃！」

影丸 LP7700

「ターンエンド」

封印されたアクセルシンクロ（後書き）

今回はここまで。

今日の最強カードは神炎皇ウリア 墓地の罾カードの数で攻撃力が決まる。そして何度でも蘇る！

連日更新！この調子で頑張るぞ！

そういえば今回一部台本形式を取り入れました。

これはこの作品で完全に空気になっていく万丈目達にセリフを与えるためでもあるんですけどいかがでしょうか？

感想待ってます！

それと鬼柳の言っていた親友ってのは一応言っておくと遊星です。

今回はちょっと題名を裏切ってしまったかも・・・。

何か題名だけみるとカード効果で封じられたように感じる・・・。

次回 「不死身の三幻魔。叫べセイヴァースタードラゴン！」 お楽しみに！

不死身の三幻魔。叫べセイヴァースタードラゴン！（前書き）

本日二度目の更新。

題名がもろにネタばれになっている・・・。
しかしこれ以外は思いつきませんでした！
それでは今回もよろしく願いします。

不死身の三幻魔。叫べセイヴァースタードラゴン！

「私のターン」 影丸のターン

「私は幻銃士を召喚。幻銃士の効果で銃士トークンを二体特殊召喚！そして幻銃士と銃士トークン二体を生贄に現れろ！幻魔皇ラビエル！更に罠カードを墓地へ送り神炎皇ウリアを特殊召喚。デュアルサモンを発動。」

神炎皇ウリアを生贄に暗黒の召喚神を召喚。

そして暗黒の召喚神の効果でこのカードを生贄に降雷皇ハモンを特殊召喚。

更に手札から罠カードを墓地へ送り神炎皇ウリアを特殊召喚。」

神炎皇ウリア ATK6000

「遂に三体の幻魔が揃ってしまった。」

「失楽園の効果で二枚をドロー。強欲な壺を発動。新たに二枚ドロー！

サイクロンで巨大化を破壊。」

パワーツールドラゴン ATK1800

「降雷皇ハモンでパワーツールドラゴンを攻撃！」

「手札からクリボーの効果で戦闘ダメージを無効化！閃光の双剣トリスを墓地に送り破壊を無効にする。」

パワーツールドラゴン ATK2300

「幻魔皇ラビエルでパワーツールドラゴンに攻撃！」

透 LP600

「ターンエンド」

「（アクセルシンクロが使えない今、一番幻魔に拮抗できるのは恐らくあのカード。

あれをここで引くしかない！）」

俺のターン！」 駿のターン

（来た！）

「俺は天使の施しを発動。三枚ドロし二枚を捨てる。

俺はデブリドラゴンをリリースしサルベージウォーリアーをアドバンス召喚！

サルベージウォーリアーの効果で救世竜セイヴァードラゴンを召喚！」

「私はこの瞬間幻魔皇ラビエルの効果で幻魔トークンを特殊召喚する。」

「墓地からグローアップバルブの効果を発動デッキの一番上を墓地に送り墓地から特殊召喚。

手札からドッペルウォーリアーを特殊召喚。

L V 2のドッペルウォーリアーとL V 5のサルベージウォーリアーにL V 1のグローアップバルブをチューニング！」

2+5+1=8

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚。飛翔せよスターダストドラゴン！」

「だが、アクセルシンクロの使えない今の貴様にスターダストは使えない！」

「いや、スターダストの進化の先はシューティングスターだけではない。」

俺はLV8のスターダストドラゴンとLV1のワンショットブースターにLV1のセイヴァードラゴンをチューニング！」

8+1+1=10

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！シンクロ召喚！」

光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！」

「まだこんなカードを持っていたとは……。だがそんなカードでは幻魔を倒すことはできない！」

「俺はセイヴァースタードラゴンの効果を発動！神炎皇ウリアの効果を無効！」

サプリーメイションドレイン！」

神炎皇ウリア ATK0

「セイヴァースタードラゴンで神炎皇ウリアを攻撃！シューティングブラスターソニック！」

「ぐわあああああつ！」

影丸 LP3900

「カードを二枚伏せてターンエンドだ。エンドフェイズ、セイヴァー・スタードラゴンはエクストラデッキに戻りスターダストドラゴンを特殊召喚！」

「私のターン。フハハハ力が漲ってくるぞ！！

これでわしもまた若返ったのだ！

もうこんなものは必要ない。」

そう言って影丸は何か機械から出てきて、放り投げた。

「バカな、影丸理事長は100を優に超えるご高齢の筈。」

「じゃあ、あれは理事長の息子？」

「どちらにせよとんでもないことが起きているのは事実だ。」

「私は罨カードを墓地へ送り神炎皇ウリアを特殊召喚。」

神炎皇ウリア ATK7000

「神炎皇ウリアの効果で伏せカードを破壊！」

破壊されたカード リミッターブレイク

「リミッターブレイクが破壊されたときデッキからスピードウォリアーを特殊召喚！」

「失樂園の効果で二枚をドロ―。」

幻魔皇ラビエルでスターダストドラゴンを攻撃！

そして降雷皇ハモンでスピードウォリアーを攻撃！

ハモンの効果で1000ポイントのダメージを受けろ！」

駿 LP2000

「私はカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

「俺のターン。」 透のターン

「俺は強欲な壺を発動。カードを二枚ドロ―する。」

「俺は罨カードロストスターディセントを発動、頼むぞ！透！」

「ああ、墓地からパワーツールドラゴンを特殊召喚。

LV6となったパワーツールドラゴンにLV2のフォーミュラシンクロンをチューニング！」

6+2=8

「世界の未来を守るため勇気と力がレヴオリュション！

シンクロ召喚、進化せよ！ライフストリームドラゴン！」

「ライフストリームドラゴンの効果でライフ2000以下のプレイヤーのライフを2000にする。」

透 LP2000

「カードを二枚伏せてターンエンド。」

不死身の三幻魔。叫べセイヴァースタードラゴン！（後書き）

今回はここまで。

今日の最強カードはライフストリームドラゴン召喚に成功したときライフを2000まで回復してくれる。

影丸戦は次回で終わりの予定。

久しぶりの一日二回更新。

次は明日かな・・・。

後、言っておくとドッペルウォーリアーは効果を使わなかっただけです。

次回「限界を超えろ！」

お楽しみに

限界を超えろ！（前書き）

今回で三幻魔戦は終わります

限界を超えろ！

「私のターン」 影丸のターン

「神炎皇ウリアの効果で伏せカードを破壊する！

そしてハモンでライフストリームドラゴンを攻撃！」

「ライフストリームドラゴンの効果、墓地から団結の力を除外し破壊を無効にする。」

透 LP900

「幻魔皇ラビエルでライフストリームドラゴンを攻撃！」

「墓地からネクロガードナーを除外し、戦闘を無効にする！」

「神炎皇ウリアの攻撃！」

「ライフストリームドラゴンの効果で巨大化を除外！破壊を無効にする。」

透 LP0

「だがこれで貴様のライフはゼロ。貴様は負けだ。」

「だがこの瞬間最後の罨を発動！リビングデッドの呼び声。墓地から復活させるのはもちろんこいつだ！

飛翔せよ！スターダストドラゴン！駿、限界を超えろ！」

「私のターンは終了だ」

「透……。俺のターン」

駿のターン

「俺はライフストリームドラゴンの効果でスターダストドラゴンのレベルを2にする。

そしてライフストリームドラゴンはシンクロチューナーだ。」

「だが今のお前ではアクセルシンクロはできない。
あきらめろそれが貴様の限界だ」

「だったら俺は限界を超えてやる！
クリアマインド！

L V 2となったシンクロモンスタースターダストドラゴンにL V 8
のライフストリームドラゴンをチューニング！」

2 + 8 = 10

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く光さす道となれ！ アクセル
ルシンクロ！

生来せよ、シューティングスタードラゴン！」

「俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ。」

「私のターン」

影丸のターン

「何とかシューティングスタードラゴンを出したのはほめてやろう。
だがその程度のモンスターで幻魔を倒すことはできない！

貴様はその二枚の伏せカードに希望を抱いているようだがウリアの
効果で右のカードを破壊する！」

破壊されたカード

聖なるバリアミラーフォース

「フハハハハ、どうやら貴様の悪運も尽きたようだな！
神炎皇ウリアでシューティングスタードラゴンを攻撃！」

「シューティングスタードラゴンの効果で相手ターンに一度除外し
戦闘を無効にする！」

「ならば残りの二体で攻撃するのみ！」

「そうはいかない！ 罨発動！ ゼロフォース。俺の場のモンスターが
場を離れたとき、そのモンスターの攻撃力以上の攻撃力を持つモン
スターの攻撃力をすべてゼロにする！」

神炎皇ウリア A T K O

降雷皇ハモン A T K O

幻魔皇ラビエル A T K O

「バカな！ 幻魔の攻撃力がゼロ！？ これでは攻撃ができない！」

「そしてエンドフェイズシューティングスタードラゴンが戻って
くる。」

「俺のターン」

駿のターン

「シューティングスタードラゴンの効果発動、デッキの上から五枚
のカードを確認し、その中のチューナーの数だけ攻撃できる！」

引いたカード ニトロシンクロン（チューナー）

クズ鉄のかかし

ターボシンクロン（チューナー）

レベルステイラー

クイックシンクロン（チューナー）

「よって三回の攻撃ができる！

いけ！シューティングスタードラゴン！三幻魔に攻撃！

スターダストミラーージュ！」

「ぐわああああ！」

影丸 L P O

「誰だ？あの爺さん？」

「これこそが私の真の姿。若い君たちを見てもう一度やり直したくなっただが……。」

「自分の力で立てよ！」

「……十代。」

「わしが……わしが自力で立てた！」

「よっしゃ！やったぜ爺さん！」

そう言って十代が抱きつくが……。

まあ、案の定原作道理に影丸の骨が折れた。

「お年寄りの骨折はかなり長くなると聞く。」

「まあなんにせよお大事に。」

そして影丸は病院に搬送された。

「このカードは私が管理しておきます。」

「校長、あんたそれが一番不安なんだけど……。」

「……。まあ、二度と誰にも触れられないようにします。」

こうして三幻魔戦が終わった。

限界を超えろ！（後書き）

今回で一応一区切り。

少し苦しかった・・・。

今回の最強カードはシューティングスタードラゴン

一年目はもう少し続きます。

次回「エアーズロックサンライズ、満足の先の不満足」お楽しみに。

エアーズロックサンライズ。満足の先の不満足（前書き）

一応連続更新は今日までの予定。
明日はたぶん無理・・・。

エアーズロックサンライズ。満足の先の不満足

SIDE 駿

今日の授業中、前田隼人が校長室に呼びだされていた。彼とは昔は同室だったため一応面識はある。

そして十代から聞いたところによると、明日のデュエルで勝つことができたならインダストリアルリ्यूジョン社に推薦してもらえるらしい。

頑張れとしか言いようがないわけではあるが……。

SIDE 鬼柳

たった今鯨島から話を聞いてきた。明日行うデュエルに勝てばデュエルアカデミアの教師になれるってことか。

相手は誰になるのか知らねえが、俺を満足させてくれよ！

「……ということなんだが駿、俺のデッキに合うシンクロモンスターをくれ。」

「何が ということだ！ お前のデッキに合うカードなんてせいぜい鉄板くらいだ！ 探せばいくらでもありそうだが……。」
「っていうか鉄板を使え！」

「鉄板ってどういうことだ？」

「要するに代表格のカードを使い。LV5はカタストル、LV6はブリューナクとかゴヨウガーディアン

LV7は……（ブラックローズは無理だよな……。）
「ダークダイブボンバーでも突っ込んどけ！」

LV9はトリシューラかミストウォーム、LV10はディサイシブアームズで十分だ!」

「それってどれもかなりのレアカードじゃねえか! なんで自分で使ってねーんだよ!」

「つまんないから。」

「ま、まあとにかくそれらをくれ。」

「まあ、良いけど。負けたら返せよ。」

「俺が負けるかって。」

「僕に負けた。」

「い・・・いやあれは・・・。」

「まあいい。とにかく勝ってくれよ。」

「ああ、もちろんだぜ!」

翌日

「クロノス先生、よろしくお願ひしますなんだな。」

「あなたは何か勘違いしているのーね。今日のあなたの相手は私ではないのーね。」

「何だ今日の相手は隼人だったのか。」

「あ・・・あなたはこないだ幻魔の時にアクセルシンクロについて語っていたおじさんなんだな。」

「お・・・おじさんて。俺はお前らとほとんどかわんねーんだぞ!」

「よ・・・よろしく願いしますなんだな」

「俺を満足させてくれよ!」

「「デュエル」」

「俺のターンなんだな」 隼人のターン

「モンスターをセットターンエンドなんだな。 (あの人はどんなデュエルを・・・。)」

「俺のターン。」 鬼柳のターン

「無の煉獄を発動。カードを一枚ドロし、エンドフェイズに手札をすべて捨てる。」

「そ・・・そんなすべてって・・・。」

「俺は永続魔法インフェルニティガンを発動。手札からインフェルニティデーモンそ墓地に送る。」

更にインフェルニティビーストを召喚。更にカードを三枚伏せてインフェルニティビーストで伏せモンスターを攻撃!」

「伏せモンスターはデスコアラなんだな。このカードがリバースしたとき相手に手札一枚につき400ポイントのダメージを・・・はっ！」

「そう、いま俺の手札はゼロ。見せてやるよ、無敵のハンドレスコンボを！」

「は・・・ハンドレスコンボ。」

「俺はこれでターンエンド。エンドフェイズに無の煉獄の効果。最もすでに俺の手札はゼロだが・・・。」

「俺のターンなんだな。」 隼人のターン

「古のルールを発動、ビッグコアラを召喚するんだな。ビッグコアラでインフェルニティビーストを攻撃！」

鬼柳 LP2900

「カードを一枚伏せてターンエンドなんだな。」

「俺のターン」 鬼柳のターン

「俺はインフェルニティネクロマンサーを召喚。更に伏せていた天使の施しで三枚ドロ―し、二枚を捨てる。

俺はカードを一枚セット。

インフェルニティガンの効果でこのカードを墓地へ送り、墓地からインフェルニティデーモンとインフェルニティビートルを特殊召喚。インフェルニティデーモンの特殊召喚に成功したときデッキからインフェルニティと名のつくカードを手札に加える。俺はインフェル

二ティガンを手札に加える。

そして発動。

インフェルニティビートルは手札がゼロの時このカードをリリースし、デッキから二枚のビートルを特殊召喚する！

ネクロマンサーの効果、手札がゼロの時一ターンに一度墓地からインフェルニティと名のつくモンスター一体を特殊召喚する。

俺は墓地からインフェルニティドワーフを特殊召喚。LV2のインフェルニティドワーフとLV4のデーモンにLV2のビーストをチェーンニング！」

2+4+2=8

「死者と生じゃゼロにて交わりしとき永劫の檻より魔の龍は放たれる。シンクロ召喚。

いでよ！インフェルニティデスドラゴン！」

「ま・・まさかこの人もシンクロ召喚を使うなんて・・・。」

「インフェルニティデスドラゴンの効果。手札がゼロの時このターンの戦闘を放棄することで相手モンスター一体を破壊し、その攻撃力の半分のダメージを与える！」

隼人 LP 2650

「ターンエンド」

「俺のターンなんだな。」 隼人のターン

「（このカードは・・・。一年前デュエルをあきらめる約束でオーストラリア旅行に行ったときにエアーズロックからデッキを捨てる

ことですべてを忘れようとしたんだな。でもそれはできなかった。）
いま、こんなデュエルができるだけ、一年前本当にやめなくてよかったんだな。」

（！目が変わった！？そうか、この状況をあきらめないのか。本当にこいつらを見てると思いだすぜ。
不動遊星を！）

「さあ、かかってきな！もっと俺を満足させてくれよ！」

「俺はエアーズロックサンライズを発動！」

このカードは自分の墓地に存在する獣族モンスター1体を選択し自分フィールドに特殊召喚する。

その後、エンドフェイズまで自分フィールド上に表側表示で存在する獣族モンスターの攻撃力を「自分の場に存在する獣族モンスターの数一体につき200ポイントアップさせるんだな。」

墓地からビッグゴアラを特殊召喚するんだな。

そして融合、手札のデスカンガールと融合！

マスターオブOG！」

マスターオブOG ATK4400

「マスターオブOGでインフェルニティデスドラゴンを攻撃！」

鬼柳 LP1500

「俺はこれでターンエンドなんだな。」

「俺のターン。」 鬼柳のターン

「なかなか面白いデュエルだったぜ、だがお前は一つだけ見落としていることがある。」

俺の場をよく見な！」

「あっ、まさか!？」

「そう。俺はカードを一枚セット!そしてネクロマンサーの効果で墓地からインフェルニティデスドラゴンを特殊召喚!

そしてデスドラゴンの効果、マスターオブOGを破壊!そしてその半分の攻撃力2100のダメージを与える!」

「うわああああ!」

隼人 LP550

「そしてインフェルニティガンの効果でインフェルニティビーストを特殊召喚!

インフェルニティビーストでダイレクトアタック!」

「俺は罠カード聖なるバリアミラーフォースを発動!」

「残念だがそうはいかない。ビーストの効果、手札がゼロの時このカードが攻撃する間罠を発動することはできない。」

隼人 LP0

「シニョール前田、進級試験の結果はあなたの負けなのーね。」

「はい。」

「しかし、デュエルの内容はわずかながらもシンクロモンスターに食らいついている点、デュエルで絶対にあきらめなかったこと。そしてカードたちを最大限に使っていました。

よってデュエルアカデミア実技最高責任者としてあなたをインダストリアルイリユージョン社に推薦するのーね。
あなたは私の誇りなのーね。」

「あ……ありがとうございます。」

「隼人。」

「き……鬼柳さん。」

「楽しかったぜ！今度はもっと満足させてくれよ！」

「ありがとうございますましたなんだな。」

こうして隼人はインダストリアルイリユージョン社のデザイナーに鬼柳はデュエルアカデミアの教師になることができた。

エアーズロックサンライズ。満足の先の不満足（後書き）

今回の最強カードはエアーズロックサンライズ
墓地の獣族を蘇生できる！

次回「リターンマッチ！サイバー流対シンクロモンスター」お楽しみに

リターンマッチ！サイバー流対シンクロモンスター（前書き）

今回は丸藤亮とのデュエルの最初のほうで終わります。

リターンマッチ！サイバー流対シンクロモンスター

SIDE 丸藤亮

「罨発動、ファイナルフージョン！俺達はお互いのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける！行くぜカイザー！」

「来い！十代！」

十代・亮 L P O

これで良かったんだ。最後の最後に十代と本気のデュエルができた。俺はこれで満足なはずだ。

「本当にこれで満足したのか？」

この人は確か今度からここの教員になる

「鬼柳京介……。」

「名前を覚えてもらってて光栄だね。」

そりゃ忘れるわけないだろ！この学園で数少ないシンクロモンスターの使い手……。

「ところでさっきのはどういう意味です？」

「いや、負けっぱなしでリベンジとかせずに卒業していいのか？」

俺は知ってるぜ、お前がこの学園で唯一負けた相手古城駿とあれ以来戦っていないということを！」

「リベンジなんて俺には合いません。」

俺はリベンジなんてリスpektと離れたものだと思っている。

「そういや聞いた話じゃお前はプロに行くらしいじゃねえか。その前に奴とのデュエルで学ぶこともあるんじゃないか？少なくとも俺だったらそうする。」

負けっぱなしは満足できねえからな！

それに今までリスpektとか言って本当は自分の満足できるデュエルができていなかったんじゃないのか？」

「……。」

この人の言っていることはあながち間違いではない。しかし俺は決して手加減していたわけではない。

「まあ、どちらにしても決めるのはお前だ。これをやる。」

そう言っあの人俺に折りたたんだメモ用紙を渡してきた。

「ここには古城駿の連絡先が書いてある。」

奴とデュエルするならここに電話してみたらどうだ？」

「ありがとうございます」

確かに俺はまだ満足できていないかもしれない。

リベンジとか関係なしに、奴は十代と同じくらい無限の可能性を秘めている。

この学園での本当に最後のデュエル、その相手はあいつしかない！
実を言うと俺は最初十代か駿かで迷っていた。

結果的に十代を選んだがよく考えたら選ぶ必要なんてなかった！
両方とやればよかったのだ！

SIDE 駿

皆さんこんにちは毎度おなじみ古城駿です。カイザーこと丸藤亮と
十代のデュエルが終わって今部屋で寝ているところ・・・。

なんか暇。

暇と言えば暇を持て余してるときにあらわれた神にこの世界に連れて
こられて早一年。

時が流れるのは早いものだね。

そんなことを考えていたら電話がかかってきた。

「もしもし古城です。」

「丸藤亮だ。」

！？カイザーからだ！何でこの人電話番号知っているんだろう？

「何で番号を知ってるんですか？」

「鬼柳先生に教えてもらった。」

「・・・あいつめ！」

なんか面倒なことになりそうだ・・・。

「ところで何の用ですか。」

「ああ、単刀直入に言う。俺とデュエルしてくれ！」

「デュエルしたいなら卒業デュエルの相手として選んでくれればよかったのに……。」

いま選ばれなくて機嫌が悪かったから断る。」

「まあ、そういうな。鬼柳からお前とデュエルしたら満足できるぜ！みたいなことを言われたからな。」

「あの人なら言いかねない……。別にいいけど、何時？どこで？」

「今日の夜七時から場所はレッド寮前。」

ギャラリィは原則なし。ただ七正門のカギを持っていたメンバーと、鬼柳京介、矢吹透、それから吹雪をくわえさせてくれ。」

「わかったいいだろう。」

「お前の一番自信のあるデッキで来い！」

その夜……。

「待っていたぞ！駿！」

「楽しませてくれよ！カイザー亮！」

「「デュエル」」

「俺の先行だドロ」

カイザーのターン

「俺は融合を発動、手札から三枚のサードドラゴンを融合！

サイバーエンドドラゴンを融合召喚！

カードを一枚伏せてターンエンド」

「僕のターン」

駿のターン

「僕はジャンクシンクロンを召喚！更にジャンクサーヴァントを特殊召喚！

L V 4のジャンクサーヴァントにL V 3のジャンクシンクロンをチューニング！」

4 + 3 = 7

「集いし怒りが忘我の戦士に寄進を宿す、光さす道となれ！シンクロ召喚 唸れ！ジャンクバーサーカー」

「ジャンクバーサーカーの効果、ジャンクサーヴァントを除外しその攻撃力分サイバーエンドの攻撃力を下げる。

ジャンクバーサーカーは自分の墓地に存在するジャンクと名のついたモンスターを除外することで相手モンスター一体の攻撃力を除外したモンスターの攻撃力分下げる！」

サイバーエンドドラゴン ATK 2500

「ジャンクバーサーカーの攻撃！」

「速攻魔法融合解除！」

「ならばサイバードラゴンに攻撃！」

「カードを一枚伏せてターンエンド」

リターンマッチ！サイバー流対シンクロモンスター（後書き）

今回はここまで。

今回の最強カードはジャンクバーサーカー墓地のジャンクを除外すること、で相手モンスター一体の攻撃力を除外したモンスターの攻撃力分ダウンさせる！

丸藤亮とのデュエルは2～3回に分けて行います。

サイバーツインの猛攻

「俺のターン」

亮ターン

「強欲なつばを発動、カードを二枚ドロウする。」

「俺は融合を発動、サイバードラゴン二体を融合！サイバーツインドラゴンを融合召喚。」

「サイバーツインドラゴンでジャンクバーサーカーを攻撃！エヴォーリューションツインバースト！」

駿 LP3900

「サイバーツインの二回目の攻撃！」

「罨発動！ガードブロック！戦闘ダメージを無効にし、カードを一枚ドロウする。」

「ターンエンド」

「僕のターン」

駿のターン

「俺はレベルステイラーを墓地に送り、クイックシンクロンを特殊召喚！

チューニングサポーターを召喚！LV1のチューニングサポーターにLV5のクイックシンクロンを チューニング。」

1+5=6

「集いし力が大地を貫く槍となる。光さす道となれ！
シンクロ召喚。砕けドリルウォーリアー！」

「ドリルウォーリアーは攻撃力を半分にし、ダイレクトアタックができる！」

ドリルウォーリアーでダイレクトアタック！」

丸藤亮 LP2800

「ドリルウォーリアーは手札一枚を墓地に送り、次のじぶんのスタンバイフェイズまで除外する！
ターンエンド。」

「俺のターン」 亮のターン

「サイバーツインドラゴンで攻撃！」

「手札から速攻のかかしを捨ててバトルフェイズを終了させる！」

「ターンエンド」

「僕のターン」 駿のターン

「このスタンバイフェイズにドリルウォーリアーが戻ってくる。そしてドリルウォーリアーの効果で速攻のかかしを手札に戻す。
ドリルウォーリアーでダイレクトアタック！」

亮 LP1600

「手札を一枚捨ててドリルウォーリアーを除外！ターンエンド。」

「俺のターン。」 亮のターン

「俺は異次元からの埋葬でドリルウォーリアーを墓地に戻す！これでドリルウォーリアーは戻ってこない！そしてサイバーツインドラゴンでダイレクトアタック。」

「速攻のかかしを墓地に送り、ダイレクトアタックを無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「カードを一枚伏せてターンエンド。」

「僕のターン」 駿のターン

「僕は貪欲なつばを発動。墓地から速攻のかかし、ジャンクシンクロン、クイックシンクロン、ドリルウォーリアー、ジャンクバーサーカーをデッキに戻し、二枚ドロ。」

カードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン」 亮のターン

「俺は融合解除を使いサイバーツインドラゴンの融合を解除、更に死者蘇生を発動。」

墓地からサイバードラゴンを特殊召喚。

魔法カードパワーボンド！三体のサイバードラゴンを墓地へ送り、サイバーエンドドラゴンを融合召喚！

パワーボンドの効果でサイバーエンドの攻撃力は倍となる！」

サイバーエンドドラゴン ATK8000

「サイバーエンドドラゴンでダイレクトアタック！
エターナルエヴォリューションバースト！」

サイバーツインの猛攻（後書き）

今回はここまで。何かいつもに増して短い・・・。
次はもっと短いかもしれない。

今回の最強カードはドリルウォーリアー攻撃力を半分にすることで
ダイレクトアタックができる。

一応カイザー亮戦は次回が最後です。

次回「ETERNAL REVOLUTION BURST!」
楽しみに
お

ETERNAL REVOLUTION BURST (前書き)

遊戯王はほんと久しぶりですね。
一応今回でカイザー戦が終わります。

ETERNAL REVOLUTION BURST

状況

駿LP3900 伏せ1

亮LP1600 伏せ1

「サイバーエンドドラゴンでダイレクトアタック！
エターナルエヴォリュションバースト！」

「罨発動！クズ鉄のかかし。攻撃を無効にし、このカードをセットし直す。」

「天使の施し。そして罨カードレインボーライフを発動。手札を一枚捨てこのターン受けるダメージをライフを回復する効果に変える。そしてエンドフェイズにパワーボンドの効果で4000ポイントのダメージを受けるが
レインボーライフの効果でライフを回復する。」

丸藤亮 LP5600

「僕のターン」

駿のターン

「強欲の壺を発動！カードを二枚ドロウする。」

手札からワンフォーワンを発動。手札からレベルスティーラーをすて、デッキからチューニングサポーターを特殊召喚する！

更に手札のモンスターカード、カードガンナーを墓地へ送り、クイックシンクロンを特殊召喚！」

「レベルの合計は6・・・もしくは7。だが、そのどちらでもサイバーエンドは倒せない！」

「さあ、どうだろう？LV1のチューニングサポーターにLV5のクイックシンクロンをチューニング！」

「ドリルウォーリアーでダイレクトアタックするつもりか？」

1＋5＝6

透「成程・・・そういうことか・・・。」

十代「駿の考えがわかったのか？」

透「ああ。あのカードを使えばサイバーエンドを倒せるかもしれない。」

校長「それは一体どんなカードなのですか？」

「「「こ・・・校長!？」」」

透「どうしているんですか？」

校長「いや、亮が駿君とデュエルするということでこっそり・・・。」

透「そうでしたか・・・。」

校長「ところでどんなカード何ですか!?今のサイバーエンドを倒せるカードというのは!？」

透「見ていればわかります。あれがパワーボンドの抜け道です。」

「疾風の使者に鋼の願いが集うとき、その願いは鉄壁の盾となる、光さす道となれ！シンクロ召喚現れるジャンクガードナー！」

「ジャンクガードナーだと！？」

十代「あつ、俺あのカード知ってる！！」

校長「あれがサイバーエンドを倒す切り札……。」

「ジャンクガードナーの効果、一ターンに一度相手モンスター一体の表示形式を変更する。

サイバーエンドを守備表示に！」

サイバーエンドドラゴン DEF2800

校長「そうか！パワーボンドで上がるのは攻撃力だけ！つまり守備表示にしまえば勝てる！」

十代「その手があったか！流石駿だぜ！」

透「だがそれでもサイバーエンドドラゴンの守備力は2800。どうする？」

「チューナーモンスターデブリドラゴンを召喚！」

デブリドラゴンの効果で墓地から攻撃力500以下のモンスター一体を効果を無効にし特殊召喚する。

墓地からカードガンナーを特殊召喚！

更にレベルスティーラーは自分の場のレベル5以上のモンスター一体のレベルを下げること墓地から特殊召喚できる！」

LV3のカードガンナーとLV1のレベルスティーラーにLV\$の

デブリドラゴンをチューニング！」

3+1+4=8

「集いし願いが新たに輝く星となる、光さす道となれ！シンクロ召喚。

飛翔せよ！スターダストドラゴン！！」

「だがスターダストでも2800を超すことはできない。」

透「これは駿のミスなのか？」

十代「ミス？」

透「シンクロ召喚にはその状況に応じたカードが出せるのが利点の一つだ。

今の状況、同じレベルなら攻撃力3000のレッドデーモンズドラゴンを出すことは最低でもできた。

だが、それをあえてスターダスト。これはミスなのか？

それともまだ考えがあるのか？それはこの先を見ない限り判断はできない。」

「更に天よりの宝札。お互いに手札が六枚になるようにドロウする。そして手札のグローアップバルブを墓地に送り、ビッグワンウォーリアーを特殊召喚！」

透「ミスじゃなかったみたいだな。」

「グローアップバルブの効果発動。デッキの一番上を墓地に送り、墓地から特殊召喚する！」

そしてLV1のビッグワンウォーリアーにLV1のグローアップバ
ルブをチューニング！

1＋1＝2

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンク
ロ召喚。

希望の力、フォーミュラシンクロン！」

「一ターンに三度のシンクロだと！？」

「まだだ！フォーミュラシンクロンの効果で一枚ドロー。
クリアマインド！LV8シンクロモンスターダストドラゴン
に、LV2フォーミュラシンクロンをチューニング！」

8＋2＝10

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！
アクセルシンクロ！生来せよシューティングスタードラゴン！」

十代「出た！シューティングスタードラゴン！！」

透「これならいけるかもしれない。」

「シューティングスタードラゴンの効果発動！
一ターンに一度デッキの上から五枚を確認し、その中のチューナー
モンスターの数だけ攻撃ができる！」

引いたカード　ドリルシンクロン

ジャンクサーバント

エフエクトヴェーラー チューナー

速攻のかかし

ジャンクシンクロン チューナー

「合計三回の攻撃ができる！行け！シューティングスタードラゴン。スターダストミラージュ！」

透「サイバーエンドが破壊された！」

校長「これで後に回の攻撃が通れば・・・。」

十代「駿の勝ちだぜ！！」

「シューティングスタードラゴン、二回目の攻撃！
スターダストミラージュ！」

丸藤 亮 LP 2300

「三回目！スターダストミラージュ！」

十代「これで駿の勝ちだ！！」

「まだまだ！ガードブロック発動！戦闘ダメージをゼロにし一枚ドロ
ー！」

危なかった。後一枚チューナーを引いていれば俺の負けだった。」

「一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン」 亮のターン

「!?(このカードは……)」

死者蘇生を発動。サイバーエンドドラゴンを特殊召喚!俺は王宮の鉄壁を発動。

サイクロンで伏せカードを破壊。

サイバーエンドでシューティングスタードラゴンを攻撃!」

「シューティングスタードラゴンの効果。相手ターンに一度除外し、戦闘を無効にする。」

「俺の場に王宮の鉄壁があることを忘れたか!シューティングスタードラゴンは除外できない。」

「ジャンクガードナーの効果!相手モンスター一体の表示形式を変更できる。」

「罨カードデモンズチェーン!この効果でジャンクガードナーの効果を無効!」

「シューティングスタードラゴン……。」

十代「そんな……。シューティングスタードラゴンが……。」

透「破壊された。」

「俺はこれでターンエンドだ。」

「俺のターン」 駿のターン

「カードを一枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン」 亮のターン

「サイバーエンドドラゴンでジャンクガードナーを攻撃！
エターナルエヴォリューションバースト！」

古城駿 LP2500

「融合解除！サイバーエンドドラゴンの融合を解除！
サイバードラゴンでダイレクトアタック！」

「罠発動！シンクロスピリッツ！
墓地からシューティングスタードラゴンを除外し
スターダストドラゴンとフォーミュラシンクロンを特殊召喚！」

「サイバードラゴンでフォーミュラシンクロンを攻撃！
俺は貪欲なつぼを発動。」

墓地からサイバードラゴン、サイバーエンドドラゴン、サイバーツ
インドラゴン、サイバーフェニックス
プロトサイバードラゴンをデッキに戻し二枚ドロ。

融合を発動！場のサイバードラゴン二体と手札のサイバードラゴン
を融合。

来い！サイバーエンドドラゴン。

ターンエンド」

「俺のターン」 駿のターン

「天使の施しを発動。三枚ドロし、二枚を墓地に送る。

（来た！）墓地からスターダストシャオロンの効果発動！

俺の場にスターダストドラゴンが存在するとき墓地から特殊召喚で
きる！

永続罨エンジェルリフトを発動！墓地から召喚するのは・・・。
救世竜セイヴァードラゴン！」

透「ここでセイヴァードラゴンを使うのか！？」

「LV8のスターダストドラゴンとLV1のスターダストシャオロ
ンに、LV1のセイヴァードラゴンをチューニング！」

8+1+1=10

「集いし星の輝きが新たな奇跡を照らしだす。光差す道となれ。シ
ンクロ召喚。光来せよセイヴァースタードラゴン。」

「だが、そのモンスターでもサイバーエンドには届かない。」

「罨発動！シンクロバトン！」

墓地に存在するシンクロモンスター×600ポイントシンクロモン
スターの攻撃力を上げる！

今、俺の墓地には合計三体のシンクロモンスターが居る。よって1
800ポイントアップ！」

セイヴァースタードラゴン ATK5600

「更にシンクロストライク。素材モンスター×500ポイント攻撃
力をアップさせる！」

セイヴァースタードラゴン ATK7100

「攻撃力7100だと！？」

「（あんたが言うなよ・・・。）

行くぞ！セイヴァースタードラゴン！サイバーエンドドラゴンに攻撃！

シューティングブラスターソニック！！」

「ぐわあああああ！！！」

丸藤亮 L P O

十代「凄いぜ駿！カイザーに勝つなんて！」

透「流石だな。」

校長「駿君大変いいデュエルでしたよ。」

「古城駿。今回は俺の負けだ。だが、とても楽しかった。この学園の最後にお前と十代。二人とともに素晴らしいデュエルができたことを俺は誇りに思う。」

「カイザー。楽しかったよ。またやろう。」

こうしてカイザーは卒業した。

ETERNAL REVOLUTION BURST (後書き)

今回はここまで。

駿「今回の最強カードはシンクロバトン。

墓地に存在するシンクロモンスターの絆で攻撃力をアップさせる！」

次回から二年目に入る予定です。

とりあえず江戸・・・じゃなくてエドは出ると思います。

次回 「二年目突入！」

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9914o/>

遊戯王デュエルモンスターズGX 原作大崩壊物語

2011年8月31日23時13分発行